



## 第2章

### 資産の説明

## 第 2 章 資産の説明

### 2.a 資産の説明

本資産は、禁教時代の長崎と天草地方<sup>1</sup>において、既存の社会・宗教とも共生しつつ信仰を継続した潜伏キリシタン<sup>2</sup>の伝統の証拠となる遺産群である。それらは、(1)潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統の形成の段階から、(2)その多様な展開及び(3)移住による信仰組織の維持の段階を経て、(4)新たな信仰の局面の到来及び伝統の変容・終焉の段階に至るまでの 12 の構成資産から成る。

それらは、大航海時代のアジアにおけるキリスト教宣教地の東端である日本列島の中で、最も集中的に宣教が行われた長崎と天草地方の半島部及び島嶼部に点在している。

(I)伝統が始まり形成される契機となった原城跡は、島原半島南部に所在する。(II)潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統の多様な形態を表す 4 つの集落は、西彼杵半島の外海・平戸島・天草下島に存在する。また、(III)開拓移住を通じて信仰組織の維持を意図した潜伏キリシタンの戦略を表す 4 つの集落は、黒島から五島列島に至る 4 つの島嶼に存在する。(IV)江上集落（江上天主堂とその周辺）は五島列島の奈留島に所在し、新たな信仰の局面が到来する舞台となった大浦天主堂は、禁教期を通じて海外との窓口の役割を担った港町長崎にそれぞれ所在する。

#### 1

本推薦書において「長崎と天草地方」とは、日本列島を構成する主要な島である九州島の西側に位置する地域で、現在の長崎県及び瀬戸を挟んで隣接する熊本県天草市にあたる区域を指す。

#### 2

本推薦書では、キリスト教禁教期の日本において密かにキリスト教由来の信仰を継続していた人々のことを指す。なお、16 世紀を中心とする禁教期以前のキリスト教徒のことを、同時代の日本ではポルトガル語由来の「キリシタン」と呼んだ。また、禁教が解けた 19 世紀後半以降、禁教期以来の信仰を継続した人々のことを「かくれキリシタン」と呼ぶ。詳しくは本推薦書 P.195 を参照されたい。



## (I) 「信仰の継続に関わる伝統の開始・形成」の段階とその構成資産

大航海時代を背景として 16 世紀半ばに来日した宣教師は、貿易による利潤を目当てに宣教師と接触を図ってきた長崎と天草地方の地方領主を最初に改宗させ（以下、「キリシタン大名」と呼ぶ。）、その後に彼らの領民を集団で改宗させることによってキリスト教を広めていった。改宗した民衆の間には「慈悲の組」及び「コンフラリア」（以下、「組」と呼ぶ。）などの信仰組織がつくられ、それぞれの集落にキリスト教が深く根付いていった。

16 世紀末、豊臣秀吉<sup>3</sup> は日本統一に向けた動きのなかでキリスト教の禁教を開始した。17 世紀に入って江戸幕府を開いた徳川家康<sup>4</sup> は、当初キリスト教を黙認したものの、1614 年に全国的な禁教令の下に宣教師を国外へと追放し、教会堂の破壊を行った。それに伴い、キリシタン大名など、かつてキリスト教を積極的に取り入れた支配階級は棄教して仏教へと改宗した。密かに潜入する宣教師及び彼らを匿った信者には過酷な拷問が加えられて処刑された。このように、一般民衆へのキリシタン探索も次第に強化されるようになった。

各地で厳しい弾圧が行われる中で、1637 年には「島原・天草一揆」が勃発し、2 万人を超える百姓が武装蜂起した。一揆勢のほとんどはキリシタンであり、組織的に連携して**原城跡（構成資産 001）**に立て籠もったが、幕府軍によりほぼ全員が殺され、一揆は鎮圧された。この事件を契機として、江戸幕府は幕府の目を盗んで新たな宣教師が入国する可能性を確実に排除するため、ポルトガル船の来航を禁止する

**3**

日本において 16 世紀末に全国を統括した武将。

**4**

豊臣秀吉の後に将軍として日本を統括した武将。



原城跡（構成資産 001）

海禁体制を確立した。その後、1644 年に最後の宣教師が殉教すると、ついに日本の国内に宣教師は不在となり、キリシタンは宣教師に導かれることなく自分たち自身で信仰を続けていかなければならなくなった。

本資産に含まれる原城跡は、このような一連の禁教及び海禁体制確立の契機となった重要な場所であり、信仰の継続に関わる伝統が始まり、形成された段階を表す構成資産である。

## (II) 「信仰の継続に関わる伝統の多様な展開」の段階とその構成資産

日本各地には、宣教師との接触が絶たれた後も、厳しい探索をかいぐり、潜伏して信仰を続けることを選択した「潜伏キリシタン」が存在した。しかし、17 世紀後半に日本の各地で「崩れ」と呼ぶ大規模な潜伏キリシタンの摘発事件が相次いで発生し、その結果、一部の例外を除き日本各地の潜伏キリシタンは途絶えた。その例外となった地域がかつての宣教拠点であり、他の地域に比べて長期にわたる宣教師の指導の下に組織的な信仰の基盤が整っていた長崎と天草地方であった。従って、潜伏キリシタンが自らの信仰を継続した伝統の証拠となる資産は、長崎と天草地方にのみ存在する。

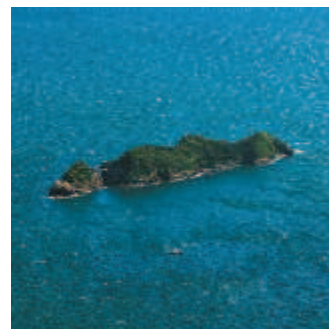
長崎と天草地方の潜伏キリシタンは、16 世紀の信徒たちの信仰を強化・維持するために各地に設立された共同体を基盤として、それぞれの集落内に信仰組織を編成し<sup>5</sup>、宣教師に代わって洗礼を受ける「水方」及び教会暦を司る「帳方」など、役職を担当する指導者を中心として、キリシタンの信仰に関わる儀礼・行事などを行った。

5

信仰組織の構造は集落ごとにひとつずつ存在した場合のみならず、複数の信仰組織から成るひとつのクラスターが各集落単位で存在する場合もあった。このような集落内における信仰組織の在り方については、資産全体の完全性の観点から構成資産の選択及びその範囲を検討する上でも重要な指標とした。(本推薦書 P.212 参照)



平戸の聖地と集落（構成資産 002）



平戸の聖地と集落（構成資産 003）



天草の崎津集落（構成資産 004）

既存の自然崇拝に重ねて山岳やキリシタンの処刑の行われた島を崇敬し（**平戸の聖地と集落（構成資産 002 及び 003）**）、生活・生業に根差した身近なものを信心具として代用して崇敬した（**天草の崎津集落（構成資産 004）**）ほか、マリア像などの聖画像に対して密かに祈りを捧げ、教会暦・教理書を信仰のよすがとし（**外海の出津集落（構成資産 005）**）、既存集落では古来の神社に密かに自分たちの信仰対象を重ねる（**外海の大野集落（構成資産 006）**）などして、秘匿を基本とする信仰形態を育んだ。

250 年もの長期間にわたって、キリシタンが潜伏し、信仰を継続することができた背景には、取締を行う幕府の側に、本人が信仰を表明しない限り密告も処罰もしないなどの「黙認」の姿勢も存在した。潜伏キリシタンによる「秘匿」と社会的な「黙認」との微妙な均衡の下に、既存の社会・宗教とも共生しつつ自らの信仰を継続しようとする潜伏キリシタンの伝統が育まれたのである。

本資産のうち、4つの集落は、いずれも潜伏キリシタンの信仰に関わる伝統が多様な展開を遂げた段階を表す集落である。

### （Ⅲ）「移住による信仰組織の戦略的維持」の段階とその構成資産

18 世紀の終わりになると、大村藩に属する西彼杵半島西岸の外海では人口が増加し<sup>6</sup>、五島藩と大村藩との協定<sup>7</sup>の下に開拓移住が行われた。開拓移住者の中には多くの潜伏キリシタンが含まれていたことから、新たに島嶼部各地に潜伏キリシタンの集落が形成された。潜伏キリシタンは、各島嶼の既存の社会・宗教との折り合いを付けつつ、信仰組



外海の出津集落（構成資産 005）



外海の大野集落（構成資産 006）

#### 6

外海は斜面地という地形上の制約から農作物の収量が高くなかったが、潜伏キリシタンは信仰上の理由で産児制限をしなかったため、集落の人口は増加し、社会問題となった。

#### 7

五島藩と大村藩の間で結ばれた余剰人口の移住に関する協定。五島藩の『公譜別録拾遺』には、「寛政 9 年（1797）藩主盛運、大村の農民 108 人を五島に移し、田地を開墾せしむ」と記されている。



織を維持することを意図して、移住先を定めた。例えば、藩の牧場の跡地利用のため再開発の必要があった黒島及び神道の聖地である野崎島へと入ったほか、疱瘡患者の隔離地として忌避された頭ヶ島、藩の政策に乗じて未開地であった久賀島を移住地として選択した。

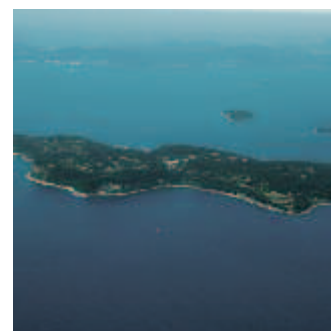
**黒島の集落（構成資産 007）、野崎島の集落跡（構成資産 008）、頭ヶ島の集落（構成資産 009）及び久賀島の集落（構成資産 010）**は、潜伏キリシタンの移住による信仰組織の戦略的維持の段階を表す代表的な集落である。

#### (IV) 「信仰における新たな局面が到来し、信仰の継続に関する伝統が変容・終焉」した段階とその構成資産

1854 年、アメリカをはじめとする西欧諸国からの相次ぐ開国の要求を受けて、江戸幕府は下田及び箱館<sup>8</sup>を開港した。長崎も同年に開港し、長崎へと入った宣教師は居留地に住む西洋人のために大浦天主堂を建造した。建造直後の 1865 年、大浦天主堂にいた神父に対し、密かに信仰を継続してきた潜伏キリシタンたちが信徒であることを告白した（信徒発見）。この衝撃的な出来事により、長崎と天草地方の潜伏キリシタンは新たな局面を迎えることとなった。

各地の潜伏キリシタン集落の指導者は、密かに宣教師との接触を開始した。しかし、それぞれの集落では宣教師の指導下に入るのか、これまでの信仰を続けるのかの判断を迫られ、時には対立事件にまで発展することもあった。1868 年当時、キリスト教はまだ解禁されていなかったため、潜伏キリシタンであることを表明した集落には再び厳しい弾圧が加えられた。

1873 年、ついにキリスト教が解禁されると、潜伏キリシ



黒島の集落（構成資産 007）



野崎島の集落跡（構成資産 008）



頭ヶ島の集落（構成資産 009）



久賀島の集落（構成資産 010）

タンのうち宣教師の指導下に入ることを決めた者はカトリックへと復帰し、かつての指導者の屋敷などを「仮の聖堂」**9**として新たな信仰活動を開始した。その一方、宣教師の指導下に入ることを拒んだ者は、引き続き自分たちの信仰形態にとどまった（彼らを「かくれキリシタン」と呼ぶ。）。また、在来の神道・仏教へと改宗する者もあった。

解禁から 10 年が経過した頃から、集落内の「仮の聖堂」などを祈りの場としていたかつての潜伏キリシタンは、新たに素朴な教会堂を建造し始めた。これらの教会堂は、カトリックの信仰活動が復活したことを表す存在であったのみならず、2 世紀半にも及ぶ禁教の下で、長崎と天草地方の各地に形成された潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が、当該集落において終焉したことを象徴的に示す存在でもあった。本資産に含まれる**奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）（構成資産 011）**の江上天主堂は、外海から移住した潜伏キリシタンがカトリックへと復帰し、江上の地勢に適応して建造した木造教会堂である。それは当該地域の風土に基づく在来の技術の在り方を示すとともに、潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が変容・終焉した段階を示す教会堂の代表例である。

大浦天主堂は、日本人の司祭及び伝道師の育成の場として重要な役割を果たした。彼らは長崎と天草地方の各地へ派遣され、潜伏キリシタンのカトリックへの復帰を促す重要な原動力の役割も果たすこととなった。**大浦天主堂（構成資産 012）**は、新たな信仰の局面の到来及び潜伏キリシタンの伝統の変容・終焉の契機となった「信徒発見」の場所である。

**8**

現在の静岡県下田市及び北海道函館市。

**9**

禁教期以来の信仰指導者の屋敷をカトリックの信仰活動の場とした（一般に「家御堂」と呼ばれる）ほか、簡素な小屋を建造して信仰活動の場とした信仰組織もある。

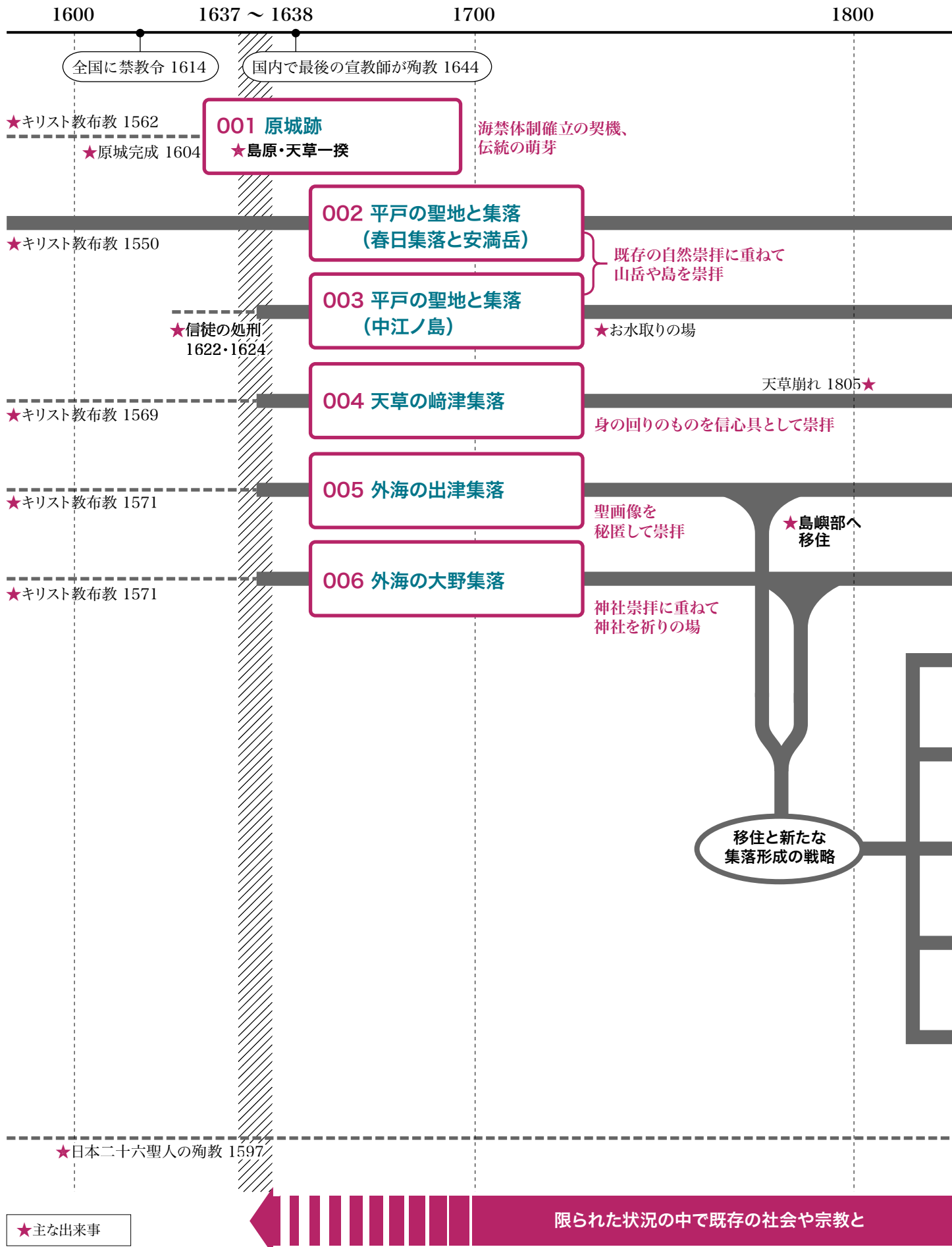


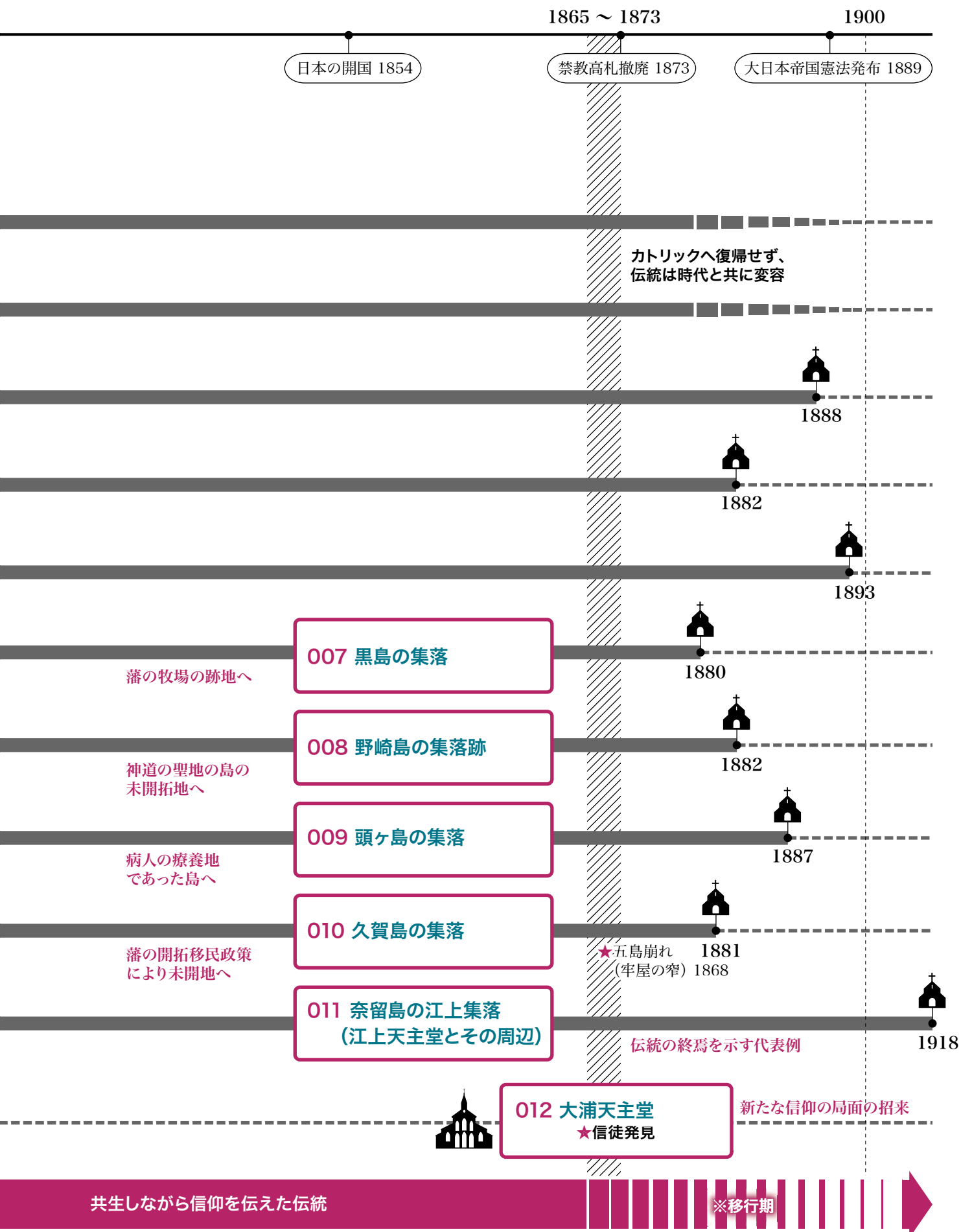
奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）（構成資産 011）



大浦天主堂（構成資産 012）

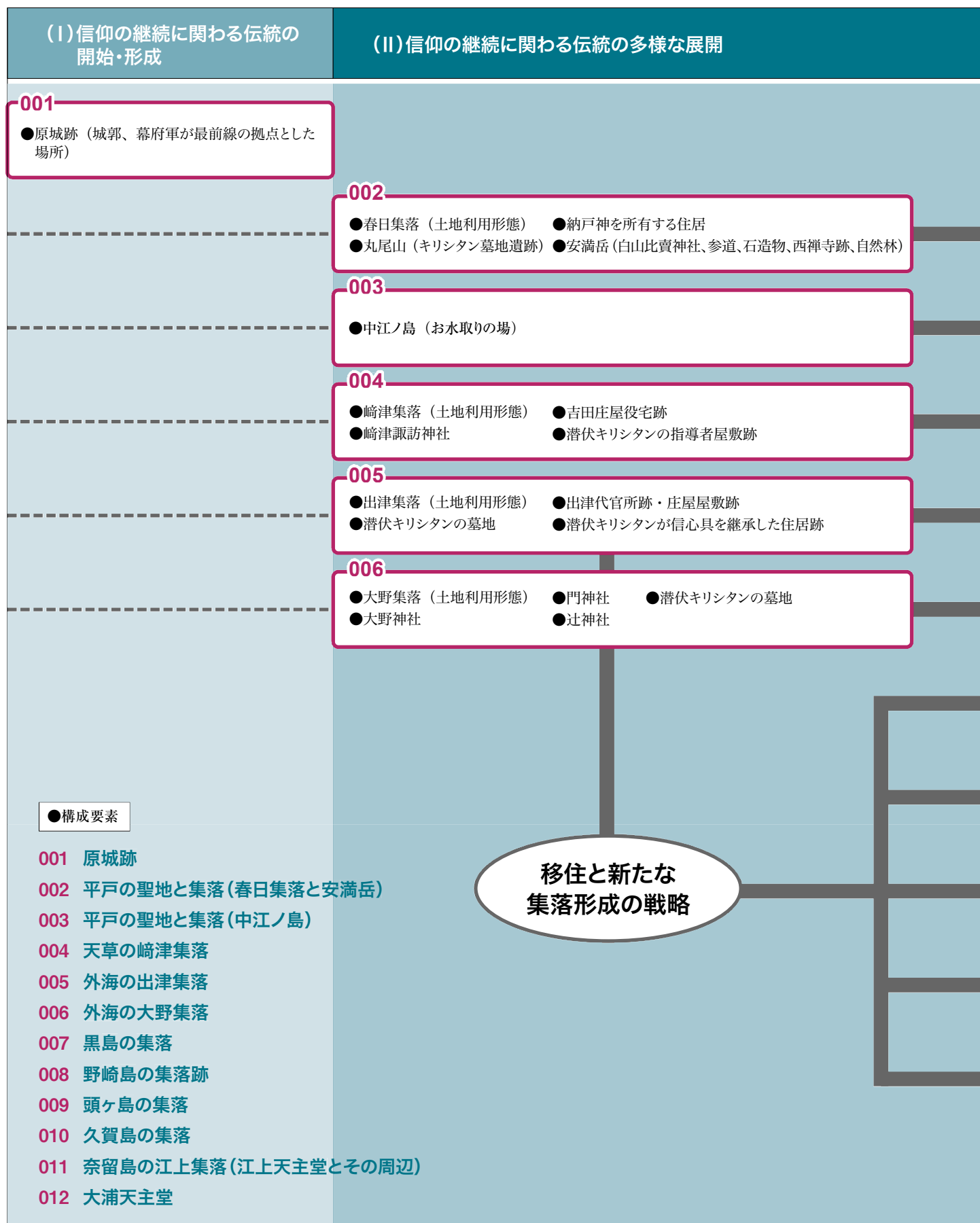
# 潜伏キリシタンに関連する主な出来事(年表)







# 各構成資産において OUV に貢献する要素(物的証左)



(Ⅲ) 移住による信仰組織の戦略的維持	(Ⅳ) 信仰における新たな局面が到来し、 信仰の継続に関する伝統が変容・終焉
	●初代崎津教会堂跡
	●小濱浦    ●「仮の聖堂」跡    ●出津教会堂
	●大野教会堂
007	●黒島の集落（土地利用形態）    ●本村役所跡    ●潜伏キリシタンの指導者屋敷跡    ●初代黒島教会堂跡 ●興禪寺    ●潜伏キリシタンの墓地（「仮の聖堂」跡）
008	●野崎島の集落跡（土地利用形態）    ●神官屋敷跡    ●潜伏キリシタンの指導者屋敷跡    ●初代野首教会堂跡 ●沖ノ神嶋神社    ●潜伏キリシタンの墓地    ●「仮の聖堂」跡    ●瀬戸脇教会堂跡
009	●頭ヶ島の集落（土地利用形態）    ●前田儀太夫墓    ●潜伏キリシタンの指導者屋敷跡    ●初代頭ヶ島教会堂跡 ●頭ヶ島白浜遺跡（墓地遺跡）    ●「仮の聖堂」跡
010	●久賀島の集落    ●仏教徒と潜伏キリシタンとが協働した作業場    ●牢屋の窄殉教地    ●永里教会堂跡    ●赤仁田教会堂跡 （土地利用形態）    ●潜伏キリシタンの墓地    ●浜脇教会堂跡    ●細石流教会堂跡    ●旧五輪教会堂
011	●集落の地形・地勢    ●初代教会堂跡地及びその立地 ●江上天主堂
	012 ●大浦天主堂及びその境内    ●旧羅典神学校 ●旧長崎大司教館    ●旧伝道師学校

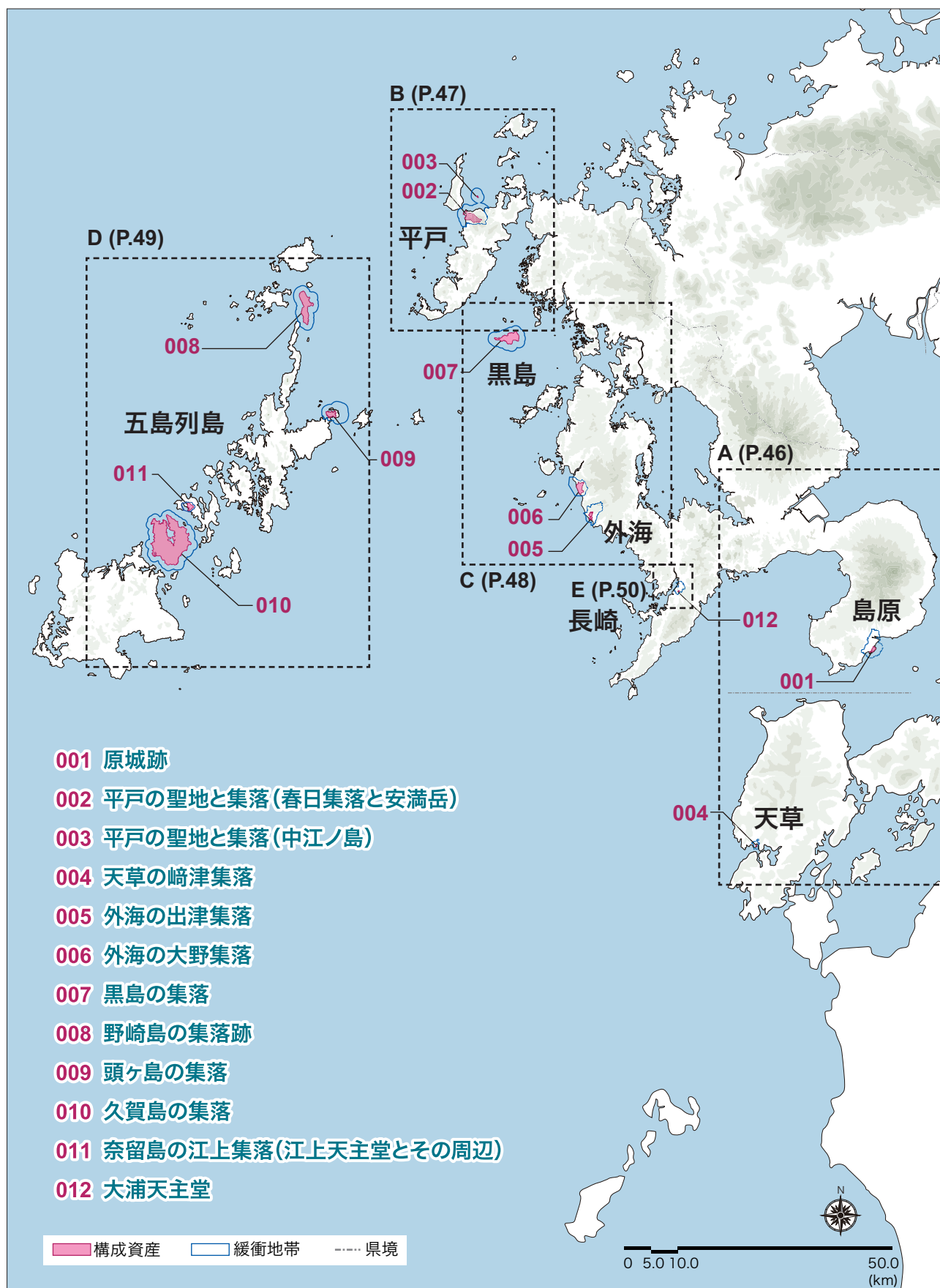


図2-001 構成資産の位置図



図2-002 構成資産の位置図 (Map A)

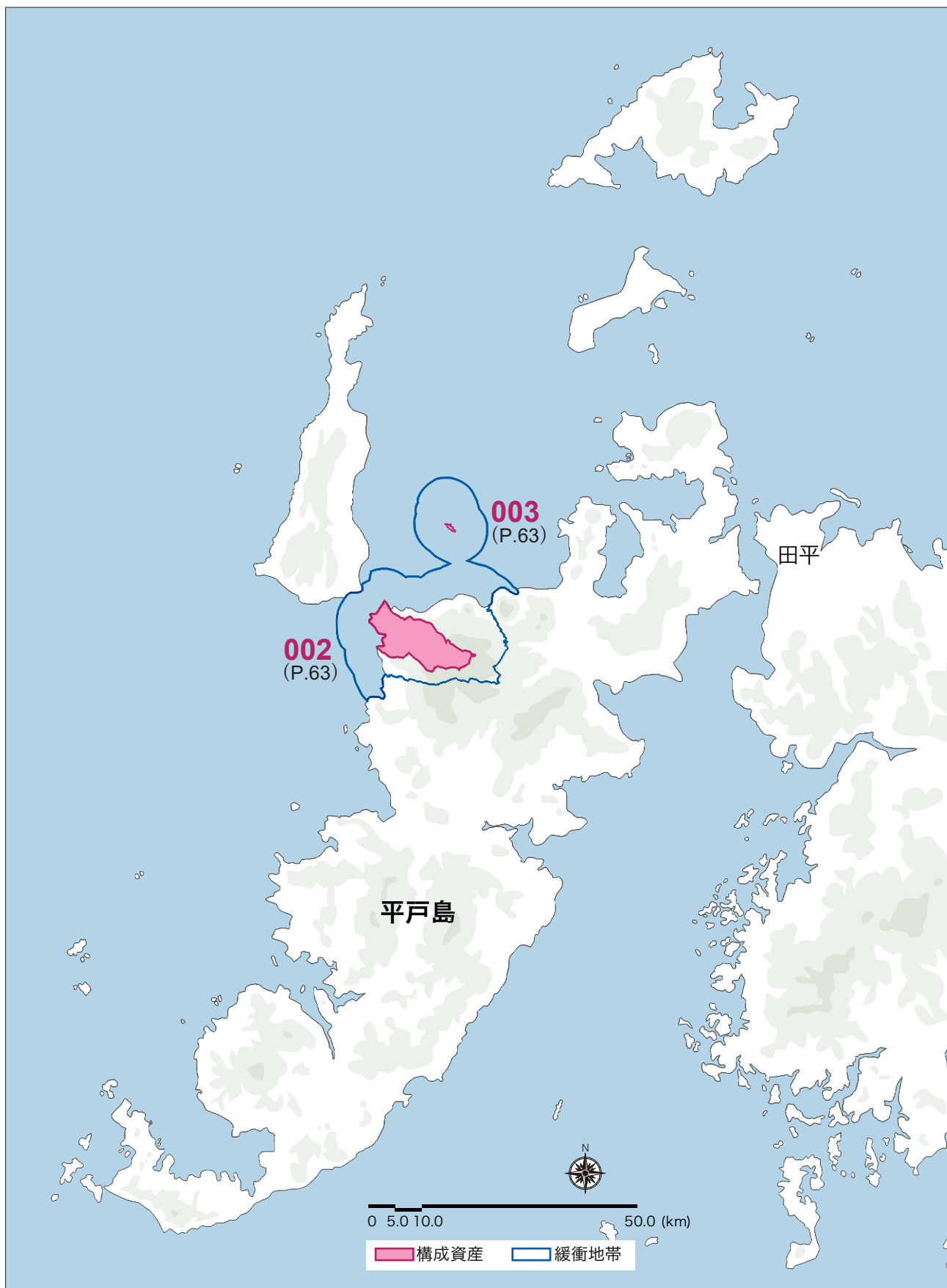


図2-003 構成資産の位置図 (Map B)

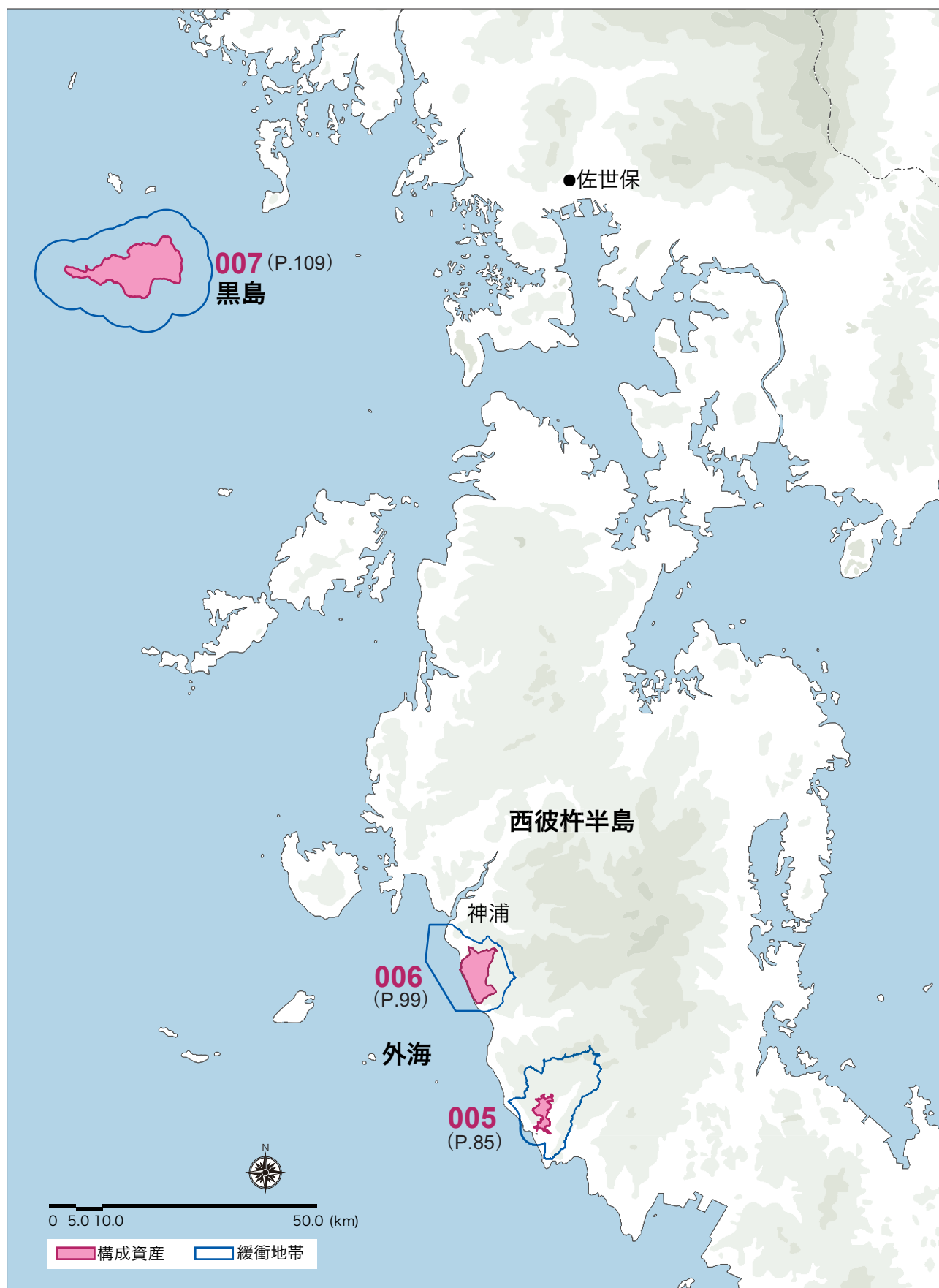


図2-004 構成資産の位置図(Map C)

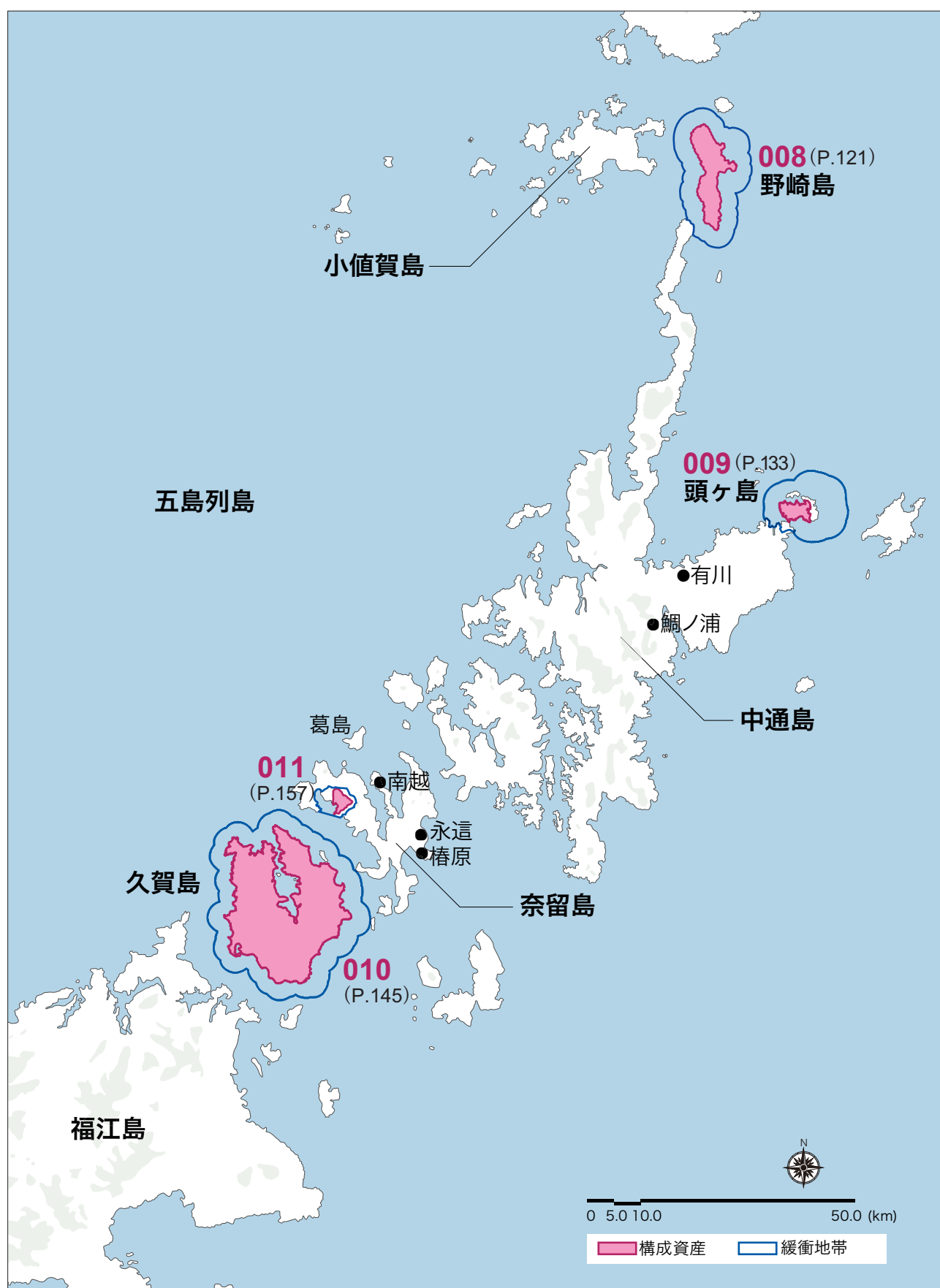
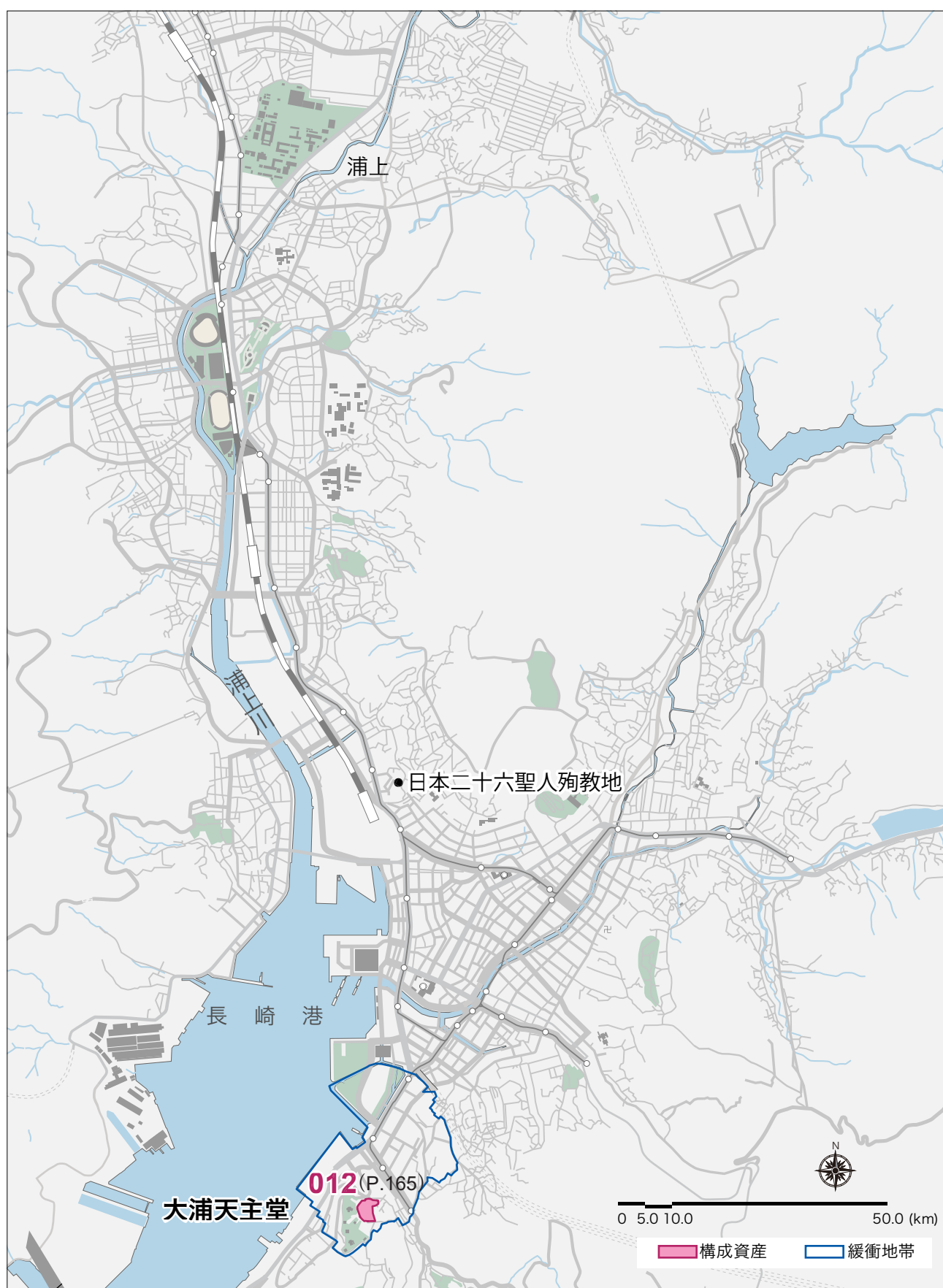


図 2-005 構成資産の位置図 (Map D)





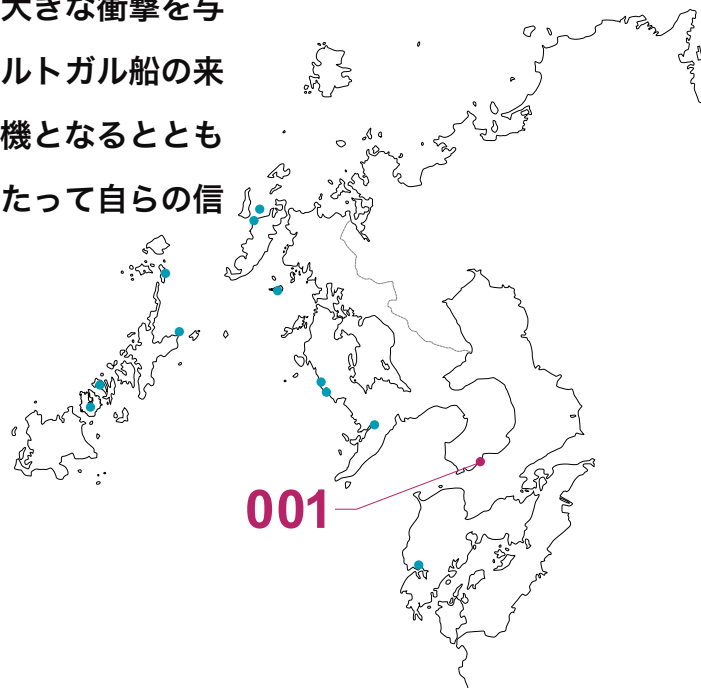
**図2-006 構成資産の位置図(Map E)**



写真 2-001 原城跡

# 001 原城跡

原城跡は、禁教初期に有馬領のキリシタンが蜂起した「島原・天草一揆」の主戦場となった城跡である。一揆は、全国的に禁教政策が推進される過程で起こった出来事であり、江戸幕府に大きな衝撃を与えた。それは、幕府が宣教師の潜入の可能性のあるポルトガル船の来航を禁止し、2世紀を超える海禁体制を確立する契機となるとともに、宣教師不在の下に潜伏キリシタンが長期間にわたって自らの信仰を密かに継続する重要な契機をももたらした。





## 001 原城跡

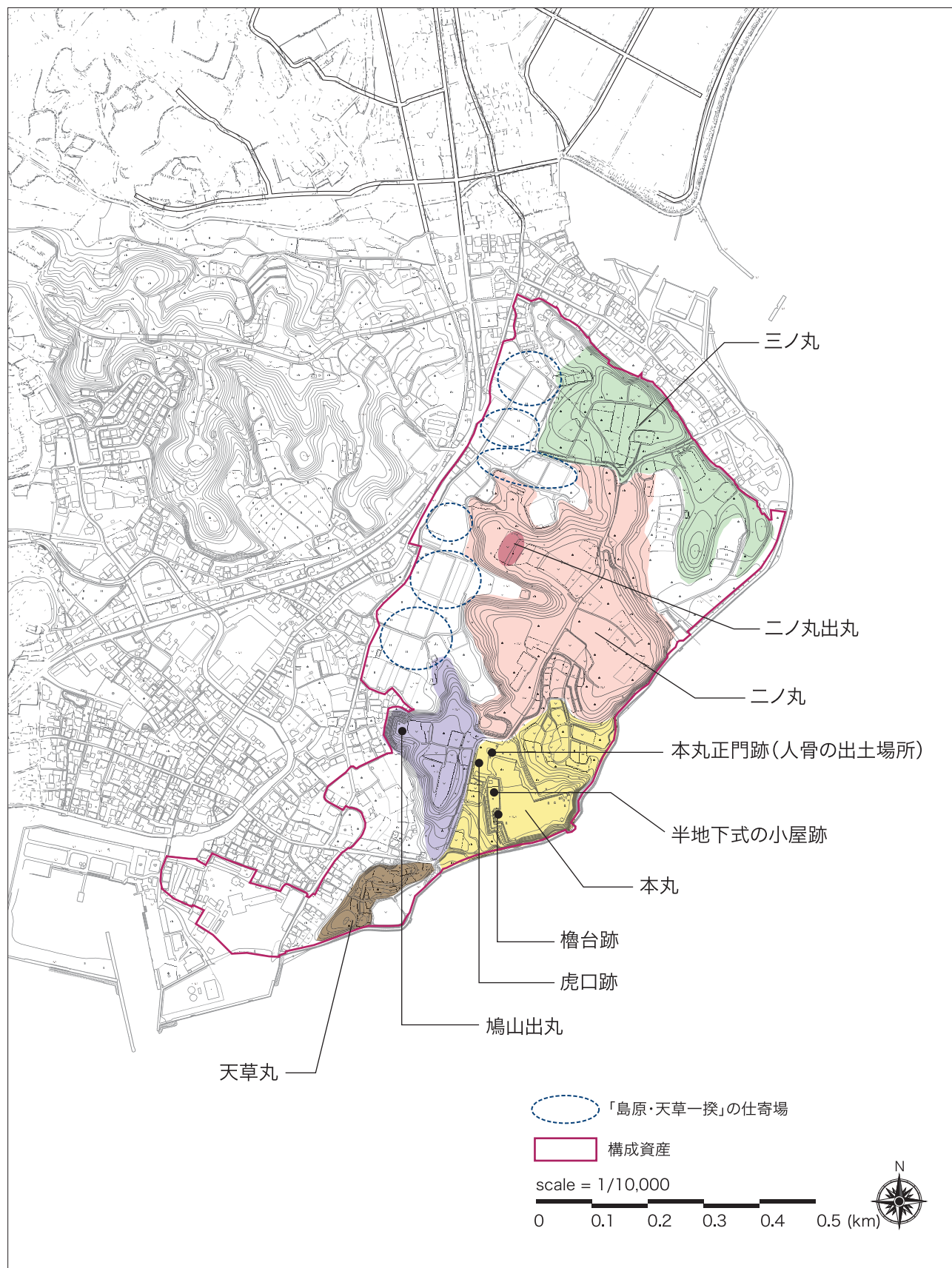


図2-007 要素位置図(001 原城跡)

## 001 原城跡

原城跡は、長崎地方の南東部、島原半島の南部に所在する地方領主の城跡である（写真 2-001）。海に突き出た丘陵を利用して築造された城で、本丸・二ノ丸・二ノ丸出丸・三ノ丸・天草丸・鳩山出丸などの複数の郭から成り、北・東・南の三方を海が取り囲み、西を低湿地に面する要害の地であった（写真 2-002、写真 2-003）。1637 年に起こった「島原・天草一揆」の戦場となり、一揆勢の多数の人骨とともにキリシタンの信心具が出土したほか、彼らが立て籠もった複数の住居跡が確認されるなど、禁教初期の潜伏キリシタンが一揆に際して組織的に連携していたことが考古学的な発掘調査により明らかにされている。

イエズス会宣教師たちの報告によると、1598 年から 1604 年にかけてキリシタン大名である有馬氏が原城を築いたことが知られる<sup>1</sup>。その後、有馬氏に代わって松倉氏が有馬領の領主となり、新たに森岳城を築いて居城としたため、1618 年に原城は廃城となった。

江戸幕府がキリシタン禁制を推進する中、1637 年に苛政と飢饉を契機として勃発した「島原・天草一揆」に際して、有馬領及び天草の百姓（農民、漁民、職人など）から成る約 2 万数千人のキリシタンが領主らに対して蜂起した。百姓たちは廃城となっていた原城跡に合流し、益田四郎を総大将として、城内に立て籠もった。

この一揆は、かつてこの地を治めたキリシタン大名である有馬晴信及び小西行長の旧家臣で、禁教後に農民となっていたキリシタンの庄屋らが農民を率いて起こしたもので

## 1

「有馬殿が今までに居住していた城は、戦時には有利で安全であるとは考えられていないために、彼はより優れて堅固な別の城を、このためにもっと相応しいと思われた、そこに近い他の場所に築くことを決めた」ジョアン・ロドリゲス・ジラン 1604 年 11 月 23 日付け「1604 年度日本準管区年報」ほか、五野井隆史(2014)『島原の乱とキリシタン』、吉川弘文館、P.13-18.



図2-008 有馬領と天草地方の位置図

## 001 原城跡

あった。彼らは、禁教後においても潜伏キリシタンの信仰組織の単位である「組」の集団の指導者であったことが「コウロス徴収文書」によって知られる<sup>2</sup>。また彼らが、原城に立て籠もった際、城内に礼拝堂を建て、キリシタンの教えを説いていたことが幕府側の記録からうかがえる(写真 2-004)<sup>3</sup>。

幕府軍は約 12 万人の兵力を動員して一揆勢を攻撃したが、激しい反撃によって 8 千人以上もの死傷者を出した。結局、4 ヶ月に及ぶ攻防の末、一揆勢は老若男女の別なくほぼ全員が殺された。

原城跡の発掘調査では、本丸の虎口及び櫓台の石垣などの遺構が確認されたほか、多量の人骨及びキリシタンの信心具等が出土した(写真 2-005)。信心具の中には、キリスト教の伝来期に宣教師から授かり代々継承されてきたメダイをはじめ、鉄砲玉の原料で自作した十字架などが含まれている(写真 2-006)。また、本丸の西側では、規則的に造られた複数の半地下式の小屋跡が確認されている(写真 2-007、写真 2-008)。これらの遺構は、立て籠もったキリシタンが禁教後においても信仰を維持し、家族・集落の単位で組織的に行動していたことを明確に示している。発掘調査では、これらのキリシタン関係の遺構・遺物が、破壊された石垣の中に埋め込まれた状況で発見されたことから、再び原城跡を一揆に利用されることを恐れた江戸幕府が、それらを徹底的に破壊したことがわかる(写真 2-009)。さらに、一揆勢が原城跡へと持ち込み、陣中旗として利用した「コンフラリア(信心会)」の幟<sup>4</sup>のほか、城内で使用していたラテ

## 2

「コウロス徴収文書」は、禁教下において日本各地に分断されたキリシタンの各信仰共同体の指導者に対して、司牧に挺身していることの証言を求めるためにイエズス会管区長コウロスが作成したものである。1617 年 8 月 29 日付けで徴収された有馬領内の指導者の名前は以下のとおりである。(松田毅一(1967)「元和 3 年、イエズス会コウロス徴収文書」『近世初期日本関係南蛮資料の研究』風間書房 P.1067-1078.)。

Vocumura Dōca Leão  
Masuda Gibunoxō Iacobe  
Yezaki Yatayū Gaspar  
Masuda Cazoyenorio Luis  
Matcuxima Yayemōnogiō  
Mathias  
Vonaicju Canzayemōnogiō  
Lião  
Mayeda Mozayemōnogiō  
Mathias  
Faximoto Cambiōyenogiō  
Thome  
Masuda Ienyemōnogiō Gaspar  
Nagano Saizō Thome  
Yezaki Qitnay Ião  
Jtō Gorōzayemōnogiō  
Thome  
Qitano Ficosaburō Paulo  
Araqi Cābiōyengiō Luis  
Masuda Chūyemōnogiō  
Mathias  
Matcuxima Sado Lião  
Masuda Sōmi Domingos  
Vocumura magoyemōnogiō  
Paulo

## 3

「四郎八本丸の内二寺を立天守二居、すゝめをなし申候由申候事、(寛永 14 年(1637)12 月 29 日、「熊本藩士志方半兵衛より諏訪猪兵衛宛書状」(志方半兵衛言上覚)、鶴田倉造編(1994)「原史料で綴る天草島原の乱」、P.621)。

## 001 原城跡

ン語を平仮名に音写した祈祷文<sup>5</sup>が今日に伝わる（写真 2-010、写真 2-011）。これらは、一揆の鎮圧後に幕府軍の武士が戦利品として持ち帰ったために今日に伝わったものである。

なお、「島原・天草一揆」の出来事は、その後の禁教期を通じて、長崎地方の外海及び浦上など各地の潜伏キリシタン集落において、長らく彼らの記憶として伝承された<sup>6</sup>。

推薦資産の範囲は、古文書・絵図及び発掘調査により判明した城郭の全ての場所、「島原・天草一揆」において一揆勢が立て籠もった場所、及び幕府軍が最前線の拠点とした場所の全てを含んでいる。

4

「綸子地著色聖体秘蹟図指物」（天草市立天草キリシタン館所蔵）。重要文化財に指定されている。

5

「耶蘇教写経（祈祷文）」（東京国立博物館所蔵）。ラテン語を平仮名に音写した聖歌が記されたもの。寄贈者である片山氏の先祖は、幕府軍上使に随行していた。

6

外海の大野集落に存在する辻神社は、一揆後に逃れてきたキリシタンを祭神としている。また、1867年に発生した浦上四番崩れについて高木仙右衛門がまとめた「仙右衛門覚書」には、1637年の一揆のことを指して「天草四郎が乱を起こした」との記載がある。



## 001 原城跡



写真 2-002 原城跡本丸



写真 2-003 原城跡二ノ丸



## 001 原城跡



写真 2-004 「十」の字が描かれた建物(「原城攻囲図」、東京大学史料編纂所所蔵)



## 001 原城跡



写真 2-005 発掘調査で確認された人骨(発掘調査時の写真)



写真 2-006 発掘調査で出土した信心具(メダイ・十字架、南島原市有馬キリシタン遺産記念館所蔵)

大きさ(縦×横×厚): **a**. 2.10 x 1.50 cm, 0.20 cm; **b**. 3.00 x 2.05 cm, 0.20 cm; **c**. 2.10 x 1.40 cm, 0.10 cm;  
**d**. 2.90 x 2.20 cm, 0.31 cm; **e**. 2.93 x 2.09 cm, 0.52 cm; **f**. 2.15 x 2.30 cm, 0.30 cm; **g**. 2.75 x 2.09 cm, 0.40 cm



## 001 原城跡



写真 2-007 半地下式の小屋跡(発掘調査時の写真)



写真 2-008 半地下式の小屋が描かれた絵図(「島原陣図屏風」、秋月郷土館所蔵)



## 001 原城跡



写真 2-009 櫓台石垣破却状況(発掘調査時の写真)



写真 2-010 信心会の幟「綸子地著色聖体秘蹟図指物」(通称「天草四郎陣中旗」、天草市立天草キリシタン館所蔵)

大きさ(縦×横): 180.60 x 180.60 cm

## 001 原城跡



写真 2-011 祈祷書(東京国立博物館所蔵)

禁教下においてこのような祈祷書によって信仰を続けていたことを示す。



## 001 原城跡

## 過去と現在のエリア比較

## 過去



写真 2-012 「島原・天草一揆」当時の原城跡本丸(「島原陣図屏風」、秋月郷土館所蔵)

## 現在



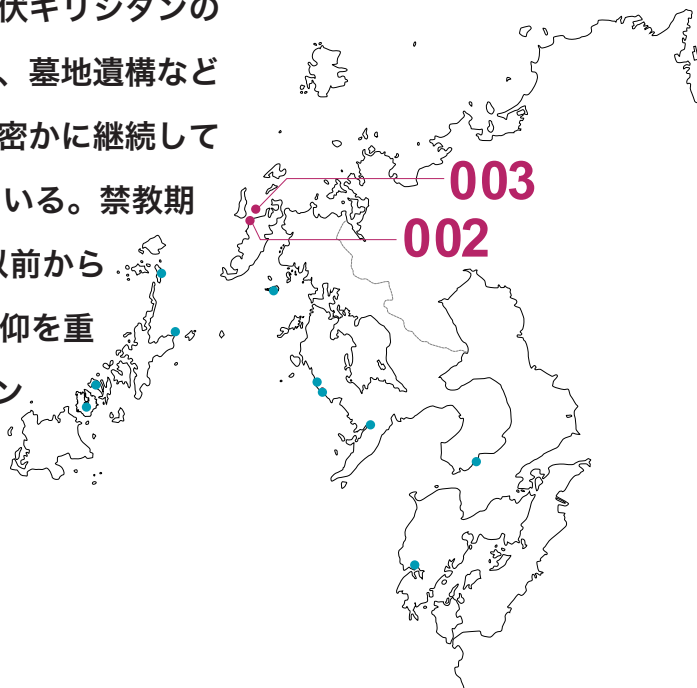
写真 2-013 現在の原城跡本丸



写真 2-014 春日集落と安満岳、中江ノ島

## 002, 003 平戸の聖地と集落

平戸の聖地と集落は、潜伏キリシタンが古来の自然崇拝思想に重ねて自然の山などを崇敬し、キリシタンの殉教地であった島を聖地とすることにより、自らの信仰を密かに継続した潜伏キリシタンの集落である。聖地の石造物、集落内の土地利用形態、墓地遺構などには、禁教下にあっても聖地及び殉教地への崇敬を密かに継続してきた潜伏キリシタンの信仰に関する伝統が反映している。禁教期の春日集落の潜伏キリシタンは、キリスト教伝来以前から山岳信仰の場とされてきた安満岳に対して自らの信仰を重ねて崇拝した。さらに、彼らは禁教初期にキリシタンの処刑が行われた中江ノ島を殉教地として崇敬し、洗礼などに使う聖水採取の場とした。





## 002, 003 平戸の聖地と集落

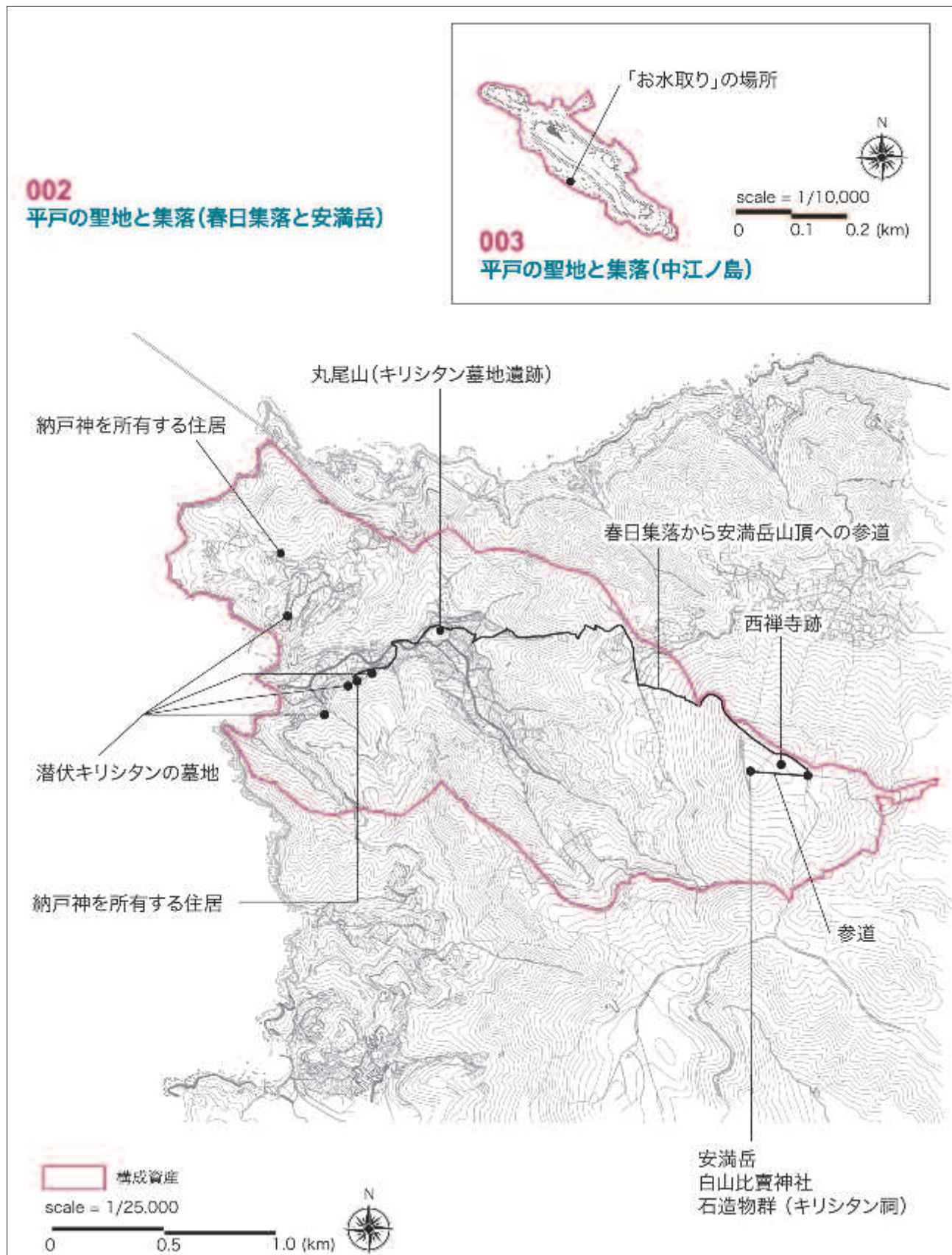


図 2-009 要素位置図(002, 003 平戸の聖地と集落)

## 002, 003 平戸の聖地と集落

春日集落は平戸島の西岸にあたり、東側の安満岳から伸びる2本の尾根に挟まれた谷状の地形が海岸へと連続する緩傾斜面に位置する（写真 2-014）。春日集落は、キリスト教伝来期のキリシタン墓地遺跡が存在する丸尾山をはじめ、潜伏キリシタンの信心具の秘匿の場所となった「納戸」を伴う住居が存在し、禁教期に密かに崇拝した安満岳に隣接している。さらに春日集落が臨む海上には、禁教初期にキリシタンの処刑が行われ、殉教地として崇敬の対象とした中江ノ島がある。

平戸島には1550年にフランシスコ・ザビエルによってキリスト教が伝えられ、平戸島の西岸地域を治めた武士の籠手田氏が改宗したことにより、春日集落にもキリスト教が広まった。1561年にイエズス会宣教師アルメイダがインド管区長ほかへ書き送った書簡には、「春日と称する別のキリシタンの集落へ向かった。春日に到着すると、十字架へ続く道は聖体の行列を待ち受ける時のような有様であった」と記されており、信仰が広まった様子を伝える<sup>1</sup>。また、1563年の宣教師の書簡からは、キリスト教徒の信仰組織である「組」が春日集落において成立していたことが判明している<sup>2</sup>。

しかし、その後、平戸島全体の領主であった平戸松浦氏がキリスト教を禁じたため、1599年に籠手田氏は平戸島から退去した<sup>3</sup>。また、1614年に江戸幕府による全国的な禁教令が出た後も、宣教師はしばらく国内に潜入し、密かに平戸を訪れていた。しかし、1622年にカミロ・コンスタンツォ神父が殉教して以降、この地を訪れる宣教師はいなくなった<sup>4</sup>。

## 1

1561年10月1日付、アルメイダ書簡。

春日集落の丸尾山では発掘調査によってキリシタンの墓地が確認されており、アルメイダの書簡に見える十字架は、集落を見下ろす丸尾山に設置されていたものと考えられている（写真 2-015）。

## 2

1563年4月17日付、フェルナンデス書簡。

## 3

平戸市教育委員会編（2009）『平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』。

## 4

平戸市教育委員会編（2009）『平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』（P.53）。

## 002, 003 平戸の聖地と集落

宣教師が不在となる一方で、春日集落では「組」の指導者を中心として信仰組織が維持され、密かに信仰が継続された。

平戸島西岸の沖合 2km に位置する中江ノ島は、東西約 400m、南北約 50m、標高 34.6m の無人島である。この島では、禁教初期に平戸藩によるキリシタンの処刑が行われた記録が残されている。イエズス会宣教師の記録によれば、1622 年に五島で逮捕され、平戸島対岸の田平で処刑されたカミロ・コンスタンツォ神父を助けた「宿主ジョアン・スカモト(サカモト)・ゲンザエモンと、逃亡のための船の提供者となったダミアン・インデグチ・ジロエモンは、中江ノ島に連行され斬首された」<sup>5</sup>ことが知られる。また、同年 6 月 8 日に「ジョアン・ユキノウラ・ジロエモンは、異教徒の言葉を書いた紙を呑み込むことを拒んだため、中江ノ島で処刑された」こと、1624 年にダミアンの家族が「中江ノ島の地獄という所で殺された」こと、などが記録されている<sup>6</sup>。

禁教期の春日集落では、潜伏キリシタンが 2 つの信仰組織を維持し、指導者を中心として自分たち自身で既存の社会・宗教と共生しつつ信仰を継続する伝統を育んだ（写真 2-016、写真 2-017）。指導者の住居には、仏壇及び神棚のほか、「納戸」と呼ばれる部屋の中に、潜伏キリシタンの信心具（「納戸神」）が秘匿された（写真 2-018、写真 2-019）。屋外では、キリスト教伝来以前から山岳信仰の場であった安満岳に対して潜伏キリシタンの信仰を重ね、聖地として崇拜した<sup>7</sup>。

安満岳は春日集落の東側に位置し、標高 536m の平戸地方における最高峰である<sup>8</sup>。山域の広い範囲にアカガシの原

5

ローマ・イエズス会文書館  
Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap.Sin.60.ff.53v-60v.

6

ローマ・イエズス会文書館  
Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap.Sin.60.ff.364-364v.

7

潜伏を経てかくれキリシタンに伝承された「神寄せのオラシヨ」の中では「安満岳の奥の院様」と唱えられた。

長崎県教育委員会編（1999）『長崎県のカクレキリシタン』、P.268。

8

平戸市編（2015）『大陸との接点-平戸の自然誌』、平戸紀要第 3 号（特集号）。



## 002, 003 平戸の聖地と集落

生林が残り、山中には白山比賣神社及びその参道、山頂部には石祠、西禅寺跡等が存在する。白山比賣神社は 718 年に山岳信仰の拠点であった加賀白山宮から勧請したとされ<sup>9</sup>、白山権現とも称した。山頂には、近代に建て替えられた社殿及び江戸期以前に造られた石の参道・鳥居がある（写真 2-020）。社殿の後背地には多様な石造物群が見られ、「キリシタン祠」と呼ぶ石祠も存在する（写真 2-021）<sup>10</sup>。参道に隣接する西禅寺跡は白山比賣神社の勧請の際に創建された寺院の跡で、その境内には建物の礎石をはじめ、池及び石造物などの遺構が残る（写真 2-022、写真 2-023）。16 世紀の宣教師の書簡によると、西禅寺を中心とする山岳仏教勢力が「安満岳」と称して大きな勢力を誇り、宣教師らと敵対していたことが知られる<sup>11</sup>。しかし禁教期になると、伝統的な神道・仏教に基づく宗教観と潜伏キリシタンの信仰とが重層し、安満岳は神道・仏教・潜伏キリシタンの信仰が並存する聖なる山となった。春日集落からも安満岳山頂に向けて参道が延び、集落全体の住民にとって崇拜の対象となっていた。禁教期から伝わるとされる「神寄せのオラシヨ」においても、安満岳は「安満岳様」又は「安満岳の奥の院様」として言及されており、安満岳が潜伏キリシタンにとって信仰の対象として重要な存在であったことがわかる。

禁教初期にキリシタンが処刑された中江ノ島は、平戸西海岸の潜伏キリシタンが殉教地として崇敬した場所であった（写真 2-024）<sup>12</sup>。また、中江ノ島は、春日集落などの潜伏キリシタンが岩からしみ出す聖水を採取する「お水取り」の儀式を行う重要な聖地となった（写真 2-025）。潜伏キリシ

9

平戸市教育委員会編（2009）『平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』（P.282）。

10

東京大学先端科学技術研究センター編（2013）『平戸島西海岸地域の景観保全に関する研究』。

11

1564 年 10 月 3 日付、フロイス書簡。

12

「神寄せのオラシヨ」の中では「中江ノ島のサンジワン様」と唱えられた。

長崎県教育委員会編（1999）『長崎県のカクレキリシタン』、P.268。

## 002, 003 平戸の聖地と集落

タンによる安満岳及び中江ノ島の聖地への崇拝及び崇敬は、外見的には伝統的な在来信仰及び民俗の儀礼として行われ、内面での信仰は秘匿され続けた。

1865 年の大浦天主堂での「信徒発見」の知らせは、直ちに平戸へもたらされ<sup>13</sup>、春日集落の潜伏キリシタンに新たな信仰の局面が到来する契機となった。春日集落の納戸神の中に、19 世紀に海外で制作されたカトリックの信心具が加わっていることから、集落内の潜伏キリシタンとパリ外国宣教会宣教師との接触があったことがうかがえる。しかし、春日集落の潜伏キリシタンは、キリスト教解禁後もカトリックに復帰することはなく、禁教期以来の信仰形態を維持し続けた。やがて 20 世紀になると禁教期の信仰形態は次第に失われ、現在ではほぼ消滅している。

春日集落は、江戸時代（1868 年以前）及び明治期（1868 年～1912 年）の絵図及び文献との照合により、潜伏キリシタンが生活を営んで形成した集落構造の全体像が、ともに 16 世紀から禁教期を経て現在に至るまでほぼ変わらずに維持されてきた稀有な集落であることが判明している。潜伏キリシタンに関わった歴史的な土地利用の痕跡が残る範囲をはじめ、禁教期に聖地として崇拝した安満岳、白山比賣神社とその参道、石祠、西禅寺跡及び禁教期に管理されていた山頂の自然林の範囲を推薦資産の範囲としている。中江ノ島は、無人島であり、禁教期の様相をほぼ留めている。潜伏キリシタンから聖地とされた島の全体を推薦資産の範囲としている。

13

1865 年 12 月に平戸の指導者が密かに大浦を訪れたことが判明している。

F. マルナス、久野桂一郎訳（1985）『日本キリスト教復活史』、みすず書房、P.263.



## 002, 003 平戸の聖地と集落



写真 2-015 丸尾山



写真 2-016 春日集落



## 002, 003 平戸の聖地と集落



写真 2-017 春日集落の潜伏キリシタン墓地



写真 2-018 信心具(オテンペンシャ、個人所蔵)

写真 2-019 左から神棚と信心具を収蔵した箱(個人所蔵)  
納戸部屋の天井付近に設置されている。



## 002, 003 平戸の聖地と集落



写真 2-020 安満岳山頂にある石の参道と鳥居



## 002, 003 平戸の聖地と集落



写真 2-021 安満岳山頂の石造物群



写真 2-022 下方街道図絵(1806年から1841年の間、松浦史料博物館所蔵)



写真 2-023 西禅寺跡



## 002, 003 平戸の聖地と集落



写真 2-024 中江ノ島(構成資産003)



写真 2-025 中江ノ島での「お水取り」



## 002, 003 平戸の聖地と集落

## 過去と現在のエリア比較

過去

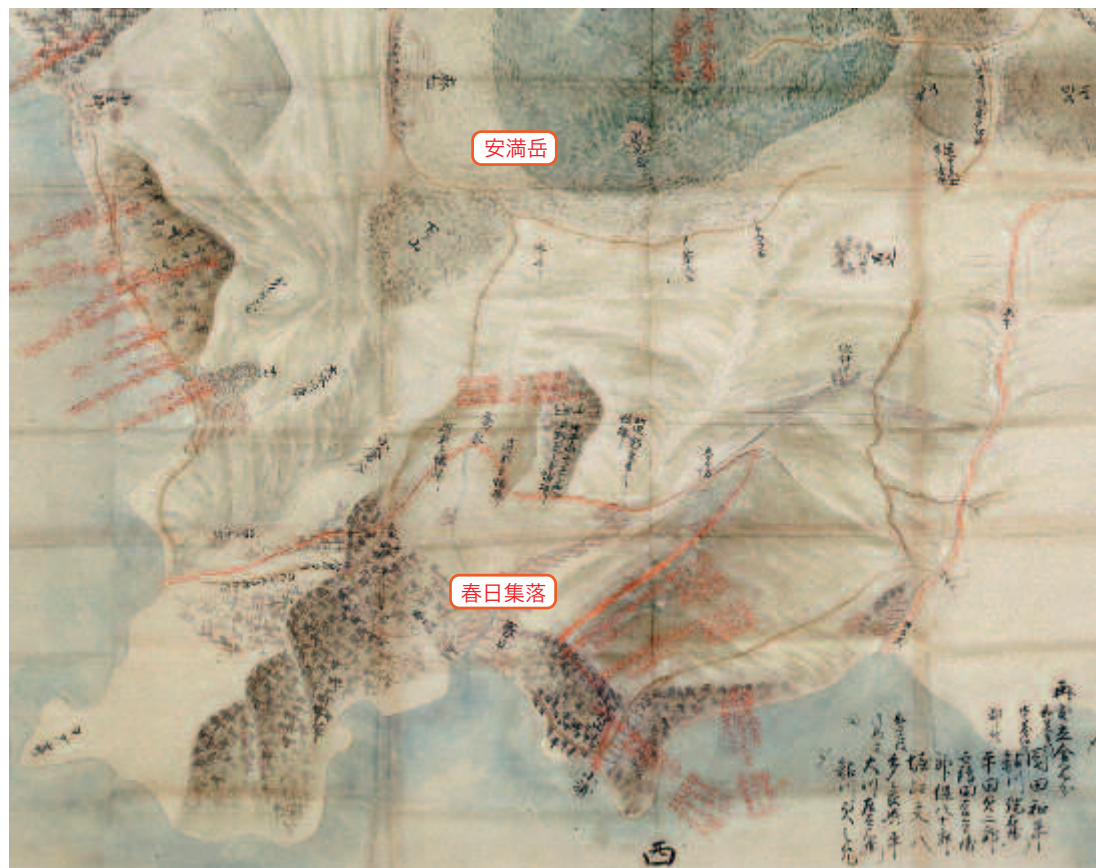


写真 2-026 春日牧図(1866年、松浦史料博物館所蔵)

現在



写真 2-027 現在の春日集落と安満岳





写真 2-028 崎津集落

## 004 天草の崎津集落

天草の崎津集落は、生業に根差した身近なものをキリシタンの信心具として代用することにより、自らの信仰を密かに継続しようとした潜伏キリシタンの集落である。禁教期の崎津集落では、指導者を中心として自分たち自身で密かに信仰を続ける過程で、大黒天及び恵比須神をキリスト教の唯一神であるデウスとして崇拝し、アワビの貝殻の模様を聖母マリアに見立てるなど、漁村独特の信仰形態が育まれた。キリスト教解禁後、崎津集落の潜伏キリシタンはカトリックへと復帰し、禁教期に密かに祈りを捧げた神社の隣接地に教会堂を建てた。



## 004 天草の崎津集落

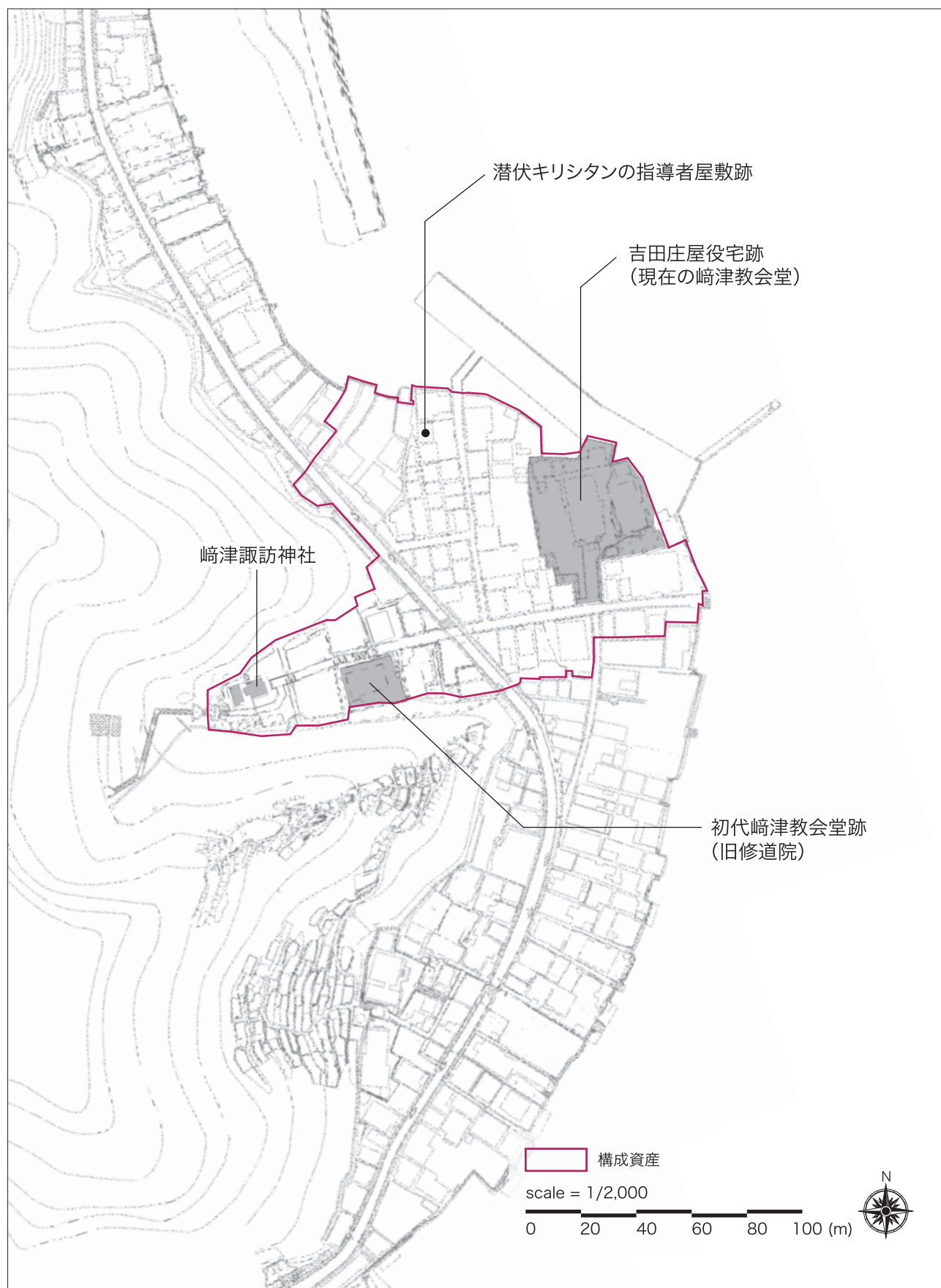


図 2-010 要素位置図(004 天草の崎津集落)

## 004 天草の崎津集落

天草の崎津集落は、天草下島の西部に位置する漁村集落で、禁教期に潜伏キリシタンが密かに祈りに用いた信心具を今日に伝える水方屋敷跡、密かにオラショを唱えた崎津諏訪神社境内、絵踏<sup>1</sup>が行われた吉田庄屋役宅跡、解禁後にカトリックに復帰して崎津諏訪神社の隣接地に建てられた旧崎津教会堂跡から成る（写真 2-028）。

1

本推薦書 P.187 の写真 2-142 を参照されたい。

崎津集落は、15 世紀には既に集落として成立しており、1569 年にイエズス会のアルメイダ宣教師によって宣教が開始されると、崎津集落にもキリスト教が広まり多くのキリシタン信心具が伝来した。

キリスト教が禁教になると、崎津集落では毎年、吉田庄屋役宅において潜伏キリシタン探索のための「絵踏」が行われるようになった。村人はキリスト又は聖母マリアの像を踏むことを強制され、「宗門改帳」により宗旨及び所属する寺院が管理された。同時に崎津集落の潜伏キリシタンは、在来の信仰を装うために表向きは崎津諏訪神社の氏子となった。崎津諏訪神社は 1647 年の創建以来、豊漁・海上安全を祈願する集落の守り神として今日まで存続している（写真 2-029、写真 2-030）。

集落内には、禁教期の崎津集落の信仰組織において洗礼を司った指導者である水方の屋敷跡が存在する。崎津集落では、禁教期においても 16 世紀以来のコンフラリアの末端組織である「小組」が密かに存続しており、「水方」と呼ばれる信仰指導者が洗礼を授け、葬送儀礼をはじめ日繰りをもとに儀礼・行事などを行った。



## 004 天草の崎津集落

崎津集落では、生業である漁業と信仰とが密接に結び付いていた。豊漁の神様である大黒天又は恵比須神をキリスト教の唯一神であるデウスとして崇拝し、アワビ・タイラギの貝殻内側の模様を聖母マリアに見立てて崇敬した<sup>2</sup>。また、白蝶貝を加工してメダイも製作した。水方屋敷跡に建つ現在の住居には、潜伏キリシタンの信心具としてのメダイのほか、海に関わる信心具が保管されている（写真 2-031）。1805 年に崎津集落の潜伏キリシタンの信仰が発覚する「天草崩れ」が起こった際には、代官所は潜伏キリシタンが所有する信心具を崎津諏訪神社に差し出すよう指示したが<sup>3</sup>、幕府側では「心得違い」として彼らの信仰を黙認した。

19 世紀後半の宣教師の来日後、崎津集落の潜伏キリシタン達は改めて洗礼を受け、カトリックへと復帰した。そして 1888 年、かつて水方を務めた信者の土地であり、禁教期に信者が密かにオラショを唱えた崎津諏訪神社の隣地において、最初の崎津教会堂が建てられた（写真 2-032）。この時に建てられた木造の教会堂は、その後、老朽化したため移転・新築された。跡地には修道院の建物が建造され、今日に至っている（写真 2-033）。

現在の教会堂は、絵踏が行われた禁教期の吉田庄屋役宅跡地に 1934 年に建てられた（写真 2-034）。これは、絵踏が行われた場所にカトリック復活の象徴となる教会堂を建てたいというフランス人ハルブ神父の強い願いによるものであった。教会堂は、神父の私財、崎津住民の寄付金、信者たちの労働奉仕により完成した。教会堂の内部は建造当初

2

天草市教育委員会編（2013）『崎津・今富の集落調査報告書』史料編。（原典は崎津教会所蔵「フェリエ神父の報告書」。）

3

その際、取り調べを受けた信者は「あんめんりゆす」と述べたとの記録が残り、密かにオラショを唱えていたことが判明している。「あんめんりゆす」とは、「アーメン・デウス」の意味であることが明らかとなっている。

天草市教育委員会編（2013）『崎津・今富の集落調査報告書』史料編。（原典は上田家所蔵「上田家文書」。）

## 004 天草の崎津集落

から畳敷きとされ、祭壇はかつて絵踏が行われた場所を選んで設置されたとの言い伝えが残る（写真 2-035）。

崎津集落は、禁教期以来の主要な道及び宅地など、骨格となる集落構造を今日まで良好な状態で継承している潜伏キリシタンの集落である。推薦資産の範囲は、禁教期の信仰組織である最小の単位（小組）が成立した範囲であり、密かに祈りを捧げた神社の境内、水方屋敷跡、絵踏が行われた庄屋役宅跡（現在の崎津教会堂の敷地）をはじめ、解禁後に最初に建てられた初代崎津教会堂跡地とその周辺の範囲としている。

## 004 天草の崎津集落



写真 2-029 崎津諏訪神社



写真 2-030 崎津諏訪神社の大祭



## 004 天草の崎津集落



**写真 2-031** 信心具 (a大黒天像、b恵比寿像、cアワビ貝、d,e白蝶貝メダイ、f,g和鏡、全て個人所蔵)  
 大きさ(縦×横×厚); a 2.55 x 1.3 cm、0.95 cm; b 2.0 x 1.5 cm、0.85 cm; c 9.7 x 12.4 cm、2.9 cm; d 2.5 x 1.5 cm、0.1 cm; e 5.1 x 4.5 cm、0.2 cm; f 10.8 x 10.8 cm、1.0 cm; g 8.1 x 1.8 cm、0.3 cm

## 004 天草の崎津集落



写真 2-032 最初の崎津教会堂  
教会堂の横に立っている人物は、パリ外国宣教会のハルプ神父である。



写真 2-033 崎津諏訪神社の側に建つ修道院



## 004 天草の崎津集落



写真 2-034 崎津庄屋役宅跡(現在の崎津教会堂)



写真 2-035 畳敷きの崎津教会堂内部



## 004 天草の崎津集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去



写真 2-036 崎津村絵図(1842年以降、天草コレジヨ館所蔵)

## 現在



写真 2-037 現在の崎津集落





写真 2-038 出津集落

## 005 外海の出津集落

外海の出津集落は、小規模な潜伏キリシタン集落が連帯し、聖画像を秘匿して祈りを捧げ、教理書及び教会暦などを伝承して自らの信仰を継続しようとした集落である。禁教期には多くの外海地域出身の潜伏キリシタンが五島列島など島嶼部へと移住し、潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が離島の各地へと拡がり、移住先において継続することとなった。解禁後、潜伏キリシタンは段階的にカトリックへと復帰し、集落を望む高台に教会堂を建てた。





## 005 外海の出津集落



図 2-011 要素位置図(005 外海の出津集落)



## 005 外海の出津集落

外海の出津集落は、西彼杵半島の西岸にあたる外海地域に位置し、東シナ海に注ぐ出津川の流域に存在する(写真 2-038)。潜伏キリシタンが、禁教期に密かに祈りを捧げるために聖画像を秘匿していた屋敷の跡、潜伏キリシタンの墓地、禁教期に集落を管轄した代官所の跡、「信徒発見」後に宣教師が上陸した浜辺、解禁後に建てられた教会堂から成る。

外海地域では、1571 年にイエズス会の宣教師が宣教活動を行い<sup>1</sup>、キリスト教が伝わった。それに伴って多くの者が洗礼を受けたのをはじめ、1592 年には外海北部の神浦地区に宣教師の住居としてレジデンシアが置かれるなど、宣教が進んだ<sup>2</sup>。

1614 年に日本の全土にわたって禁教令が出されたが、出津集落は比較的取り締りが緩やかな佐賀藩の領域に属し、庄屋をはじめとする村役も潜伏キリシタンであった。潜伏キリシタンは、表向きは出津代官所<sup>3</sup>の管轄の下で仏教寺院に属し、宣教師に代わる指導者を中心として組織的に信仰を継続した。

出津集落の信仰組織は、「お帳」<sup>4</sup>と呼ぶ禁教初期に伝えられた教会暦を所有する複数の小さな「組」から成り、これらを統括する「ジヒサマ」(正・副・弟子の 3 名から構成)と呼ぶ出津集落全体の「組」の指導者を役員会において選出した。16 世紀の「ミゼリコルディア」(慈悲の会)の「慈悲役」に由来する「ジヒサマ」は、集落内の洗礼・葬儀などの儀礼を司り、「ご誕生」(クリスマス)にはジヒサマの家で夜を徹して祈りが捧げられた。

また、集落内には、16 世紀にヨーロッパから伝わったとされる聖母マリアを象った青銅製の大型メダル「無原罪のプラケット」<sup>5</sup>をはじめ、中国由来と推測される銅製の仙人像

1

1571 年 10 月 16 日付のベルショール・デ・フィゲイレド書簡には、外海の中でも出津に隣接する神浦での布教の記録が見える。

松田毅一監訳(1998)『16・17 世紀イエズス会日本報告集』、同朋舎、P.112。

2

ペドロ・ゴメス(1594)『日本年報』。

3

出津代官所は、佐賀藩が出津集落を管理するために設置した出先機関であった。『彼杵郡三重岡賤津村・黒崎村・永田村』では、集落の他の建物がわら葺屋根として描かれているのに対し、代官所だけ瓦葺きの建物として描かれており、身分・格式の差が示されている。禁教期の末期には、代官所において住民が潜伏キリシタンか否かを判別するために、「白・黒」(信者の場合は黒)の色のいずれかを選ばせて確認したことが伝わる。出津代官所跡地にはキリスト教解禁後に授産施設である出津救助院の建物が建てられたが、2010 年に実施した建物の保存修理に伴う地下調査では、代官所の建物が建造された当時の石垣・瓦、陶磁器類が出土しており、『彼杵郡三重岡賤津村・黒崎村・永田村』に描かれたとおり瓦葺きの建物であったことを裏付けている。

4

それぞれの小さな「組」に伝わる「お帳」は、禁教初期に宣教師に代わってこの地域で活動した日本人伝道士のバスチャンが残したとされる 1634 年の教会暦の写しである。

## 005 外海の出津集落

をイエズス会創始者のイグナティウス・デ・ロヨラに見立てた「イナッショさま」<sup>6</sup>、日本人が描いた「聖ミカエル」<sup>7</sup>及び「十五玄義」<sup>8</sup>などの複数の聖画像が秘匿され、密かに祈りが捧げられていた（写真 2-039、写真 2-040、写真 2-041、写真 2-042）<sup>9</sup>。

さらに、1603 年に編纂された「こんちりさんのりやく」(罪を報いて赦しを求める祈り)の写しなどの日本語の教理書も伝承されていた（写真 2-045）<sup>10</sup>。出津集落の潜伏キリシタンは、祈りの言葉であるオラショを口承で伝えており、日常的に各自が無音か小声で唱えた。

出津集落の潜伏キリシタンの墓は、一見すると仏教徒の墓とは区別がつかない外観である。しかし、潜伏キリシタンが死者を埋葬する際には、仏教徒のような「座棺」ではなく、膝を曲げて身体を横にする「寝棺」の方式を採り、頭部を南に向けて埋葬した（写真 2-046）。棺内には、禁教期の外海の潜伏キリシタンの間で神聖視されたツバキの木片も副葬されたことが判明している<sup>11</sup>。

禁教期の出津集落では、斜面地に石積みを築いて段々畑を造成し、サツマイモ栽培を中心とする農業を営んでいた（写真 2-047）。そのため、家屋・畑地・墓地をひとつの単位とする集落構造が形成された（写真 2-048、写真 2-049）。貧しい土地ながらも人口が多かった外海地域では、五島藩と大村藩との協定によって 18 世紀末から五島への開拓移住が行われ、出津集落もその拠点のひとつとなった。

1865 年 9 月に出津集落に大浦天主堂での「信徒発見」の知らせが伝わると、出津集落の潜伏キリシタン指導者は密かに大浦天主堂の宣教師と接触し、信仰を告白するとともに教理の指導を受け、密かに宣教師を集落へと招いた<sup>12</sup>。出

5

「無原罪のプラケット」は、外海地域の主任司祭であったド・ロ神父が、禁教時代に外海で伝承されたものとして保管していたメダルである。

6

「イナッショさま」は、キリシタンであった庄屋の屋敷に伝来した像である。正月には、村人たちがこの像にお酒を供え、祈りを捧げたという。

7

「聖ミカエル」は、禁教期に信仰組織に所属していた O 家に伝来した聖画像である。原本は焼失し、写本(長崎歴史文化博物館所蔵)が残る。

8

「十五玄義」は、禁教期以来 J 家に伝来した聖画像である。原本は焼失し、写本(長崎歴史文化博物館所蔵)が残る。

9

上記の 3 点のほか、伝来の経緯が特定されていないが、出津集落を含む外海地域に伝世したと考えられる絵画「雪のサンタ・マリア」(日本二十六聖人記念館所蔵)のほか、もともと出津集落に所在し、ド・ロ神父を経てフランスへと渡ったが、近年再び長崎に戻った絵画「無原罪の聖母像」(カトリック長崎大司教区所蔵)がある(写真 2-043、写真 2-044)。

10

「こんちりさんのりやく」の写しは、1869 年にプティジャン神父が、伝本に漢文を加えた補訂版を石版刷りとして秘密出版したものである。

## 005 外海の出津集落

津集落の潜伏キリシタンは、最終的にカトリックに復帰する者と禁教期の信仰形態を継続する者（かくれキリシタン）に分岐した<sup>11</sup>。

カトリックへと復帰した潜伏キリシタンは、キリスト教が解禁された 1873 年に、禁教期以来の聖画像を所有していたキリシタンの屋敷の隣に仮聖堂を建てた。その後、1882 年には、パリ外国宣教会の所属の宣教師であったド・ロ神父が集落を見下ろす高台に出津教会堂を建造した（写真 2-051）。出津教会堂には、海からの強風を避けるために低い屋根・天井を採用し、1891 年及び 1909 年の増築に伴って前後にふたつの塔が建つなど、外観上の特質が見られる（写真 2-052、写真 2-053）。ド・ロ神父は、村民の貧しい生活を改善するために、教会堂に隣接して授産施設である救助院の建物も建造した（写真 2-054）。

出津集落において、解禁直後にカトリックへと復帰した人々が約 3,000 人であったのに対し、引き続き禁教期の信仰形態を継続したかくれキリシタンの人々は約 5,000 人であった。しかし、その後カトリックに帰依する人々は徐々に増加し、20 世紀中頃にはカトリック信者とかくれキリシタンとの人数の割合はほぼ等しくなった。現在では、かくれキリシタンの多くは仏教徒又はカトリック信徒へと移行している。

出津集落は、潜伏キリシタンが聖画像・教会暦・教理書を秘匿しつつ密かに信仰を続けた集落の様相を良く留めている。集落を管轄した代官所跡、聖画像を所有していた屋敷跡、墓地、生業空間などの禁教期以来の土地利用の在り方が大きく変わることなく残されており、これらを含む範囲を推薦資産の範囲としている。

11

長崎県編(2013)『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 210 集、P.328.

12

小濱浦は、プティジャン神父の最初の上陸地であった（写真 2-050）。

13

出津集落では、宣教師との接触後にも、その指導下に入るか否かについて意見の相違があり、伝承してきた聖画像の所有を巡る対立にまで発展した。これは「野中騒動」と呼ばれている。



## 005 外海の出津集落



**写真 2-039** 無原罪のプラケット(長崎市ド・口神父記念館所蔵)  
大きさ(縦×横): 11.0 x 7.0 cm



**写真 2-040** イナッショさま(長崎市外海歴史民俗資料館所蔵)  
密かに保管されていた木箱内には、紙のこよりで結ばれた口ザリオの珠も収められていた。  
大きさ(縦×横): 12.0 x 7.5 cm



**写真 2-041** 聖ミカエル(写本、長崎歴史文化博物館所蔵)



**写真 2-042** 十五玄義(写本)(長崎歴史文化博物館所蔵)

※上記のものはすべて同じスケールで表示されているわけではありません。

## 005 外海の出津集落

写真 2-043 雪のサンタマリア

禁教期に外海地域に伝わった聖画で、禁教令の前後に日本で描かれたものと考えられ、日本独特の軸装（掛け軸とするための布を用いた加工）である。



写真 2-044 サンタマリアの御絵(仮)

※上記のものはすべて同じスケールで表示されているわけではありません。

## 005 外海の出津集落



写真 2-045 こんちりさんのりやく(長崎市外海歴史民俗資料館所蔵)

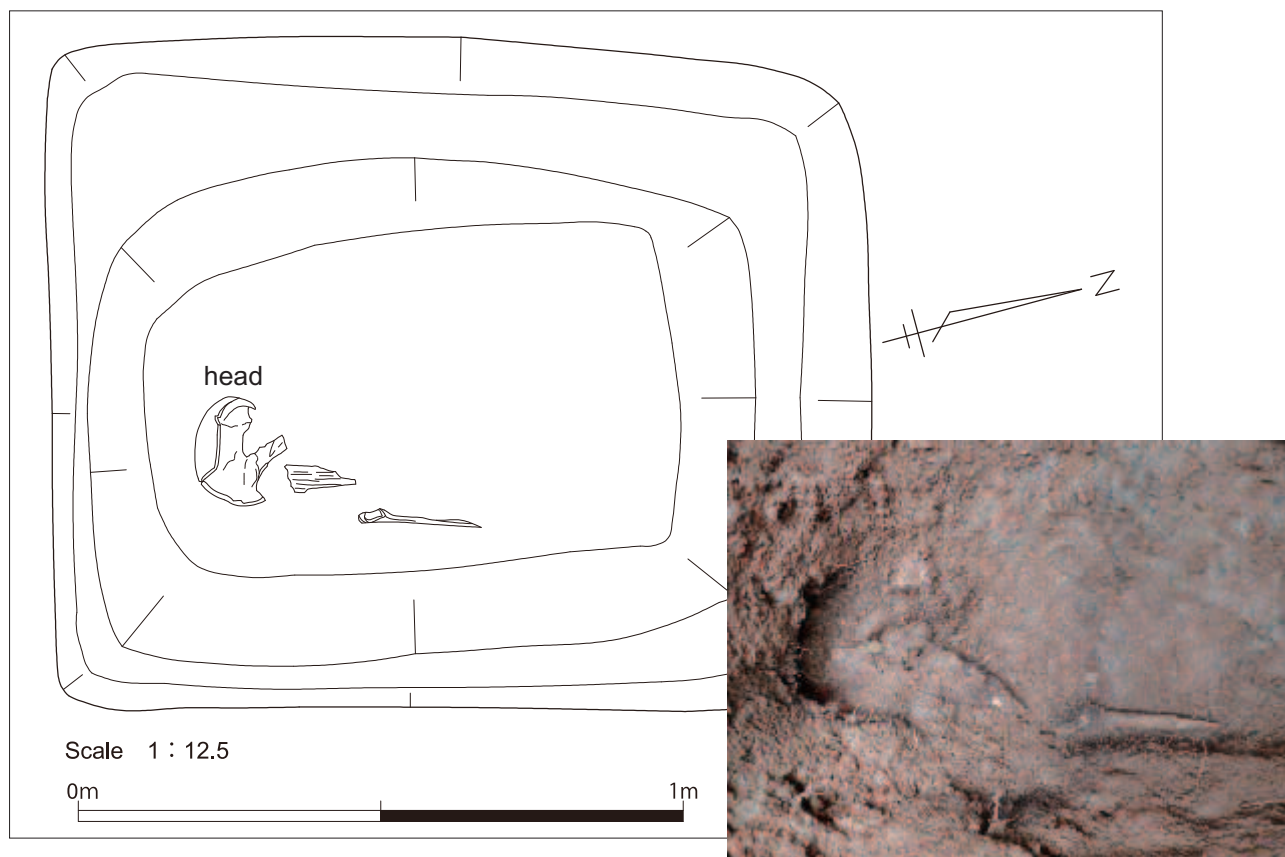


写真 2-046 発掘調査で確認された人骨(発掘調査時の写真)



## 005 外海の出津集落



写真 2-047 出津集落 (19世紀後半から20世紀初頭に撮影)



写真 2-048 野中集落



## 005 外海の出津集落



写真 2-049 菖蒲田墓地



写真 2-050 小濱浦



## 005 外海の出津集落



写真 2-051 高台に建つ出津教会堂



写真 2-052 低い屋根と天井の出津教会堂



## 005 外海の出津集落



写真 2-053 前後にふたつの塔をもつ出津教会堂



写真 2-054 出津代官所跡に建つ旧出津救助院

## 005 外海の出津集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去



写真 2-055 出津集落古図(1862年)(彼杵郡三重郡賤津村・黒崎村・永田村／文久2年壬戌夏仕立、長崎歴史文化博物館所蔵)



## 005 外海の出津集落

現在

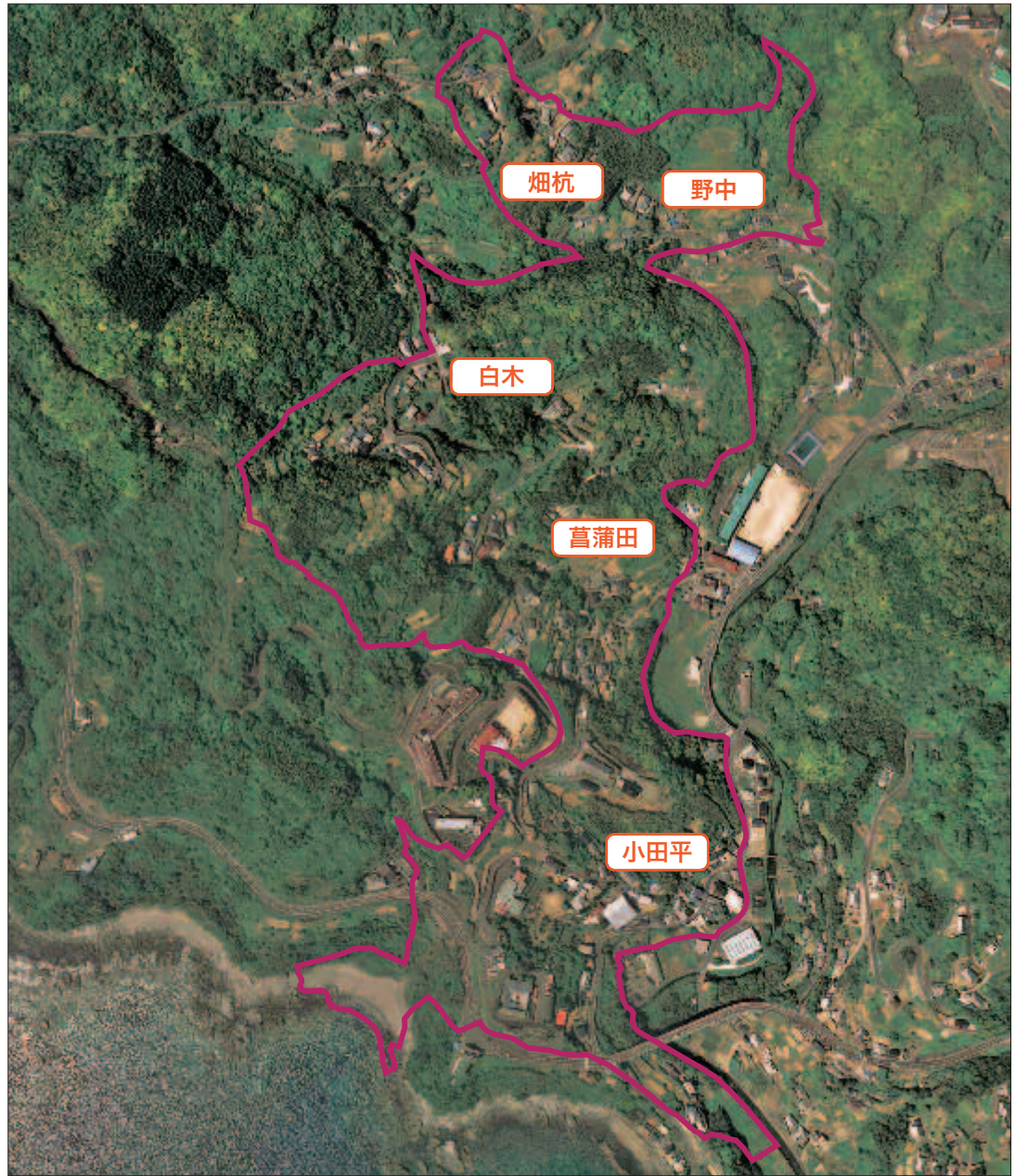


写真 2-056 現在の出津集落





写真 2-057 大野集落

## 006

### 外海の大野集落

外海の大野集落は、潜伏キリシタンが自らの信仰を装うために仏教徒や集落内の神社の氏子となり、神社に自らの信仰対象を密かに祀り、在来宗教である神道における祭祀の場と潜伏キリシタンの信仰における祈りの場とを共存させた集落である。解禁後にカトリックへと復帰した大野集落の潜伏キリシタンは、当初、外海の出津集落に所在する出津教会堂へと通っていたが、その後、自らの集落の中心に大野教会堂を建造して祈りの場とした。





## 006 外海の大野集落

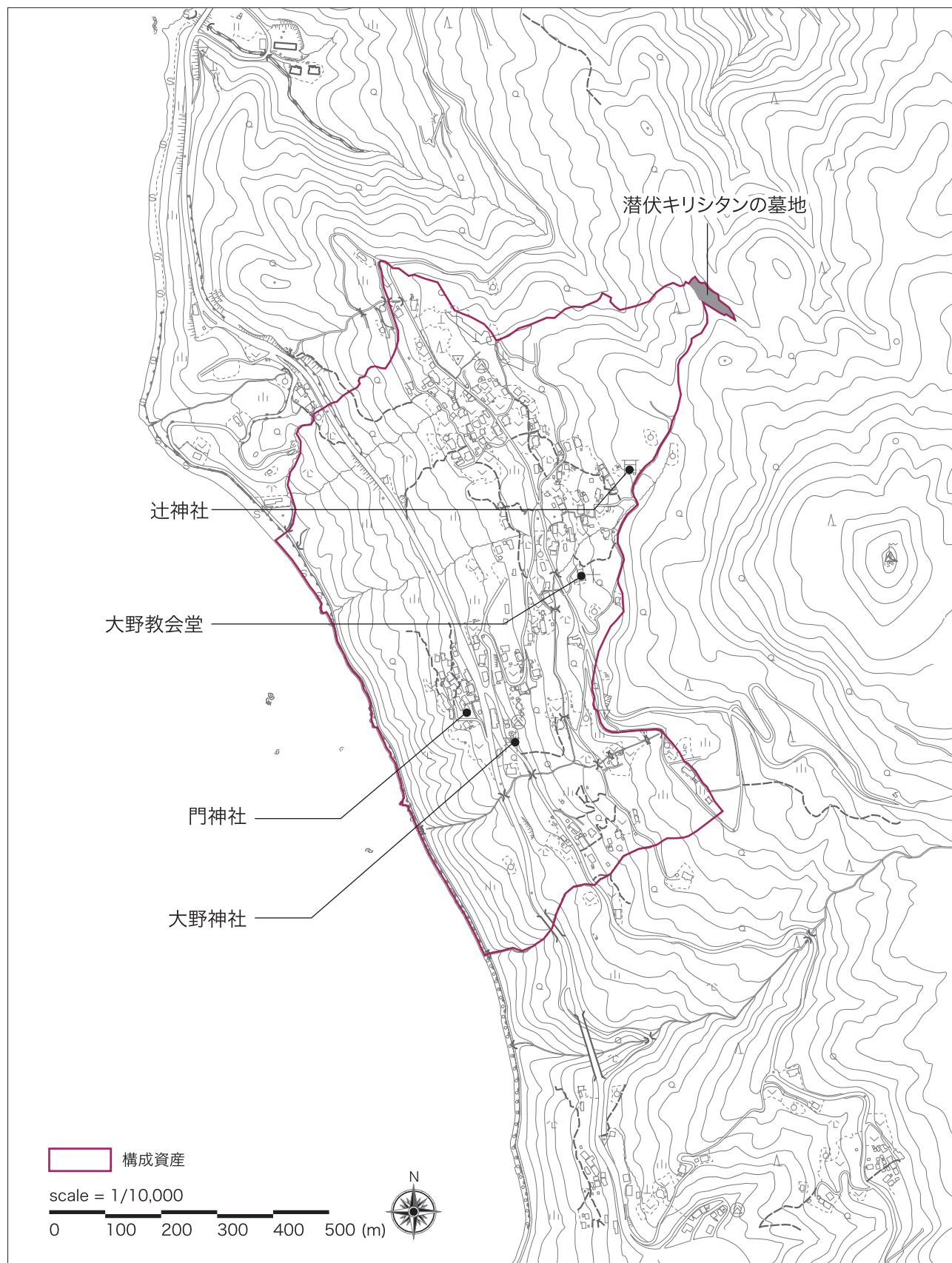


図 2-012 要素位置図(006 外海の大野集落)

## 006 外海の大野集落

外海の大野集落は、西彼杵半島の西岸にあたり、東シナ海に面する急傾斜地に展開している（写真 2-057）。潜伏キリシタンが信仰を装うために氏子となり、潜伏キリシタンとしての信仰対象を密かに祀った神社、潜伏キリシタンの墓地、解禁後に建造された教会堂から成る。

大野集落の一带では、1571年にイエズス会の宣教師が宣教活動を行い、キリスト教が伝わった<sup>1</sup>。大野集落は、大村藩に属する神浦地区の一部であり、多くの者が洗礼を受け、出津集落と同様に宣教が進んだ<sup>2</sup>。

1614年に全国に禁教令が出され、大村藩でも藩主が棄教した。大村領内ではキリシタンに対する弾圧が行われたが、禁教初期に作成された大村領内の迫害及びドミニコ会士の活動を証言したキリシタン指導者らの署名文書（「徴収文書」）によると、大野集落の潜伏キリシタンは密かに信仰を継続していたことがわかる<sup>3</sup>。禁教が進み、宣教師が不在となる一方、大野集落の潜伏キリシタンは表向き仏教寺院に所属しつつ、集落内の3つの神社（大野神社・門神社・辻神社）の氏子としても振る舞い<sup>4</sup>、組織的に潜伏キリシタンとしての信仰を継続した。

集落の南部に位置する大野神社は、3つの神社の中でも集落全体の守り神として最も社格が高く、代々庄屋<sup>5</sup>が神主を務めた神社であり、その氏子は集落民の大多数を占めた（写真 2-058）。そのため、大野集落の潜伏キリシタンも同神社の氏子として神道の信者であることを装った。また、潜伏キリシタンは、より身近な存在であった門神社又は辻神社を

1

1571年10月16日付のベルショール・デ・フィゲイレド書簡には、大野集落に隣接する神浦集落での宣教の記録が見える。松田毅一監訳(1998)『16・17世紀イエズス会日本報告集』、同朋舎、P.112。

2

ペドロ・ゴメス(1594)『日本年報』。

3

1615年にドミニコ会のコリヤードが作成した徴収文書の中には、大野集落のキリシタンとして、「大野村 山口吉右衛門尉とめい」との記述がある。

松田毅一(1967)「元和元年、ドミニコ会士コリヤード徴収文書」『近世初期日本関係 南蛮資料の研究』、風間書房、P.1187。

4

禁教期の日本では「寺請制」により仏教寺院への所属が強制されるとともに、集落の守り神である神社にも「氏子」として所属していた。

5

1661年に大野集落は大村藩家臣の知行地となり、1697年に庄屋が設置された。1789年から1814年までの間に製作されたと考えられる『大村管内絵図』には大村藩領の全体像が平面図として描かれている、その中には、大野集落の知行地の範囲が朱線で示されており、現在の集落の範囲と一致していることがわかる。



## 006 外海の大野集落

潜伏キリシタンの信仰の場として利用し、自らの信仰の対象を密かに祭神として祀り、祈りを捧げた。

集落の南西に位置する門神社<sup>6</sup>には、もともと様々な神が祀られていたが、その中に「島原・天草一揆」の際に大野に逃れてきた「本田敏光」というキリシタンも含まれていたと伝わる（写真 2-059）。大野集落の潜伏キリシタンは、この祭神を禁教初期に外海地域一帯で活動したとされるポルトガル宣教師と同名の「サンジュワン」と呼称し<sup>7</sup>、密かに崇拜の対象とした。

一方、集落の東端に位置する辻神社は古来の自然信仰に基づく山の神を祀った神社であったが、潜伏キリシタンはその祭神を門神社と同様に「サンジュワン様」と呼び、密かに信仰の対象とした（写真 2-060）。

さらに、辻神社から北東方山域へと連続する傾斜面には、潜伏キリシタンの積石墓が今も残っている（写真 2-061<sup>8</sup>）。

大野集落では、大野岳から海浜部に至る急斜面に石積みを築いて耕作地とし、サツマイモ栽培を主体とする農業を営んでいた（写真 2-062）。18 世紀末には五島藩と大村藩の協定により外海地域から五島への開拓移住が行われ、それに伴って大野集落からも五島への移住が行われた<sup>9</sup>。

19 世紀半ばに日本の開国に伴って宣教師が来日すると、外海地域の潜伏キリシタンは大浦天主堂の宣教師と接触を図り、大野集落の南に位置する出津集落に密かに宣教師が来訪した。これにより大野集落の潜伏キリシタンも宣教師と接触し、解禁後の 1877 年頃から多くの村人たちが洗礼を

6

大野集落の潜伏キリシタンの各家では、信仰の対象として祠及び石などが祀られていたが、そのうちのいくつかは解禁後に門神社へと合祀された。

7

外海地域一帯には、禁教期の初期に長崎周辺で活躍したサンジュワンの洗礼名を持つポルトガル人宣教師の伝承があり、門神社及び辻神社の祭神の呼称と重なったものと考えられる。この宣教師はバスチャンという日本人伝道士に日繰りなどを教えたとされ、潜伏キリシタンの信仰継続の拠り所となっていた。

8

片岡瑠美子(2012)『キリシタン墓碑の調査研究-その源流と形式分類のための再調査-』長崎純心大学、P.50.

9

『五島青方村天主堂御水帳』（立教大学海老沢有道文庫）。

## 006 外海の大野集落

受け、カトリックへと復帰した。

当初、大野集落のキリシタンは、約 3 k m 離れた出津集落の出津教会堂へと通っていた。しかし、1893 年には洗礼を受けた村人が 200 名を超えた。また、離れた場所にあるため、出津教会堂には通えない 26 戸の信者が教会堂へと通えるようにする必要もあった。そのため、1893 年には、集落の中心に出津教会堂の巡回教会として大野教会堂が建造された。

大野集落では、1912 年までにさらに 200 名を超える多くの村人が洗礼を受けた。しかし、その後の変遷により、現在ではカトリック信者の世帯数が数戸にまで減少し、集落民の大半は仏教徒となっている。

大野集落には、潜伏キリシタンが氏子となり、神道に基づく本来の祭神をキリスト教に由来する祭神として密かに祈った神社をはじめ、潜伏キリシタンの墓を含む墓地、集落の地割など、禁教期以来の土地利用形態が大きく変わることなく残されており、解禁後に建造された教会堂を含め、それらの全てを推薦資産の範囲に含めている。



## 006 外海の大野集落



写真 2-058 大野神社



写真 2-059 門神社

一見すると一般的な神社であるが、潜伏キリシタンの信仰対象を祭神としており、大野集落では神道を装って信仰を続けていた。



写真 2-060 辻神社



## 006 外海の大野集落



写真 2-061 潜伏キリシタンの墓地



写真 2-062 大野集落



## 006 外海の大野集落



写真 2-063 大野教会堂



写真 2-064 大野教会堂の内観

## 006 外海の大野集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去

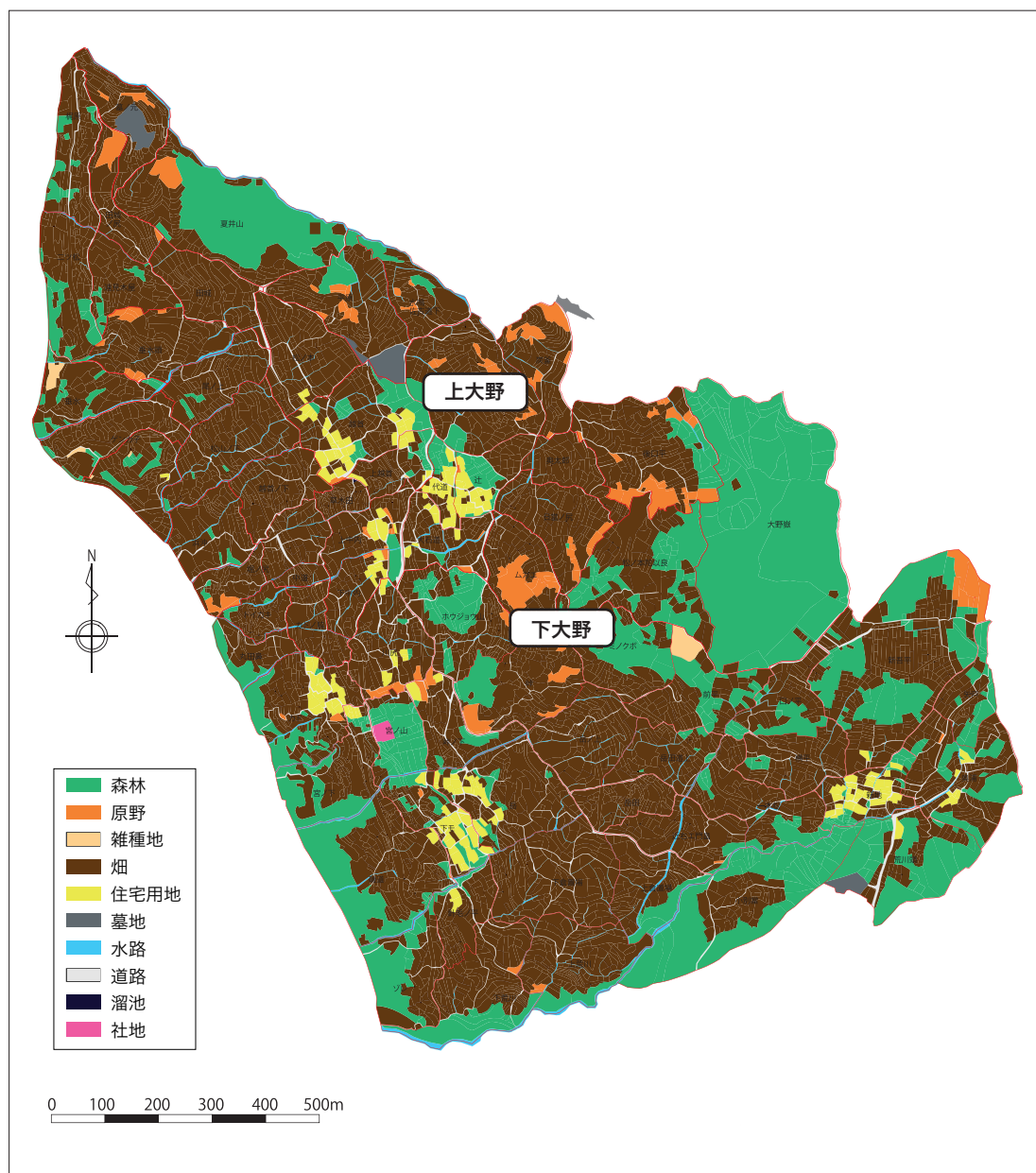


図 2-013 大野集落の土地利用図(明治期)



## 006 外海の大野集落

現在

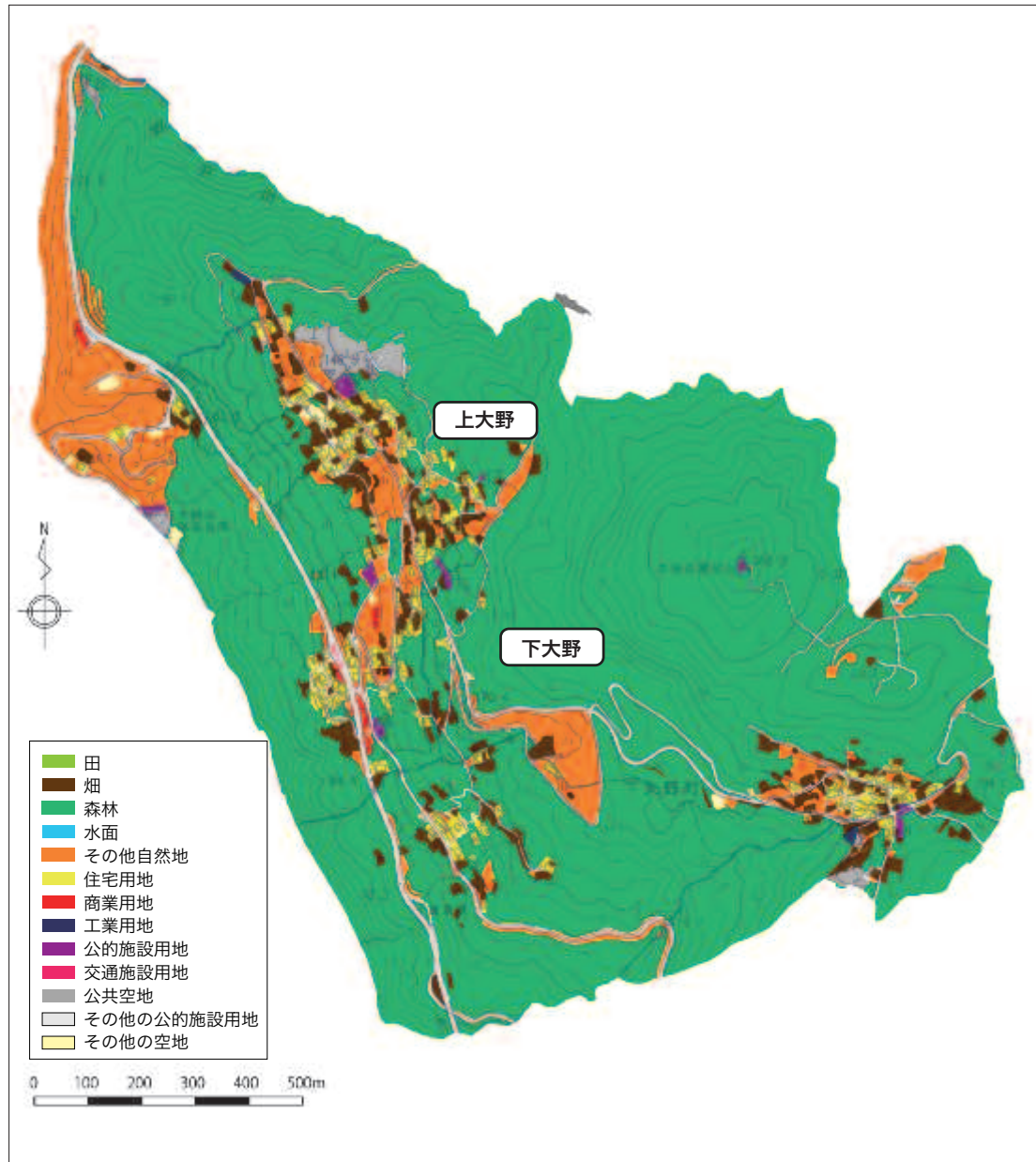


図 2-014 大野集落の土地利用図(現在)



写真 2-065 黒島

# 007

## 黒島の集落

黒島の集落は、19 世紀半ばに潜伏キリシタンが藩の牧場跡の再開発地となっていた場所へと移住し、信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの集落である。平戸藩が黒島の牧場跡地への耕作移住を奨励した<sup>1</sup>のに応じて、島外各地から黒島へと移住した潜伏キリシタンは、表向き所属していた仏教寺院で密かに「マリア観音」の像に祈りを捧げ、既存の仏教集落の非干渉にも助けられて、自らの信仰を継続した。解禁後はカトリックへと復帰し、かつての水方屋敷を「仮の聖堂」とした後、島の中心部に教会堂を建造した。





## 007 黒島の集落

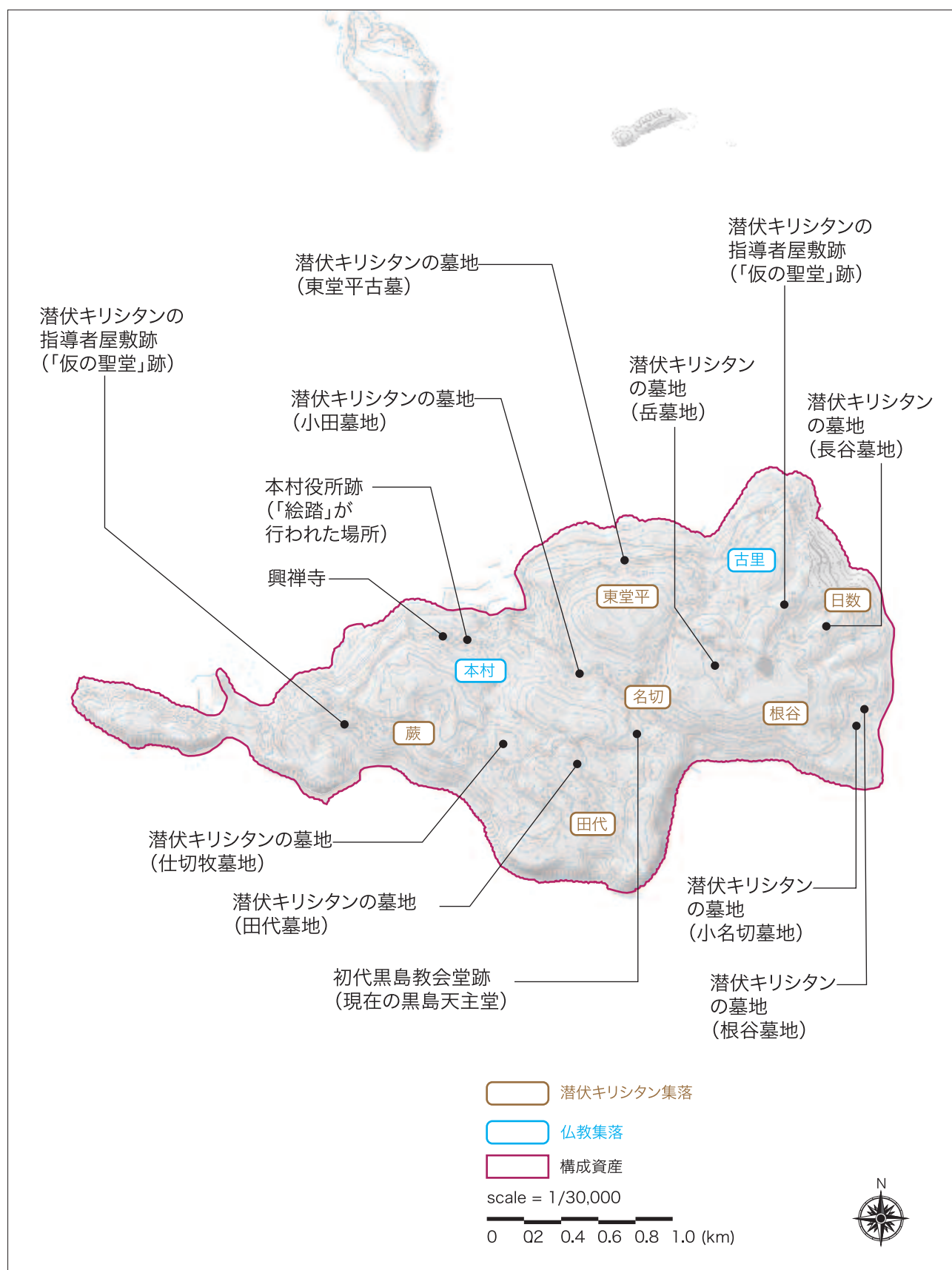


図 2-015 要素位置図(007 黒島の集落)

## 007 黒島の集落

黒島は、九州北西部の佐世保市の西方海上に浮かぶ周囲約12kmの小島である(写真2-065)。外海地域から移住した潜伏キリシタンが再開拓して畑地とした牧場跡、隠れ蓑として所属しつつも、密かにマリア観音を安置し礼拝した仏教寺院、潜伏キリシタンの信仰組織の指導者の家屋跡、墓地、絵踏が行われた役所跡、解禁後に建造された教会堂跡から成る。

黒島の名称は、古く13世紀頃の文献史料に初出する<sup>2</sup>。15世紀頃から北方の平戸島の勢力下に入り、島の北辺部に本村集落が形成された(写真2-066)。16世紀後半に黒島で宣教師が活動した記録が存在しないことから、黒島への直接的なキリスト教の伝来はなかったものとみられる。

17世紀になると黒島には平戸藩の牧場が設置されたが<sup>3</sup>、19世紀初頭に廃止された<sup>4</sup>。その後、牧場跡の再開発を企図した平戸藩は開拓民の誘致政策を進めたため、それに応じて外海地域などから黒島へと移住した開拓民が、19世紀中頃にかけて新たに7つの集落を島内に形成した。これらの開拓移住民の中には外海地域などを出身地とする多くの潜伏キリシタンが含まれており、新しく形成された7つの集落のうち6つ(日数・根谷・名切・田代・蕨・東堂平)は潜伏キリシタン集落であった(写真2-067、写真2-068)

<sup>5</sup>。

黒島に移住した潜伏キリシタンたちは、移住により島内人口が増加したのに伴い、19世紀初頭に造営された本村集落の興禅寺に所属し、表向きは仏教徒として振る舞った<sup>6</sup>。

<sup>1</sup>

外海地域から五島への移住が大村藩と五島藩との協定に基づき実施されたのに対し、平戸藩領である黒島への移住は、平戸藩領内から藩主導で行われた。このほか、大村藩領から五島藩領へ向かう移民のうち黒島へ移住を希望した者に平戸藩が許可を与えており、協定に基づかずに行われた移住があった。

<sup>2</sup>

『青方文書』文永8年(1271)の条には、峯湛(たたう、後の平戸松浦氏)が、南黒島の地頭職を安堵された記事が見える。ただし、峯湛が実効支配したことを示す史料は存在しない。

<sup>3</sup>

『西家旧記集』の元禄3年(1690)及び宝永2年(1705)の各条には、黒島牧の設置に関する記事が見られる。ただし設置された場所を正確に示す記録はない。

<sup>4</sup>

『家世伝』及び『家世伝草稿』には、享和2年(1802)に黒島牧が廃止されたことを記す。

<sup>5</sup>

7つの集落のうち、6つの潜伏キリシタン集落以外の古里集落は仏教集落であった。

<sup>6</sup>



## 007 黒島の集落

黒島では、毎年、本村集落の本村役所（黒島を管轄する平戸藩の出先の役所とされていた庄屋屋敷）において潜伏キリシタンの取締が行われ、潜伏キリシタンはキリスト又は聖母マリアの像を踏むこと（絵踏）を余儀なくされた（写真 2-069）<sup>7</sup>。

興禅寺の本堂には、観音菩薩立像を聖母マリア像に見立てた「マリア観音」の像を密かに安置し<sup>8</sup>、寺院に参拝することを装いつつ、実際にはマリア像に祈りを捧げていた（写真 2-070、写真 2-071）。黒島の潜伏キリシタンが表向きは仏教徒を装いつつ、指導者を中心として組織的に自らの信仰を継続したことは、一見すると仏教徒のもののように見えるが、実は墓石の向き及び埋葬の方法が仏式とは全く異なる独特の墓地が形成されたことにも表れている（写真 2-072）。

19 世紀に宣教師が来日すると、黒島の潜伏キリシタンの指導者は密かに大浦天主堂の宣教師と接触し、自らの信仰を告白した。禁教下の黒島で行われてきた洗礼の方法は無効である旨が宣教師から告げられたことから、改めて教理の指導を受けることとなり、禁教が解かれる直前の 1872 年に黒島の潜伏キリシタンは全てカトリックへと復帰した<sup>9</sup>。

復帰の当初は、かつての指導者の家など島内の 2 ヶ所を「仮の聖堂」とした。そのうちの 1 ヶ所は、日数集落において代々「水方」を務めた出口家の屋敷であった（写真 2-073）<sup>10</sup>。やがて新たな教会堂の建造に対する機運が強まり、1880 年に各集落から利便の良い島の中央部に初代の黒島教会堂

## 6

宝亀道聰の調査によると、興禅寺の過去帳に記載された檀家の数は以下のように変遷することが判明している（宝亀道聰（1971）『合同史跡探訪記 黒島』『郷土研究』創刊号、佐世保郷土研究所、P.76.）。

文久 2 年（1862） 20 人

明治 3 年（1870） 16 人

明治 4 年（1871） 14 人

明治 5 年（1872） 6 人

明治 6 年（1873） 5 人

上記の調査成果によると、1872 年以降は記載者が激減していることがわかる。これは、1865 年の大浦天主堂における「信徒発見」の後、黒島の潜伏キリシタンが 1873 年の禁教高札の撤廃を待たずに自らの信仰を表明したことを示している。同時に、禁教期の黒島の潜伏キリシタンが表向きは仏教寺院に所属していたことも裏付けている。

## 7

黒島天主堂では、現在でも禁教期の絵踏を贖罪する祈りが毎週行われている。本村役所跡は、黒島における禁教の記憶が今なお継承されている場所である。

## 8

潜伏キリシタンが祈りを捧げたマリア観音像は、一般的に中国の白磁製である場合が多かったが、興禅寺のマリア観音像は長崎近郊で造られた陶器製のものであったという（岡崎幸枝（1977）『黒島とマリア観音について』『郷土研究』4 号、佐世保郷土研究所、P.53-55.）。

残念ながら、現在はその所在が確認されていない。

## 007 黒島の集落

が建造された（写真 2-074）。その後、信徒の増加に伴い教会堂の建て替えが企画され、海岸沿いから建築資材を運ぶなど信徒全員の労働奉仕及び費用負担の下に、1902 年に新築された教会堂が現在の黒島天主堂である。黒島天主堂では、今なお往時の絵踏を贖罪する祈りが毎週捧げられ、禁教期の記憶が確実に伝えられている（写真 2-075）。

黒島には 19 世紀前半に移住した潜伏キリシタンに起源をもつ 6 つの集落が分布し、指導者の屋敷跡、墓地、生業に関わる土地利用形態が大きく変わることなく残されている。19 世紀後半の新たな信仰の局面を迎えた後に建てられた「仮の聖堂」の跡をはじめ、初代の教会堂跡も良好に遺存している。潜伏キリシタンに対して非干渉の姿勢を取り続けた仏教集落内に位置し、潜伏キリシタンが密かにマリア観音像を安置して祈りを捧げた仏教寺院及び絵踏が行われた代官所跡も良好な保存状態にある。それらは、黒島の牧場跡地へと移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を表している。これらの遺跡とともに、禁教期の潜伏キリシタンと仏教徒との関係を示す 8 つの集落を含む黒島の全域を推薦資産の範囲としている。

9

早稲田大学所蔵の『在崎日記第十六号』によれば、黒島在住の 184 戸（およそ 1,000 人）がカトリックに入信したとの記述がみられる。長崎県編（2013）『長崎県内の多様な集落が形成する文化的景観保存調査報告書』長崎県文化財調査報告書第 210 集、P.657.

なお、この記述は前掲注 6 の宝亀道聰の調査報告とも符号する。

10

今ひとつの「仮の聖堂」は、島内の交通の便を考慮して蕨集落に設けられた。



## 007 黒島の集落



写真 2-066 本村集落



写真 2-067 根谷集落



## 007 黒島の集落



写真 2-068 蕨集落



写真 2-069 本村役所跡



## 007 黒島の集落



写真 2-070 興禅寺と梵鐘

1814年に造られたこの梵鐘には、寄進者として潜伏キリシタンの名がみえ、寺と潜伏キリシタンの密接な関係がうかがわれる。



写真 2-071 興禅寺のマリア観音(現存しない)



## 007 黒島の集落



写真 2-072 仕切牧墓地

仕切牧墓地にある仏教形式の潜伏キリシタン墓の多くは、通常の仏教墓が西向きであるのに対し、東向きである。



写真 2-073 出口家の屋敷跡



## 007 黒島の集落



写真 2-074 初代黒島教会堂の跡地に建つ現在の黒島天主堂



写真 2-075 贖罪の祈り

## 007 黒島の集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去

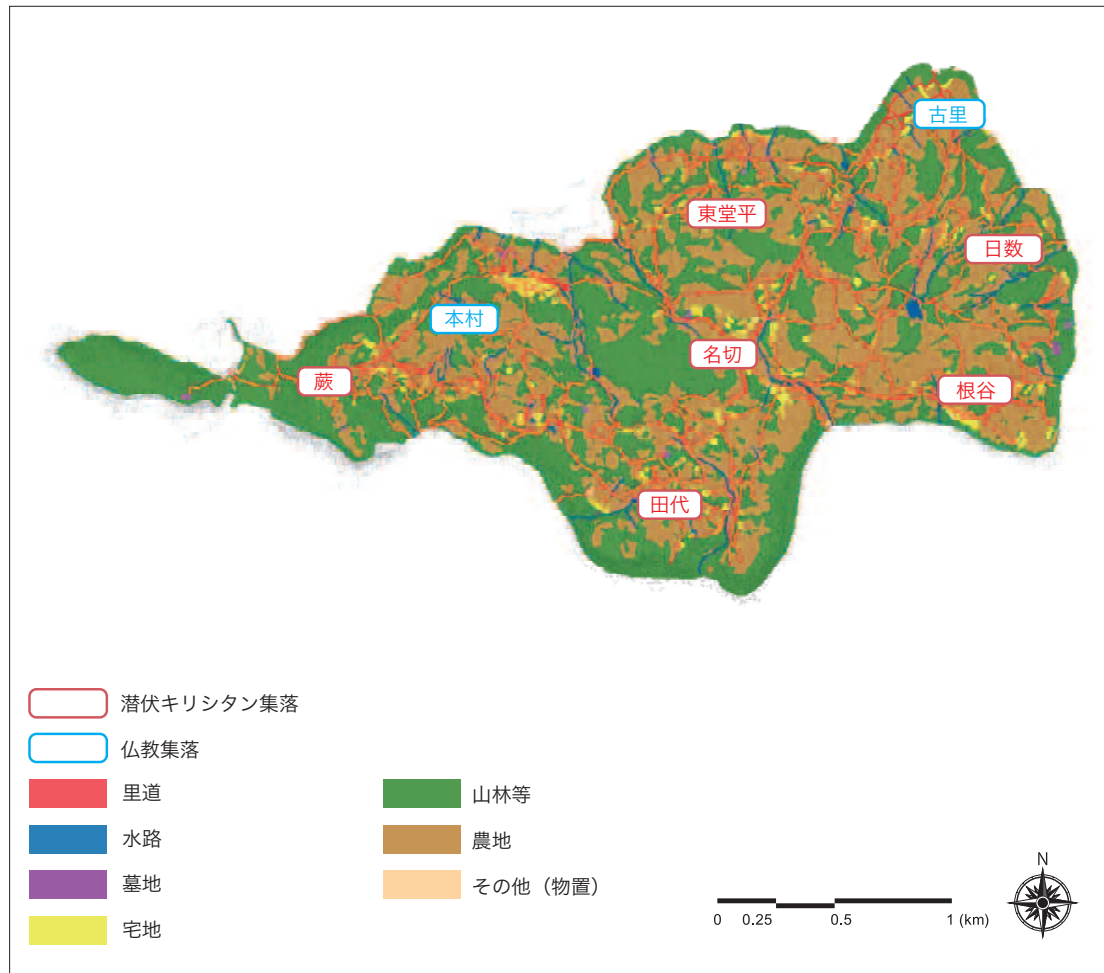


図 2-016 黒島の土地利用図(明治 10 年代)



## 007 黒島の集落

現在

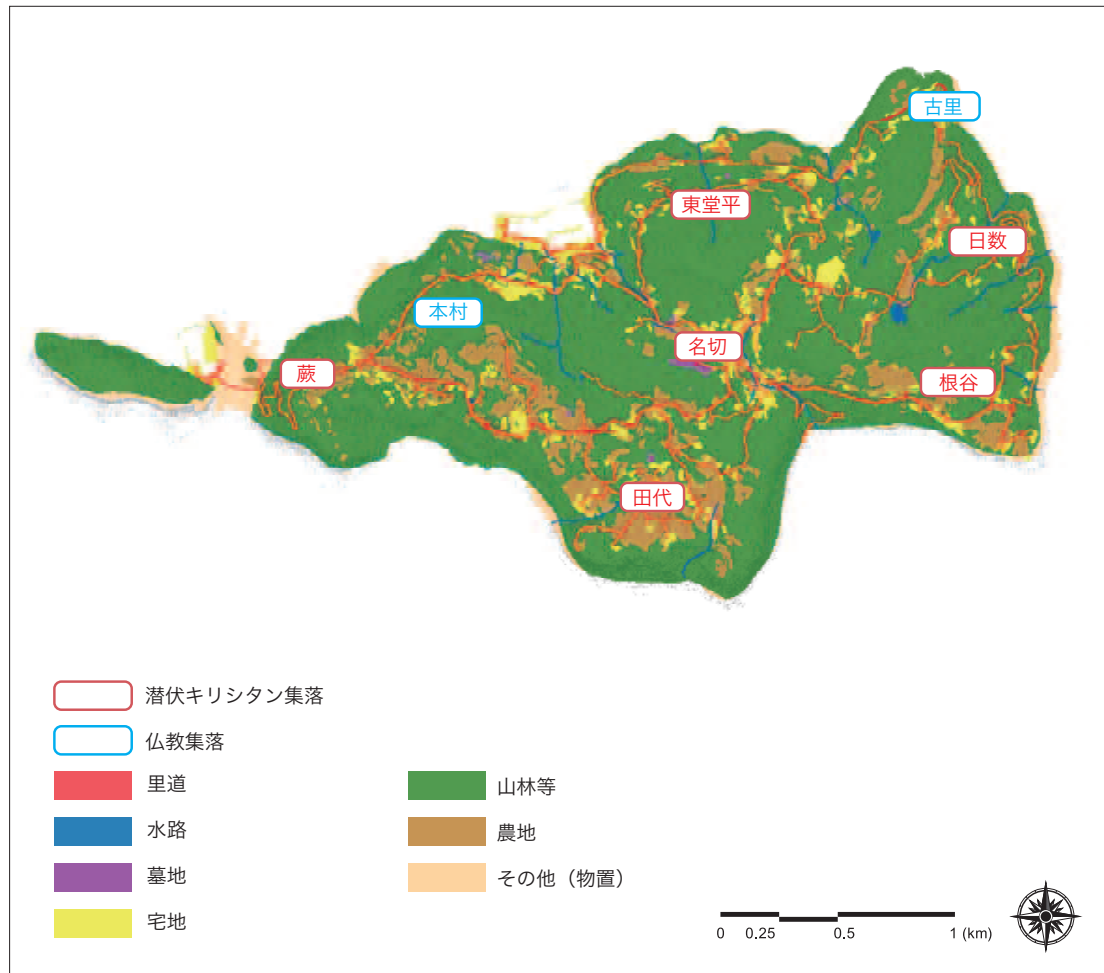


図 2-017 黒島の土地利用図(現在)

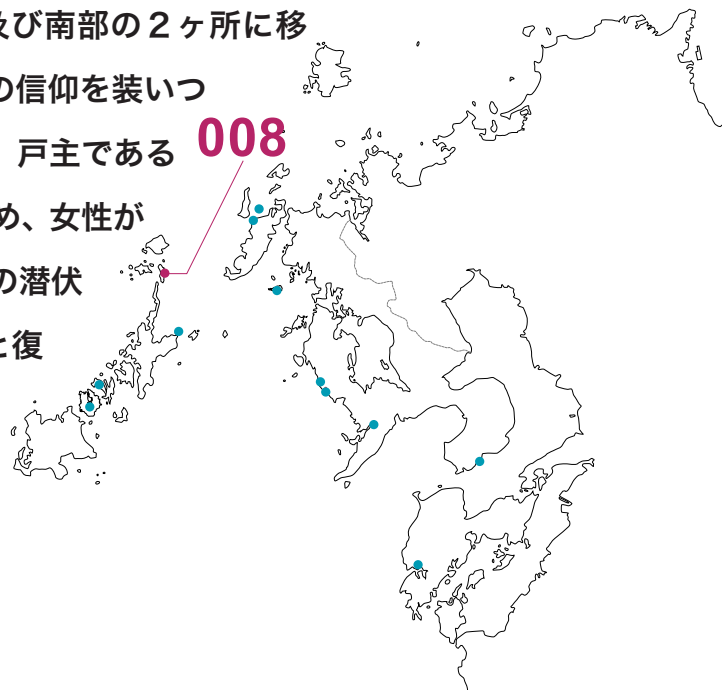


写真 2-076 野崎島

# 008

## 野崎島の集落跡

野崎島の集落跡は、19世紀以降に潜伏キリシタンが神道の聖地へと移住することにより、自らの信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの集落の遺跡である。外海地域から海を渡った潜伏キリシタンは、五島列島一円から崇敬を集めていた沖ノ神嶋神社の神官の居住地のほかは未開地となっていた野崎島の中央部及び南部の2ヶ所に移住し、神社の氏子となることにより在来の神道への信仰を装いつつ、密かに潜伏キリシタンとしての信仰を続けた。戸主である男性は氏子としての役職を務める必要があったため、女性が潜伏キリシタンの信仰の指導者となった。野崎島の潜伏キリシタンは、キリスト教解禁後にカトリックへと復帰し、2つの集落のそれぞれに教会堂を建てた。





## 008 野崎島の集落跡

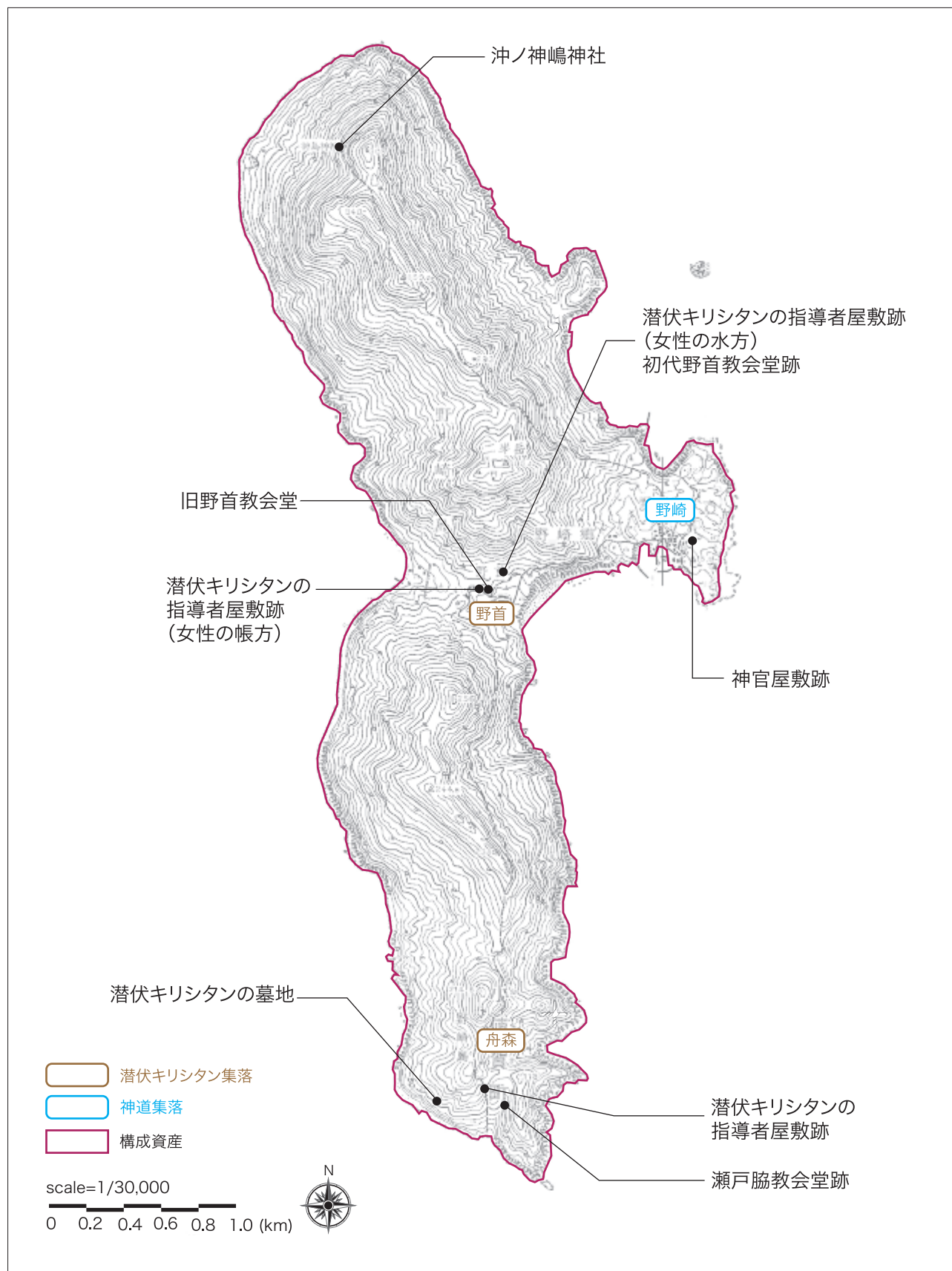


図 2-018 要素位置図(008 野崎島の集落跡)

## 008 野崎島の集落跡

野崎島は、五島列島の北部に位置する南北約 6 km、東西約 1.5 km の細長い島で、島の中央部のなだらかな傾斜面を除き、周囲を急峻な断崖絶壁が取り囲む険阻な地形から成る（写真 2-076）。潜伏キリシタンが、信仰を装って氏子となった沖ノ神嶋神社及びそれを管理した神官屋敷跡、潜伏キリシタンが耕作した石積み等を伴う畑地跡、解禁後に建てられた初代野首教会堂跡及び瀬戸脇教会堂跡から成る。

島の中央部の野首地区及び東部の野崎地区付近では、考古学的な調査によって縄文時代以来の生活の痕跡が明らかとなっている。島の北部には沖ノ神嶋神社が祀られている。社殿の背後には高さ約 24m、幅約 12m の溶結凝灰岩から成る 2 本の石柱状の巨石が立ち、これらの頂部に長さ約 5.3 m、幅約 3m、高さ 1.2m の「王位石」と呼ぶ今ひとつの巨石が載っている（写真 2-077）。これらの巨石群を含む沖ノ神嶋神社の社殿と境内は古来の聖地であるとされ、海上交通の守り神として五島列島一円から崇敬を集めてきた<sup>1</sup>。このように、野崎島は神道の霊地として一般の人々が容易に生活を営むことができない島であった。

野崎島は海岸線に沿って急峻な断崖が連続する小さな島であり、19 世紀までの間に人間が居住していたのは、島の中央部東岸沿いの野崎地区のみであった（写真 2-078）。野崎地区には、神官の屋敷地を含め約 20 戸から成る集落（野崎集落）が存在した（写真 2-079）。神官は、平戸藩の役人も兼ねており、実質的に島全体を統括していた。沖ノ神嶋神社の文献史料によると、野崎島では 19 世紀中頃に戸数が倍増しており、この頃に潜伏キリシタンによる入植が行われたことがうかがえる<sup>2</sup>。

## 1

沖ノ神嶋神社旧蔵『氏子帳』によれば、沖ノ神嶋神社の氏子は五島列島のほぼ全域に分布している。

## 2

天保年間(1830-44)には野崎島の戸数は 21 戸（『小値賀覚書』）であったが、文久元年には(1861)48 戸（沖ノ神嶋神社旧蔵『氏子帳』）へと倍増したことが知られる。外海から五島列島への移住は 18 世紀の終わり頃から始まったが、転住を繰り返す事例も多かった。小値賀島への移住は五島列島の北部を経由して行われたことから、その時期はやや遅れて 19 世紀に入るものと見られている。



## 008 野崎島の集落跡

19 世紀に野崎島へと移住した潜伏キリシタンは、沖ノ神嶋神社の氏子となり、野崎集落の神官屋敷内に併設された神社への遥拝所において、各種の神事に参加した。彼らは、小値賀本島の仏教寺院にも所属し、代官所で定期的に行われた「絵踏」に従うことにより<sup>3</sup>、潜伏キリシタンとしての自らの信仰を秘匿した。

潜伏キリシタンの移住先は、島の中で無人であった中央部の野首地区（野首集落）及び南端の舟森地区（舟森集落）であった（写真 2-080、写真 2-081、写真 2-082）。そこでは、権利関係から樹木を薪として伐採する権利も与えられず、急傾斜面を成す荒地に石垣を築いてわずかな平坦地を造成し、居住地及びイモ・ムギの栽培農地を切り開いた<sup>4</sup>。

野首集落では、キリシタン信仰を秘匿するために、戸主である男性が沖ノ神嶋神社の神事に携わり、代わって女性が潜伏キリシタンの指導者を担うという信仰上の独特の役割分担も行われた<sup>5</sup>。

日本の開国により来日した宣教師が、1865 年に大浦天主堂で潜伏キリシタンと出会ったいわゆる「信徒発見」を契機として、各地の潜伏キリシタンの指導者が密かに大浦天主堂の宣教師と接触を開始した。これに伴い、野崎島の潜伏キリシタンも宣教師との接触を図ったものとみられる<sup>6</sup>。1868 年に始まった五島での弾圧の際には、野崎島の潜伏キリシタンも一時平戸島へと連行された<sup>7</sup>。

しかし、1873 年にキリスト教が解禁されると、野崎島の潜伏キリシタンは全てカトリックへと復帰した。復帰の当初は禁教期の指導者の屋敷を「仮の聖堂」として信仰活動を継続していたが、舟森集落には 1881 年に、野首集落には

3

「絵踏」が行われた場所は、小値賀本島の代官所であったと考えられる。

4

明治 10 年代の製作と考えられる『野崎郷字図』には、居住地・農地の地割が描かれている。

5

男女の役割分担に関する記録は、『瀬戸脇教会お水帳』（1870 頃。原本所在不明。複写は長崎市海外歴史民俗資料館蔵。）に見られる。

6

1865 年 12 月には、五島列島北部の潜伏キリシタンの指導者が密かに大浦天主堂を訪れたことが知られている。

F. マルナス、久野桂一郎訳（1985）『日本キリスト教復活史』、みすず書房。

7

野崎島の潜伏キリシタンが平戸島へと連行されたのは、1869 年 11 月のことであった。

F. マルナス、久野桂一郎訳（1985）『日本キリスト教復活史』、みすず書房。

## 008 野崎島の集落跡

1882 年に、それぞれ最初の本造教会堂（瀬戸脇教会堂及び野首教会堂）を建造した。野首集落では、その後、2 回の建て替えを経て、1908 年にかつての帳方屋敷に隣接して現存する教会堂（旧野首教会堂）を建造した（写真 2-083、写真 2-084）。

なお、舟森集落に建造した瀬戸脇教会堂は、1966 年に舟森集落の住民が集団離村した際に廃絶したため、現在ではその跡地を残すのみである（写真 2-085、写真 2-086）。しかし、教会堂に附随する司祭館の建物は、教会堂の廃絶に伴って小値賀本島へと移築され現存している。

野崎島は、2001 年に野崎集落に住んでいた最後の住民が離村したことにより、現在は無人島となっている。しかし、潜伏キリシタンの移住の背景となった沖ノ神嶋神社の社殿とその背後の巨岩群をはじめ、移住以前から在住した野崎地区の神官屋敷、移住によって形成された野首及び舟森の 2 つの潜伏キリシタン集落跡、指導者の屋敷跡、墓地、住戸の痕跡及びそれらの周辺の農地の痕跡を示す石積み等の地割、解禁後に建造した教会堂又はその跡など、潜伏キリシタンに関わる多様な遺跡が良好に残されている。それらは、神道の聖地であったために未開拓地となっていた野崎島へと移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を表している。潜伏キリシタンの移住の対象となった島の険阻な地形をはじめ、移住の背景及び経過を物語る全ての信仰関連の痕跡を含め、全島を推薦資産の範囲としている。



## 008 野崎島の集落跡



写真 2-077 沖ノ神嶋神社



写真 2-078 野崎集落跡(1978年)



## 008 野崎島の集落跡



写真 2-079 神官屋敷跡



写真 2-080 野首集落跡



## 008 野崎島の集落跡



写真 2-081 舟森集落跡



写真 2-082 舟森集落跡における指導者の屋敷跡



## 008 野崎島の集落跡



写真 2-083 帳方屋敷の側に建つ旧野首教会堂(1935年頃)



写真 2-084 旧野首教会堂



## 008 野崎島の集落跡



写真 2-085 瀬戸協教会堂(1967年以前)

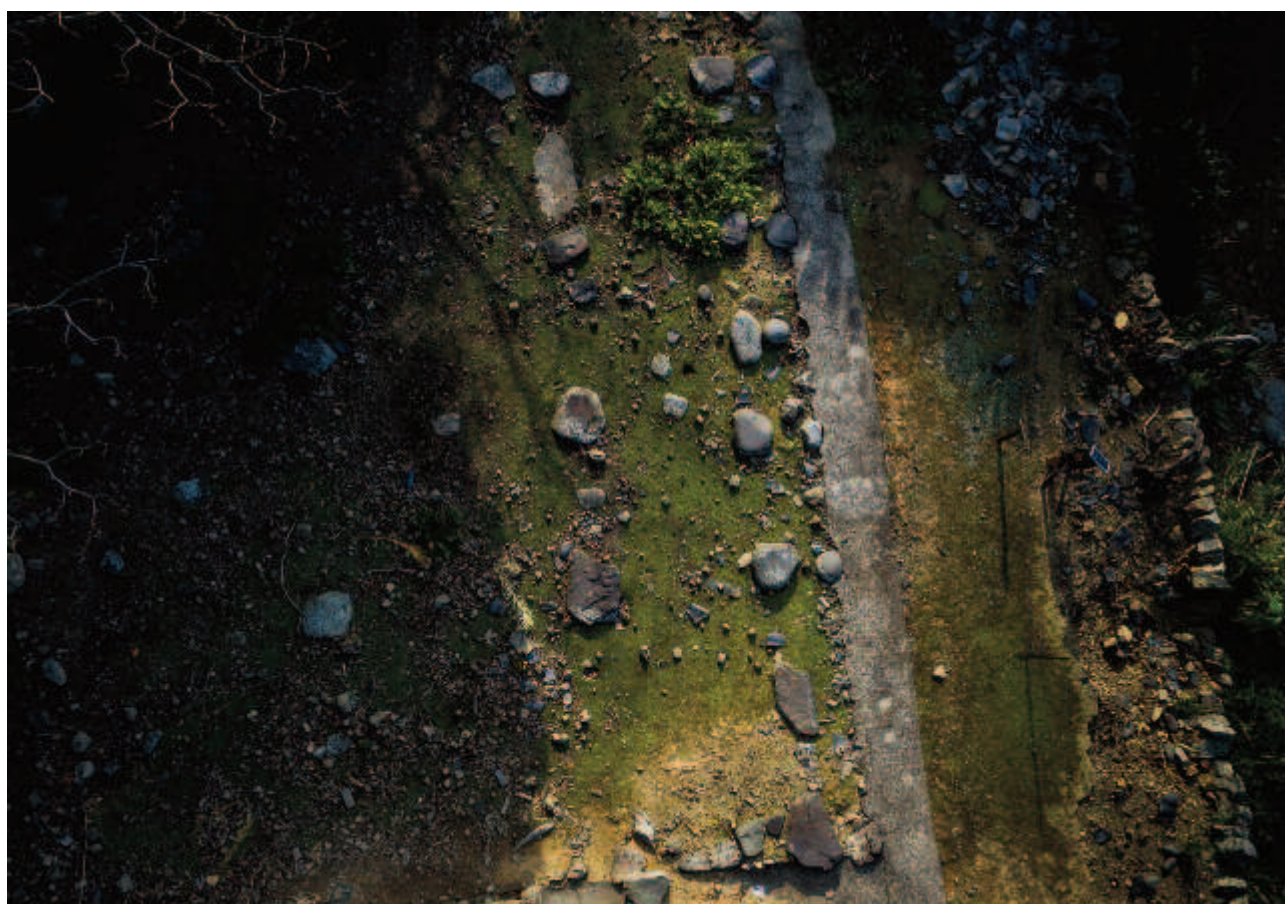


写真 2-086 瀬戸協教会堂の礎石跡

## 008 野崎島の集落跡

## 過去と現在のエリア比較

## 過去



写真 2-087 野崎郷字図(1877年頃、小値賀町所蔵)



## 008 野崎島の集落跡

現在



写真 2-088 現在の野崎島



写真 2-089 頭ヶ島

## 009

### 頭ヶ島の集落

頭ヶ島の集落は、禁教期の潜伏キリシタンが病人の療養地として忌避された島へと移住することにより、密かに信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの集落である。外海地域から中通島の鯛ノ浦地区へと渡った潜伏キリシタンは、仏教徒の開拓指導者の下に無人島であった頭ヶ島へと入植し、閉ざされた環境下で密かに潜伏キリシタンとしての信仰を継続した。信徒発見後は、海に向かって開けた谷間の奥に「仮の聖堂」を建てた後、地元で産出する砂岩を多用した教会堂へと建て替えられた。





## 009 頭ヶ島の集落



図 2-019 要素位置図(009 頭ヶ島の集落)

## 009 頭ヶ島の集落

頭ヶ島は、五島列島北部に所在する周囲約 8 k m の小さな島である（写真 2-089）。外海の潜伏キリシタンがあえて移住先として選んだ疱瘡患者の隔離地であったことを示す墓地遺跡、移住に当たって開拓を指導した仏教徒の墓、信徒発見後に建てられた「仮の聖堂」跡及び教会堂跡から成る。

隣接する五島列島北部（「上五島」と呼ばれる。）の主要な島である中通島とは、激しい潮流が行き交う幅約 150m の海峡によって隔てられている<sup>1</sup>。山がちな地形を成す島の周囲には急峻な岩壁が連続し、島の北辺部にわずかな砂浜海岸が開けるのみである。考古学的な発掘調査によれば、これらの砂浜海岸の周辺で縄文時代の生活の痕跡が確認されている。しかし、険阻な地形及び隣接する島との間の激しい潮流は人間の上陸を阻み、縄文時代以降の時代における人間の生活痕跡は確認されておらず、長らく無人島であったものと考えられる。19 世紀中頃の文献史料<sup>2</sup>には疱瘡患者<sup>3</sup>を隔離したとの記録がみられ、頭ヶ島北辺部の白浜集落の海岸における発掘調査では隔離された人々のものと考えられる墓地が発見された（写真 2-090）<sup>4</sup>。頭ヶ島は、近世においても漁業等で一時的に利用される程度の孤立した無人島であった。

1858 年、頭ヶ島の開拓を目的として、中通島の有川集落から仏教徒の前田儀太夫が移住し、島の北辺海岸の福浦集落に住居を構えた。福浦集落は頭ヶ島の中では比較的風が弱く、水量は少ないながらも川が流れ、築港にも適するなど、島内では最も生活条件の良い場所であった（写真 2-091）。儀太夫は、海岸近くに屋敷を構え、その背後に守り神として神社を祀り、後年には隣接して一族の墓地も造成さ

## 1

現在、頭ヶ島と中通島は 1981 年に建造された鋼鉄製の橋梁によって結ばれている。

## 2

19 世紀後半の頭ヶ島の様子を記録した「万延弍年 公私用留記」（江崎文書 2。新上五島町「鯨賓館ミュージアム」所蔵）には、疱瘡患者の隔離に関する記録が見られる。

## 3

疱瘡は日本の江戸時代における天然痘の呼称である。1980 年に天然痘を撲滅したことが世界保健機構により宣言された。

## 4

長崎県教育委員会編（1996）『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第 1 集。



## 009 頭ヶ島の集落

れた(写真 2-092) <sup>5</sup>。1859 年には、開拓のために儀太夫が募った数家族が、中通島の鯛ノ浦集落から頭ヶ島へと移住した <sup>6</sup>。これらの移住者は、大村藩と五島藩との協定により外海地域から中通島へと移住した <sup>7</sup> 潜伏キリシタンであった <sup>8</sup>。彼らは、仏教徒であった頭ヶ島の開拓指導者と行動をともにすることにより、表向きは仏教徒を装いつつ、先住の仏教徒との軋轢を避けて、さらに安住の地である無人島の頭ヶ島を再移住先に選んだものと考えられる。

頭ヶ島北部の白浜海岸へと移住した潜伏キリシタンは、海岸の背後から山域にかけての斜面に石積みを駆使して耕作地を開拓し、イモ作を主体とする農業を営んだ(写真 2-095)。さらに、時間の経過とともに、南海岸の田尻地区及び西海岸の浜泊地区など島内の他地域にも移住し、集落及び農地を展開していった(写真 2-096)。彼らは、表向きは中通島に所在する仏教寺院に属して仏教徒を装う一方、潜伏キリシタン信仰の指導者を中心として自らの信仰を継続した。

19 世紀後半の日本の開国により宣教師が来日すると、上五島の潜伏キリシタンの指導者たちは密かに大浦天主堂の宣教師と接触し、長らく秘匿し続けてきた自らの信仰を告白するとともに、上五島への宣教師の派遣を要請した。このとき、頭ヶ島の潜伏キリシタンもカトリックへと復帰した。

1867 年には、外海において水方役を務めた人物を実父とし、上五島地域の潜伏キリシタンの頭目であったドミンゴ松次郎が頭ヶ島へと移住した。彼は頭ヶ島の白浜に居を構えて「仮の聖堂」とした後、大浦天主堂から宣教師を迎えた(写真 2-097)。信徒は 1887 年、「仮の聖堂」の近くに木造

5

儀太夫の墓に向かって右に息子の長平の墓、左にカトリックに改宗した孫の正義の墓が並んでいる。儀太夫の墓碑には、息子の長平が儀太夫による頭ヶ島の開拓の歴史を刻んでいる(写真 2-093、写真 2-094)。儀太夫は、仏教徒であったにもかかわらず潜伏キリシタンへの理解を示し、頭ヶ島における潜伏キリシタンの集落形成に重要な契機をもたらした。この墓地は、そのような儀太夫の姿勢のみならず、仏教徒との関係を利用しつつ禁教期に頭ヶ島へと密かに移住した潜伏キリシタンの戦略をも象徴的に表している。

6

前田家の墓石にある(1895)『頭ヶ島由来記』による。

7

五島藩の『公譜別録拾遺』には、「寛政 9 年(1797)藩主盛運、大村の農民 108 人を五島に移し、田地を開墾せしむ」と記されている。

8

明治期の『洗礼台帳』又は『お水帳』などの記録からは、移住者の家系が出津及び大野など外海の集落の出身者により構成されていたことがわかる。

## 009 頭ヶ島の集落

教会堂を建造し、1914年まで使用した。1919年には、松次郎の「仮の聖堂」が存在した場所に10年の歳月をかけて現在の頭ヶ島天主堂を建造した（写真 2-098）。天主堂の建造には信徒自らも加わり、近傍で産出する砂岩を用いた。また、白浜集落の海岸近くには、カトリックに復帰した人々が墓地を形成した（写真 2-099）<sup>9</sup>。

頭ヶ島には、病人の隔離地であったことを示す近世の墓地、仏教徒であったにもかかわらず、潜伏キリシタンの移住に助力した開拓指導者の屋敷跡及びその墓地、潜伏キリシタンが営んだ禁教期以来の農地等の土地利用に関する地割、「仮の聖堂」跡及び解禁後に建造された教会堂、潜伏キリシタンに起源する墓地などの遺跡が良好に残されている。それらは、病人の隔離地へと移住することにより、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの戦略を表している。潜伏キリシタンの移住の対象となった島の険阻な地形をはじめ、彼らの移住の背景及び経過を物語る全ての信仰関連の痕跡を含む範囲を推薦資産の範囲としている。

## 9

これらの墓地の中には、明治初年の『異宗信仰之者調帳』、『異宗徒改宗帳』、『改宗人数血判状』などに記された潜伏キリシタンと同名の墓碑が含まれている。



## 009 頭ヶ島の集落



写真 2-090 白浜集落の発掘写真(1995)

白浜の海岸部に形成された近世墓で、発掘調査により 45 体の人骨が出土した。副葬品から 18 世紀頃のものと考えられ、文献との対比から疱瘡患者として頭ヶ島に隔離された人々の墓であると考えられる。潜伏キリシタンの移住前の頭ヶ島を物語る物証である。



## 009 頭ヶ島の集落



写真 2-091 福浦集落



写真 2-092 前田家の墓



## 009 頭ヶ島の集落

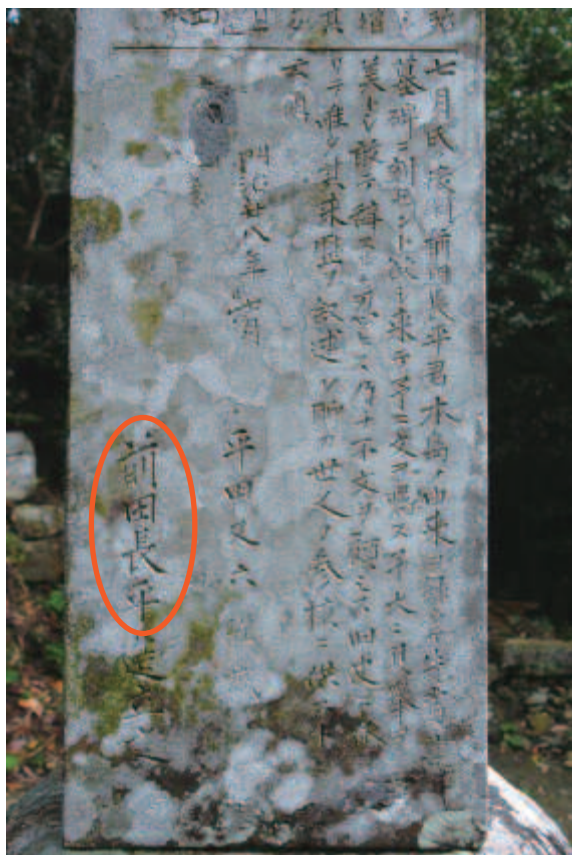


写真 2-093 前田長平の名が刻まれた墓碑

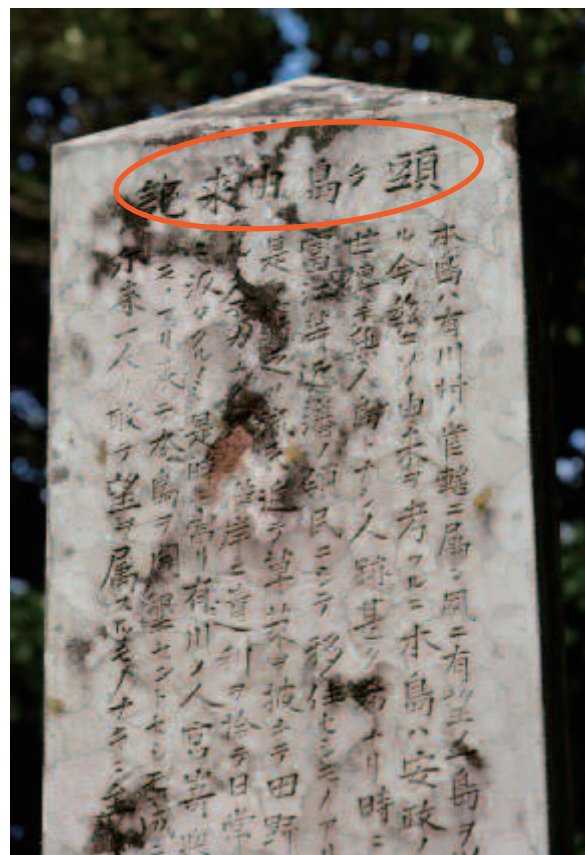


写真 2-094 「頭ヶ島由来記」が刻まれた墓碑



写真 2-095 白浜集落



## 009 頭ヶ島の集落



写真 2-096 田尻集落の石積みを伴う耕作地



写真 2-097 「仮の聖堂」跡を示す石碑



## 009 頭ヶ島の集落



写真 2-098 頭ヶ島天主堂



写真 2-099 カトリックに復帰した人々の墓地

## 009 頭ヶ島の集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去

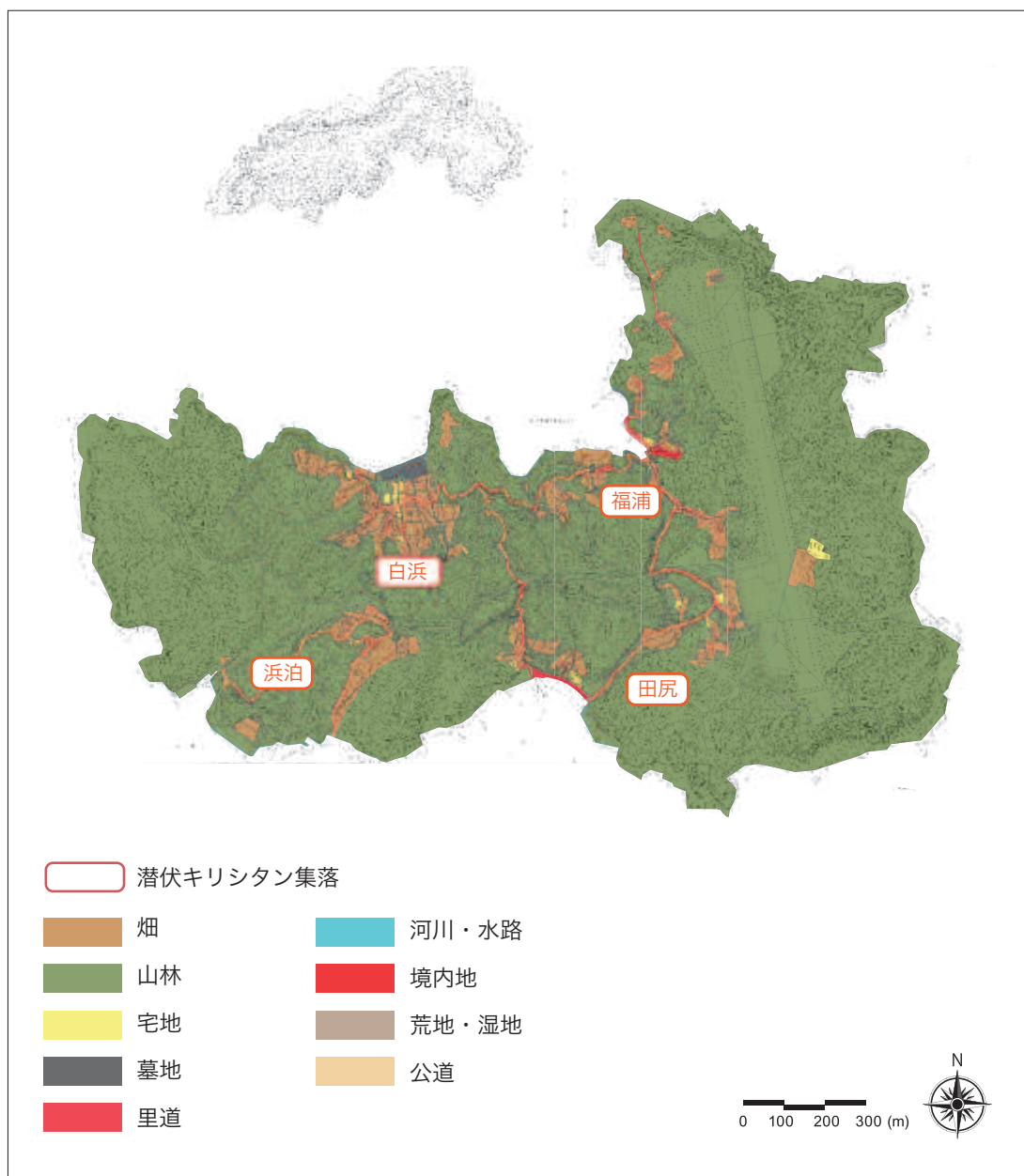


図 2-020 頭ヶ島の土地利用図(明治期)



## 009 頭ヶ島の集落

現在

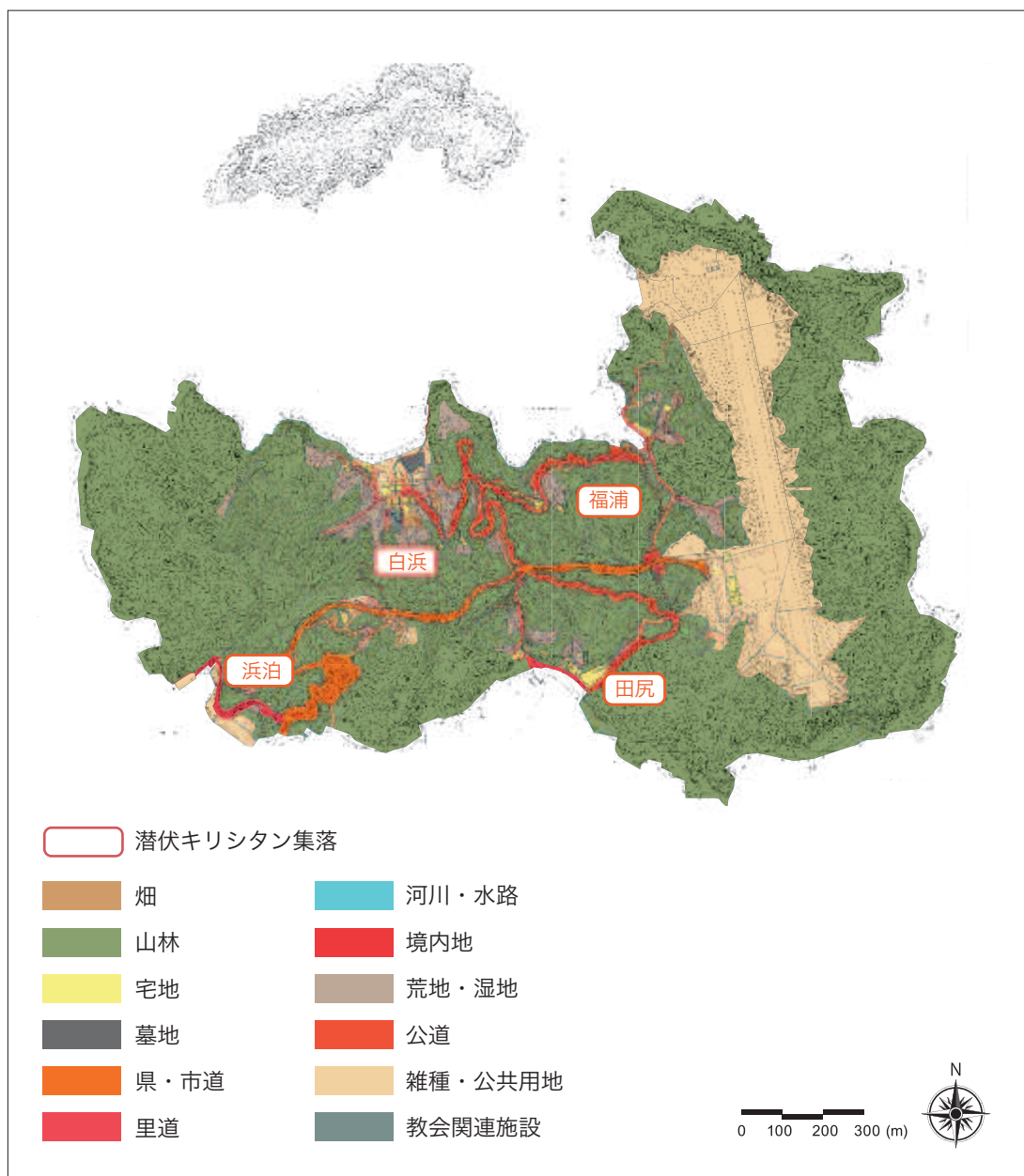


図 2-021 頭ヶ島の土地利用図(現在)



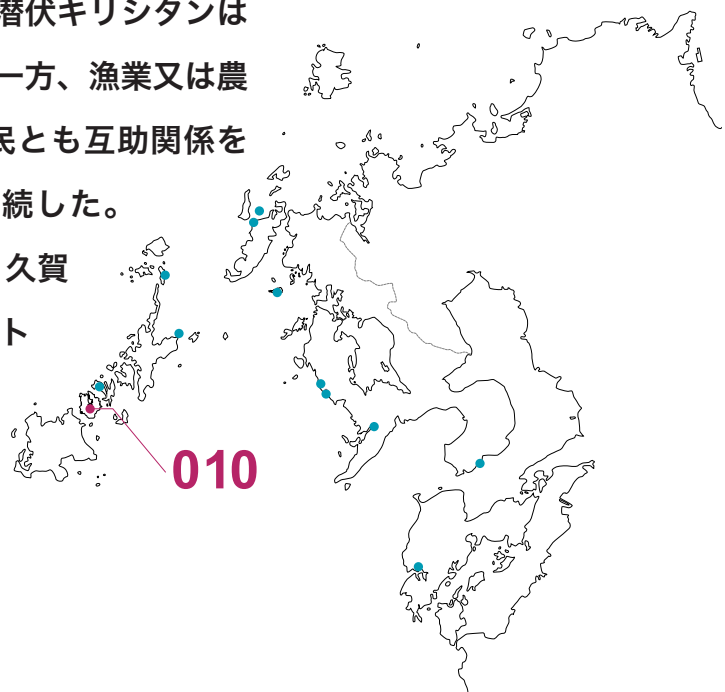
写真 2-100 久賀島

# 010

## 久賀島の集落

久賀島の集落は、潜伏キリシタンが藩の開拓移民政策に従い、未開拓地に移住して自らの信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの集落である。外海地域から久賀島へと移住した潜伏キリシタンは在来の仏教集落から離れた場所に集落を形成する一方、漁業又は農業に伴う作業をともに行うことで仏教集落の住民とも互助関係を築き、密かに潜伏キリシタンとしての信仰を継続した。

1865年の大浦天主堂における「信徒発見」の後、久賀島の潜伏キリシタンは最後の弾圧を乗り越えてカトリックへと復帰し、各集落に新たに教会堂を建造した。





## 010 久賀島の集落

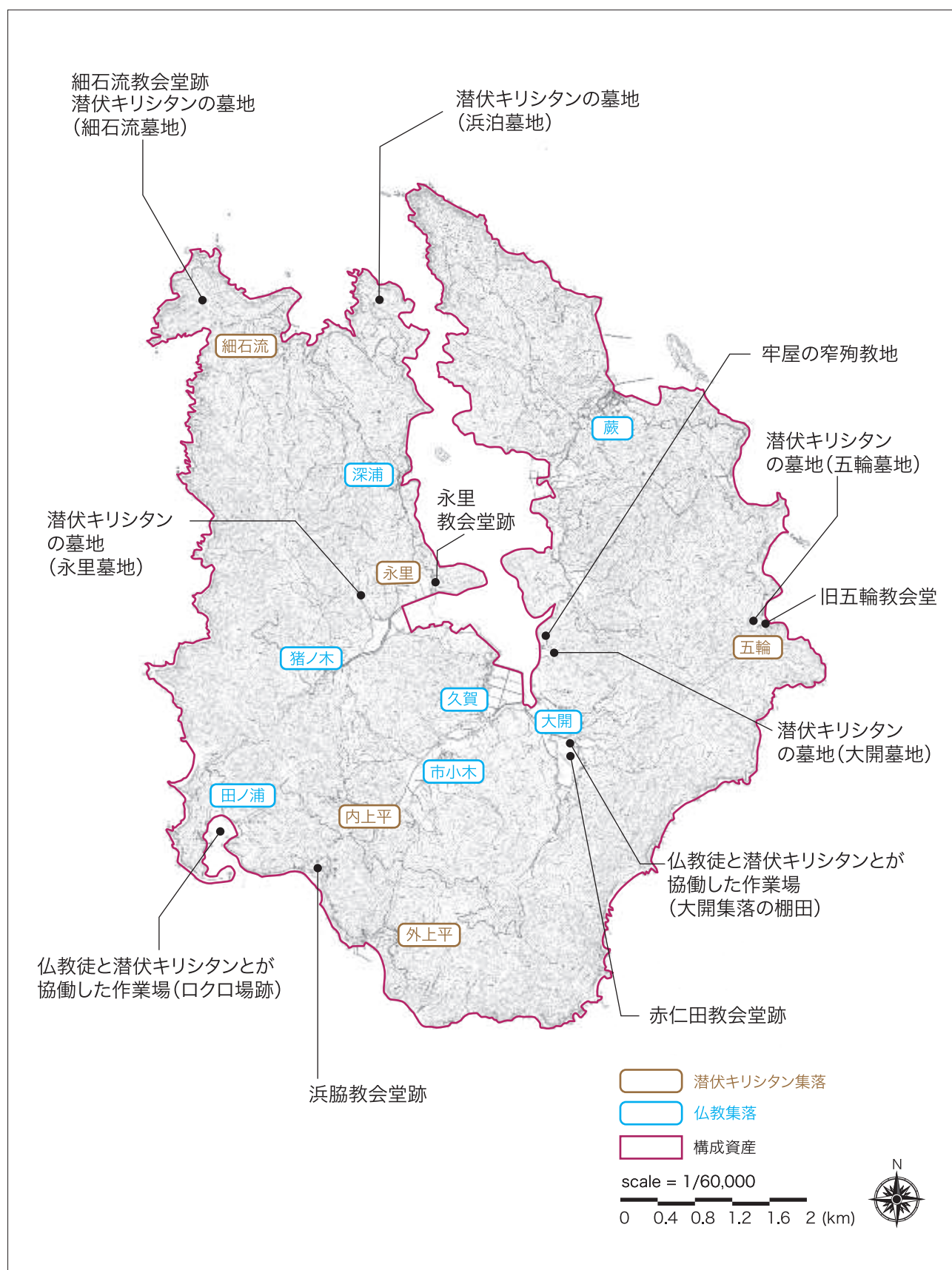


図 2-022 要素位置図(010 久賀島の集落)

## 010 久賀島の集落

久賀島は、五島列島の南部に位置し、北側から中央部に向かって湾入する久賀湾を中心として、その周囲に山がちの地形が馬蹄形に取り囲む周囲約 52km の島である（写真 2-100）<sup>1</sup>。潜伏キリシタンが、開拓移民政策に従って開拓した水田、仏教徒と協働で行う漁網の巻き揚げ作業の場となったロクロ場跡、潜伏キリシタンの墓地、「信徒発見」後の弾圧の場、解禁後に建造された教会堂及びその跡から成る。

五島列島における本格的なキリスト教の宣教は、1566 年にイエズス会宣教師アルメイダにより久賀島の南側に隣接する福江島において始まった<sup>2</sup>。久賀島での宣教を直接的に示す記録はないが、北側に隣接する奈留島には 17 世紀初頭に既にキリシタンがいたことを示す記録があることから<sup>3</sup>、16 世紀後半から 17 世紀初頭にかけて福江島と奈留島に挟まれた久賀島にもキリスト教が伝わった可能性が高い。

しかし、18 世紀頃には、徹底した禁教政策により五島列島におけるキリシタンはいったん姿を消したものと考えられている。五島藩の記録『青方文書』（安永 4 年（1775））のうち、「久賀島人附帳」には当時の久賀島の人口が 456 人であったことが記されているほか、<sup>ひさか おおびらき いのき いちこ</sup>久賀・大開・猪之木・市小<sup>ぎ わらび</sup>木・蕨などの既存の集落名が記されている。これらは、全て農業に適した平地に立地する集落であった。一方、海浜には島の玄関口であった<sup>たのうら</sup>田ノ浦のほか、塩作りを行う窯百姓がいた深浦などの漁村集落があった。これらの集落の住民は全て仏教徒であり、田ノ浦集落に置かれた藩の代官所の管轄下にあった。

大村藩から五島藩への百姓の移住協定が成立した 1797 年以降<sup>4</sup>、五島列島の各地に「居付」と呼ぶ開拓農民の集落

## 1

9 世紀半ばに編纂された日本の正史のひとつである『日本後紀』には、日本から中国大陆へと向かう船の寄港地として久賀島の集落名「田浦」が標記されており、現在の田ノ浦と想定される。16 世紀の中国の書物である『籌海図編』にも「久賀島」の名が見える。

## 2

1566 年 10 月 20 日付け「アルメイダ書簡」（村上直次郎（1969）『イエズス会士日本通信』下、雄松堂、P.82-117.）

## 3

1617 年に五島列島でコウロスが徴収した署名の中に奈留島の夏井に比定される「なつい」が見える。

松田毅一（1967）『近世初期日本関係 南蛮資料の研究』、風間書房、P.1095.

## 4

五島藩の『公譜別録拾遺』には、寛政 9 年（1797）に藩主の五島盛運が大村の農民 108 人を五島に移し、田地の開墾を命じた」と記されている。



## 010 久賀島の集落

が形成されたが<sup>5</sup>、その多くは潜伏キリシタンの集落であった。久賀島では、代官所の容認の下に、既存の仏教集落の縁辺部（永里・内上平・外上平）又は仏教集落から隔絶した場所（五輪・細石流）に潜伏キリシタンの移住集落が形成された。

潜伏キリシタンの移住先は、全て農業に適さない土地であり、自力で開墾するには移住者の数が不足していた。そのため、潜伏キリシタンは仏教徒の水田の隣に新たな水田を開いたり、又は仏教徒が行う農漁業などに伴う各種の作業を協働で行ったりするなど、仏教徒である島民との間に何らかの互助関係を築く必要があった（写真 2-101）<sup>6</sup>。

久賀島の生業については、島民からの聞き取り調査により、仏教集落である田ノ浦集落の住民と潜伏キリシタン集落である上ノ平集落の住民が相互に協力して漁業を行い、特に漁網を巻き上げるロクロ（回転台）場では協働作業を行ったとの伝承<sup>7</sup>が明らかとなっている（写真 2-102、写真 2-103）。

このように、久賀島に移住した潜伏キリシタンは、移住先の仏教集落の住民と互助関係を築く一方で、集落ごとに指導者を中心とする信仰組織を維持し、密かに潜伏キリシタンとしての信仰を継続した。島の中央部に位置する竹山神社は潜伏キリシタンが密かに祈りを捧げた場所とされたほか、永里集落では潜伏キリシタンの指導者が代々継承した中国製の白磁の観音像をマリアに見立て（マリア観音）、密かに祈りを捧げた（写真 2-104）。

19 世紀後半に宣教師が来日すると、久賀島の潜伏キリシタンの指導者は密かに大浦天主堂の宣教師と接触し、信仰

5

『青方文書』の久賀掛の人別改帳によれば、安永 4 年(1775)の移住者は 91 戸 456 人であったが、明治 2 年(1869)の五島藩の戸口調査は 334 戸 1581 人と 3 倍以上に増加している。これは、移住に直接起因する人口増のみならず、その後の生活安定による人口の自然増の両方を示しているものと考えられる。また、同年の異宗徒人員帳には、久賀島における異宗徒(潜伏キリシタン)は、あくまで露見した数として「七十九軒三百七十五人」であったことが報告されている。

6

久賀島の集落における農作物の収穫量を記録した『御領分正御高辻郷村帳』のうち、享和 3 年(1803)の新地改めに関する記事の中には「久賀村二拾二石五斗三升二合、蕨村二石六斗六升九合」とあり、久賀村・蕨村の双方において移住者が新たに水田を開墾したことが確認できる。さらに『青方文書』の「新田畑并荒帰高辻目録」のうち、文化 3 年(1806)の米の収穫量に関する記事の中には「大開分九斗九升七合二勺、同居付十石九斗九升一合」とあり、大開集落では従来の農民による収穫のみならず居付(移住者)による収穫もあったこと、さらには潜伏キリシタンが仏教徒の水田に隣接して新たに水田を開いたことなどがわかる。

なお、天保 8 年(1837)の新地改めの記録には、久賀島における新地田畑の記事が見られないことから、この頃には移住が減少したものと推測できる。

7

長崎県五島市(2011)『五島市久賀島の文化的景観保存計画』。

## 010 久賀島の集落

を告白するとともに教理の指導を受けた。宣教師との接触を契機として、久賀島の潜伏キリシタンは公然と自らの信仰を表明するようになった。しかし、1868 年に五島列島の一円で弾圧が行われ（五島崩れ）、その一環として狭い牢屋に多数の信徒が監禁され<sup>8</sup>、多くの死者が出た（牢屋の窄事件）。久賀島は解禁の直前に潜伏キリシタンへ弾圧が加えられた最後の弾圧の現場となった。

解禁後、牢屋の窄事件が起こった場所には殉教者を弔うための教会堂と記念碑が建てられ、カトリックへと復帰した久賀島のキリスト教信者にとって今なお禁教期の記憶の場所となっている（写真 2-105）。1873 年のキリスト教解禁の後、カトリックへと復帰した浜脇、永里、細石流、赤仁田<sup>あかにた</sup>の各集落に次々と教会堂が建造された<sup>9</sup>。また、永里、細石流、大開、浜泊、五輪の各集落には、禁教期から続く潜伏キリシタンの墓地も残されている（写真 2-110）。

これらの一連の教会堂、教会堂の跡、墓地は、藩の政策に乗じて久賀島の未開拓地へと移住することにより、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織を維持しようとした潜伏キリシタンの伝統とその終焉を表している。

久賀島では、潜伏キリシタンが移住によって形成した集落及び彼らが互助関係を結んだ仏教徒の集落が島内の全域にわたって分布し、両者の互助関係を示す生業の土地利用形態は現在も良好に継承されている。さらに、19 世紀後半の新たな信仰の局面を迎えて建造された教会堂及びその跡、禁教期以来の潜伏キリシタンの墓地も全島に点在しているため、島内全域を推薦資産の範囲としている。

8

面積が 6 坪 (20m<sup>2</sup> 弱) の狭隘な空間に、約 200 人ものキリシタンが詰め込まれたとされる。

F. マルナス、久野桂一郎訳 (1985)『日本キリスト教復活史』、みすず書房。

9

1881 年に浜脇集落、1918 年に永里集落、1921 年に細石流集落、1926 年に赤仁田集落に、それぞれ教会堂が建造された。また、最初に建造された浜脇集落の教会堂は、1931 年に現在の教会堂へと建て替えられる際に、久賀島東岸の五輪集落へと移築され現存している（写真 2-106、写真 2-107、写真 2-108、写真 2-109）。



## 010 久賀島の集落



写真 2-101 大開集落



写真 2-102 ロクロ場跡

写真 2-103 ロクロ場の参考図（「五島に於ける鯨捕沿革図説」、長崎歴史文化博物館所蔵）  
漁網を巻き取るロクロ（回転台）を回す様子が描かれている。



## 010 久賀島の集落



※上記のものはすべて同じスケールで表示されているわけではありません。

写真 2-104 永里集落のマリア観音(堂崎天主堂キリシタン資料館所蔵)



写真 2-105 牢屋の窄殉教地



## 010 久賀島の集落



写真 2-106 旧五輪教会堂



写真 2-107 五輪集落



## 010 久賀島の集落



写真 2-108 浜脇教会堂(1931年以前)



写真 2-109 現在の浜脇教会堂



## 010 久賀島の集落



写真 2-110 五輪墓地

## 010 久賀島の集落

## 過去と現在のエリア比較

## 過去



写真 2-111 久賀島古図(1822年、「伊能図・九州全図」、松浦史料館所蔵)



## 010 久賀島の集落

現在



写真 2-112 現在の久賀島の集落



写真 2-113 江上集落

# 011

## 奈留島の江上集落 (江上天主堂とその周辺)

江上天主堂とその周辺を含む奈留島の江上集落は、潜伏キリシタンが禁教下の移住という過酷な条件の中で移住先の社会・宗教とも共生しつつ自らの信仰を継続した潜伏キリシタンの集落である。江上地区に移住した潜伏キリシタンは、既存の集落から離れた海に近い谷間に居を構え、僅かな農地及び漁業で生計を営みつつ、自らの信仰を組織的に継続した。キリスト教の解禁後、彼らはカトリックへと復帰し、湧水に恵まれ防風に優れた場所に、湿度及び風通しにも配慮した在来技術を用いて木造の教会堂を建造した。それは、江上地区に固有の迫地形及び在来の建築意匠・工法に基づく風土的特徴とカトリック教会としての西洋的特徴との融合がもたらした教会堂の代表例である。





## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)



図 2-023 要素位置図(011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺))

## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)

奈留島は、五島列島の中部に位置する島で、複雑な海岸線と急斜面の山腹から成る。江上集落は、奈留島の北西部の西海岸にわずかに開けた迫地形に立地し、江上天主堂は迫地形の南斜面に平坦地を造成して建造された（写真 2-113）。

付近の海域は 8 世紀から 16 世紀にかけて日本と大陸とを結ぶ貿易船の通過経路上にあたり、奈留島もその寄港地となっていた可能性がある。13 世紀頃からは地方豪族の奈留氏が島を支配したが、15 世紀初頭には奈留島を含む五島列島の全域が他の豪族の宇久氏の勢力下に入り、奈留氏は奈留島の代官<sup>1</sup>となった。

17 世紀初頭には奈留島にキリシタンがいたことを示す記録が残っていることから<sup>2</sup>、16 世紀後半～17 世紀初頭の時期にキリスト教が伝わった可能性が高い。17 世紀初頭に江戸幕府が開かれ五島藩が発足し、禁教令が出されて五島藩内の潜伏キリシタンにも弾圧が加えられ、18 世紀頃には五島列島から潜伏キリシタンが姿を消したものと考えられている<sup>3</sup>。

外海地域から奈留島への潜伏キリシタンの移住は、18 世紀末から 19 世紀にかけて段階的に行われた。まず、無人島であった葛島<sup>かずらしま</sup>に入り、その後に奈留島内の永這<sup>ながぼえ</sup>・椿原<sup>つばきはら</sup>・南越<sup>なんこし</sup>などの地へと移住した<sup>4</sup>。江上地区には東松浦及び西彼杵から 4 戸が入植したとされている<sup>5</sup>。これらの移住先の多くは既存の仏教徒の集落から隔絶した小規模な沖積地に位置し、移住者は平地を稲作地として開墾するとともに、斜面地を僅かに開削して家屋を構え、集落を形成した。

潜伏キリシタンの移住者は「居付」と呼ばれ、19 世紀に行われた土地改の記録から彼らが行った新田開発の実態がう

1

五島藩の支所の役人のこと。

2

1617 年に五島列島でコウロスが徴収した署名の中に、キリシタンの居住地として奈留島の「夏井」に比定される「なつ井」の地名が見える。

松田毅一(1967)『近世初期日本関係 南蛮資料の研究』、風間書房、P.1095。

3

寛政 4 年(1792)に幕府の西国巡検使が五島において作成した『上使御下向御答書』には、「右切支丹の者は段々に相果て、以て只今は一人も存命不仕候」と記されている。

4

奈留町郷土誌編纂委員会編(2004)『奈留町郷土誌』、奈留町、P.343。

5

奈留町編(1973)『郷土奈留』(改定版)。



## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)

かがえる<sup>6</sup>。

潜伏キリシタンは、移住先の迫地形の地勢にも適応しつつ、信仰の指導者を中心として自らの信仰を密にかつ組織的に継続した。禁教期の江上集落には、移住の系譜から複数の信仰組織が存在したことが知られる。

キリスト教の解禁後、江上集落はカトリックへと復帰し、かつての信仰の指導者の屋敷を「仮の聖堂」として信仰の場とした。集落単位でカトリックに復帰した場合、禁教期に複数存在した信仰組織がひとつに集約されることが多かったが、江上集落の場合には集落内に複数の「仮の聖堂」が構えられたことから、禁教期の信仰組織の単位がそのまま維持されたことがわかる。また、それぞれの信仰組織の単位で墓地もつくられた。個々の墓石に刻まれた文字からは、信仰を秘匿する必要がなくなった潜伏キリシタンが、どのように信仰形態を変容させていったのかを端的にうかがい知ることができる。

江上天主堂は、潜伏キリシタンがキビナゴ漁によって蓄えた資金を元手として、谷間に開けたわずかな平地を利用して1918年に建造された（写真2-114、写真2-115、写真2-116）。付近の湧水による湿気を意識して床を高く上げ、軒裏には装飾を兼ねた通風口を設けるなど、集落内の民家とも共通する独特の意匠及び構造が特徴である（写真2-117、写真2-118、写真2-119）。江上天主堂は、19世紀以降の長崎地方において建造された数々の木造教会堂の中でも最も整った意匠・構造を持つとされている<sup>7</sup>。

江上天主堂は、潜伏キリシタンが移住先として選んだ江上に固有の迫地形及び禁教期にまで遡る在来の建築意匠・

6

『五島編年史』に収録する「文化三年 新地改」の記録には、移住先の新たな開拓地からの収穫量が「居付分」として示されており、五島に移住した潜伏キリシタンによる新田開拓の実態を裏付けている。

文化三年(1806) 新地改

奈留村奈留村分

10石1升4合6勺

同 居付

8石8升3合6勺

船廻村船廻村分

14石1斗1升合1勺

同 居付

1石3斗4升7合6勺

大串村大串村分

1石7斗9升7合4勺

同 居付

1斗5升7合

夏井村

5石1斗7升2号5勺

7

川上秀人(1985)「長崎県を中心とした教会堂建築の発展過程に関する研究」(九州大学提出学位請求論文)

## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)

工法の双方に基づく風土的特徴と、信徒たちがカトリック教会堂として希求した西洋的特徴とが融合している<sup>8</sup>という点において、長崎と天草地方に建造された教会堂の中でも、潜伏キリシタンの信仰の継続に関する伝統が変容・終焉したことを最も端的に表す教会堂である。

江上天主堂とその周辺を含む奈留島の江上集落は、五島列島において潜伏キリシタンが移住先として選択した地勢の典型例である迫地形、及びそれに適応して建造された江上天主堂を含む範囲を資産範囲としている。

## 8

江上天主堂をはじめ各地の教会堂建造に携わった人物として、鉄川与助(1879-1976)が挙げられる。鉄川は長崎県上五島出身の棟梁、建築家であり、ド・ロ神父に教会建築の指導を受け、後に独自に数多くの教会堂の建築に携わった。



## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)



写真 2-114 谷間に開けたわずかな平地に建つ江上天主堂



## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)



写真 2-115 江上天主堂

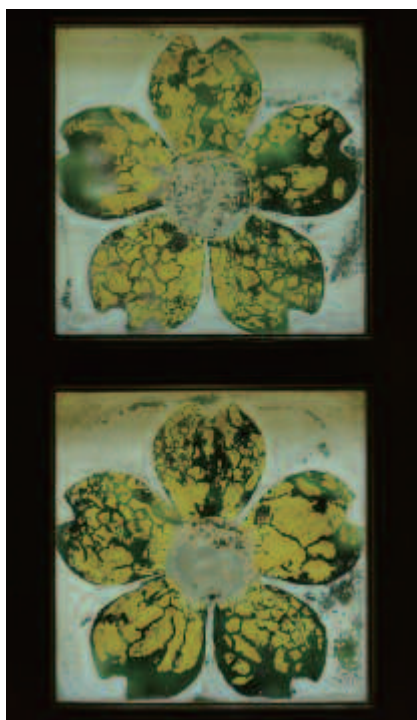


写真 2-116 江上天主堂の内観  
3 廊式平面で、アーケード・擬似トリフォリウム・壁付アーチを伴い、天井はリブ・ヴォールトである。



## 011 奈留島の江上集落(江上天主堂とその周辺)



写真 2-117 江上天主堂裏の水路



写真 2-118 床を高く上げた様子

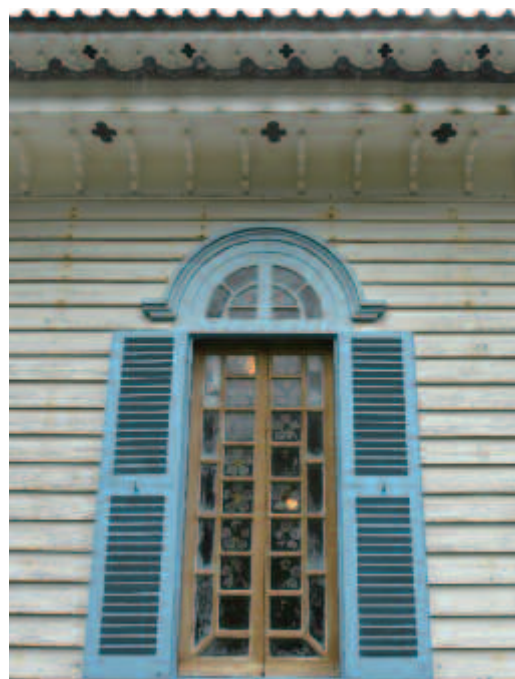


写真 2-119 軒裏の装飾を兼ねた通風口





写真 2-120 大浦天主堂

## 012 大浦天主堂

大浦天主堂は、潜伏キリシタンが新たな信仰の局面を迎える契機となった「信徒発見」の場所である。それは自由に信仰を表明することのできなかつた潜伏キリシタンが既存の社会・宗教と共生しつつ自らの信仰を継続することにより育んだ伝統が変容し、終焉を迎える契機となった場所である。大浦天主堂は、19 世紀後半の日本の開国により来日した宣教師が 1864 年に建造した教会堂であり、16 世紀に長崎において殉教した日本二十六聖人に捧げられた。献堂の直後、長崎近郊の潜伏キリシタンが密かに訪れ、自分たちの信仰を宣教師に告白した「信徒発見」の舞台である。その後続く大浦天主堂の宣教師と各地の潜伏キリシタン集落の指導者との接触は、それぞれの集落において新たな信仰の局面をもたらした。





## 012 大浦天主堂

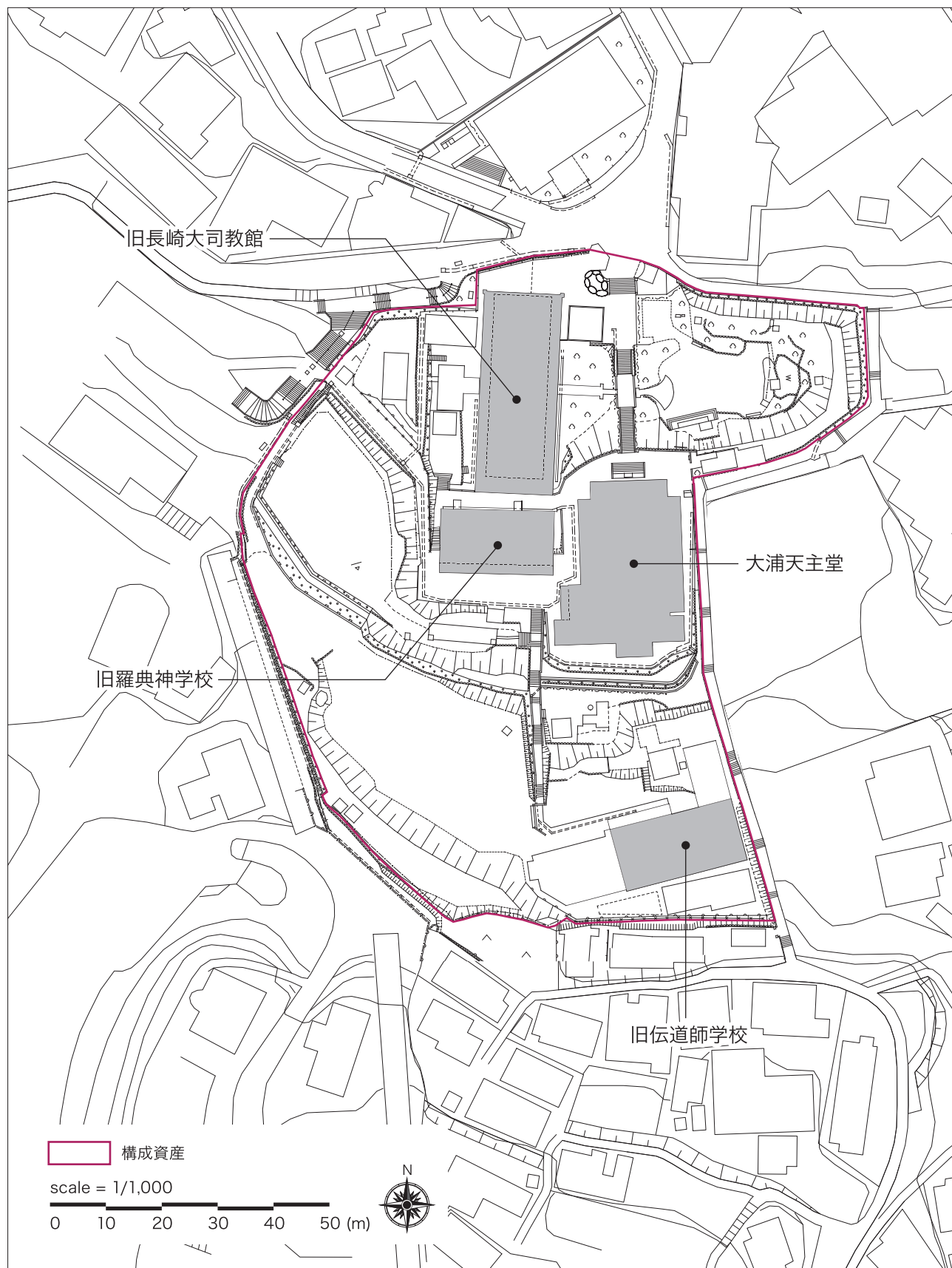


図 2-024 要素位置図(012 大浦天主堂)

## 012 大浦天主堂

大浦天主堂は、長崎地方の南部、長崎港に面した高台に所在し、歴代神父が居住した司祭館、当初居留地の外国人のために建てられた大浦天主堂、解禁後の布教のために建てられた神学校及び伝道師学校の一群の建築物から成る（写真 2-120）。この地はかつての大浦地区の外国人居留地内であり、開国に伴って 1862 年にパリ外国宣教会のフューレ神父が長崎における宣教拠点と定めた場所である（写真 2-121）。

境内地には、まず 1863 年に神父が居住する司教館が建造され<sup>1</sup>、続いて 1864 年に大浦天主堂が建造された（写真 2-122）。3 つの塔のあるゴシック風の外観で、正面上部には仏教寺院の扁額にみられるような「天主堂」の文字が記され、内部は 3 廊式の構造であった（写真 2-123、写真 2-124）。天主堂は、16 世紀に長崎で殉教し 1862 年に列聖された 26 人のキリシタンを顕彰するために、彼らの殉教地である西坂の方角に向けて建造された（写真 2-125）。

1865 年の落成式の直後に、長崎・浦上村の潜伏キリシタン十数人が大浦天主堂を訪れ、その中の一人がプティジャン神父に「ここにおります私どもは、あなた様と同じ心の者です」、「サンタ・マリアの御像はどこ？」と尋ねて自分たちの信仰を告白した。いわゆる「信徒発見」と呼ばれるこの歴史的な出来事は直ちに長崎と天草地方の潜伏キリシタンへと伝わり、各地の潜伏キリシタンの指導者は相次いで大浦天主堂を来訪し、宣教師との接触を開始した（写真 2-126、写真 2-127）<sup>2</sup>。

宣教師との接触は、潜伏キリシタン集落に新たな信仰の

## 1

当初の司教館は、老朽化により、1915 年に現在の建物に建て替えられた（旧長崎大司教館）。

## 2

1866～1867 年の間に潜伏キリシタンの指導者が相次いで大浦天主堂を訪れ、宣教師と接触した。

F. マルナス、久野桂一郎訳（1985）『日本キリスト教復活史』、みすず書房。



## 012 大浦天主堂

局面をもたらし、様々な反応を引き起こした。宣教師の指導下に入ることを選んだ人々は、公然と信仰を表明するようになった。そのため、1867年に江戸幕府は浦上村のキリシタンを捕え、禁教政策を引き継いだ明治政府も3,000人以上ものキリシタンを国内の20藩に配流するとともに、信仰を捨てるよう拷問した（浦上四番崩れ）。五島においても信仰を表明した潜伏キリシタンを捕らえたほか（五島崩れ）、久賀島では約200人の潜伏キリシタンをわずか6坪の牢屋に投獄し、多くの死者を出した（牢屋の窄事件）。これらの弾圧に対して、大浦天主堂の宣教師は在日領事に迫害の停止を働きかけた。1873年、諸外国による抗議を背景として明治政府はついに禁教を解いたため、日本におけるキリスト教徒への弾圧政策は終わった。

キリスト教の解禁によって、潜伏キリシタンは、①宣教師の指導下に入ってカトリックへと復帰する者、②宣教師の指導下に入らずに引き続き禁教期の信仰形態を続ける者（かくれキリシタン）、③神道・仏教へと改宗する者へとそれぞれ分化した。

キリスト教の解禁後、大浦天主堂の宣教師は、潜伏キリシタンが16世紀以来の信仰とともに継承してきたラテン語及びポルトガル語由来の「キリシタン用語」をはじめ、潜伏キリシタンが伝写してきた教理書などを重視し、カトリックへと復帰した信者への手厚い指導を行った（写真 2-128）

3。また、新たにキリスト教布教のための彩色版画なども製作された（写真 2-129）4。その一方で、潜伏キリシタンが独自に信仰を継承してきた伝統に対しては、カトリックとし

## 3

大浦天主堂の境内では、宣教師の指導方針の典拠となった書籍の「フティジャン版」が1883年まで何種類も印刷された。横浜などにおいては、潜伏キリシタンを起源としない一般日本人への布教は漢籍を基本とする中国式の方法が採られた。

## 4

「ド・ロ版大木版画」と通称され、1875年から1877年の間に10種類の画像が製作された。（大浦天主堂旧羅典神学校キリシタン資料室所蔵）

## 012 大浦天主堂

での修正が図られていった。

大浦天主堂では、解禁後に増加する信徒に対応するために増築が行われ<sup>5</sup>、1879年に現在の規模及び形姿が完成した（図 2-025）。境内には日本人の司祭及び伝道師の育成の場として、それぞれ羅典神学校及び伝道師学校が建造された（写真 2-130、写真 2-131）。羅典神学校は1875年に創設され、1879年に初の卒業生を送り出した。卒業生は日本人司祭として長崎と天草地方のかつての潜伏キリシタン集落へと派遣された。伝道師学校は、宣教師が各地の集落を広く巡回することが困難であったため、宣教師に代わって教理を伝える「伝道師」の養成学校として1883年頃に創設されたものである。1892年までの間に多くの日本人伝道師を輩出し、教理指導のために長崎と天草地方の集落などへ派遣された。羅典神学校及び伝道師学校は、新たな信仰の局面を迎えた潜伏キリシタンのカトリックへの復帰を促す原動力となった。

パリ外国宣教会による日本布教は、解禁後の1876年、南北の代牧区<sup>6</sup>に分かれ、初め南緯代牧区の司教座は大阪とされたが、1880年に長崎へと移され、大浦天主堂が司教座聖堂と定められた<sup>7</sup>。1891年には、日本のカトリックは東京・函館・大阪・長崎の4つの司教区となり、東京を大司教区として他はこれに属することとなった。1904年の信徒数をみると、東京が9,178人、大阪が4,000人、函館が4,235人であったのに対し、長崎は41,458人と他を圧倒しており<sup>8</sup>、禁教期における潜伏キリシタンの中心的な舞台となった長崎が実質的には主要な位置を占めていたことがわかる。

5

1875年及び1879年に増改築が行われ、5廊式の構造へと拡張・変更された。

6

代牧区は、カトリック教会の教区となる前段階の呼び名のひとつである。知牧区から代牧区となり、その後に昇格して教区となる。

7

1962年、大浦天主堂は浦上教会に司教座聖堂の座を譲った。

8

長崎市編(2012)『大浦天主堂及び教会施設調査報告書』、P.31.



## 012 大浦天主堂

1862 年以來、長くフランス人宣教師が主導して来た大浦天主堂であったが、1927 年に初めて日本人司教が誕生し、邦人の司教座教会となった（写真 2-132）。

大浦天主堂は潜伏キリシタンが新たな信仰の局面を迎え、既存の社会・宗教と共生しつつ自らの信仰を継続することにより育んだ伝統が変容・終焉する契機となった場所である。天主堂のみならず、宣教師が居住した司教館（旧長崎大司教館）、潜伏キリシタンのカトリックへの復帰を促す原動力となった場としての旧羅典神学校、旧伝道師学校などを含め、境内の全域を推薦資産の範囲としている。

## 012 大浦天主堂



写真 2-121 大浦天主堂を遠くに望む居留地古写真(1864年、長崎大学附属図書館所蔵)



写真 2-122 旧長崎大司教館



## 012 大浦天主堂



写真 2-123 創建当時の大浦天主堂

## 012 大浦天主堂

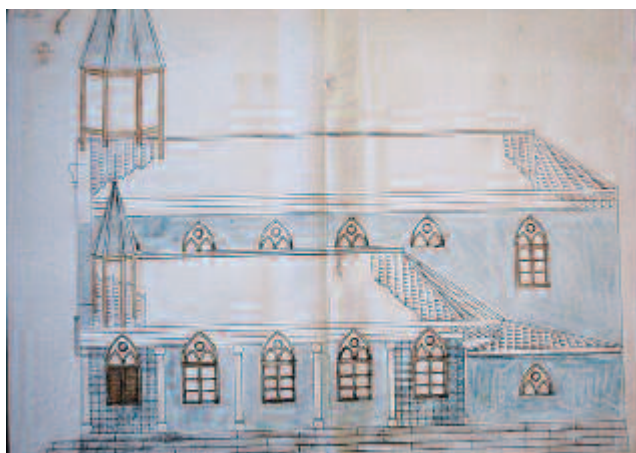
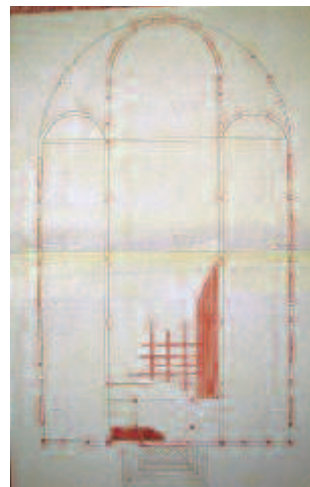


写真 2-124 創建当時の大浦天主堂設計図(パリ外国宣教会所蔵)



写真 2-125 日本二十六聖人殉教地の方角を向く大浦天主堂



## 012 大浦天主堂

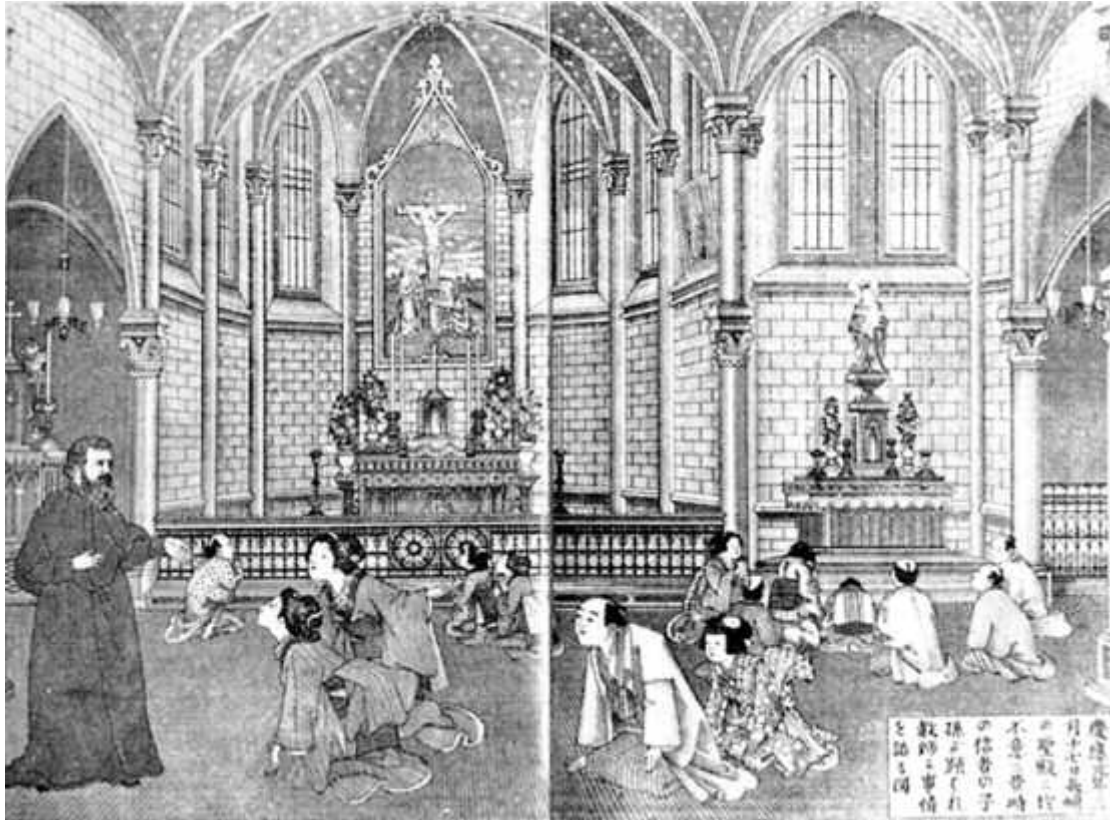


写真 2-126 「信徒発見」を描いた挿画（ヴィリヨン著「日本聖人鮮血遺書」）



写真 2-127 現在の大浦天主堂内観



## 012 大浦天主堂

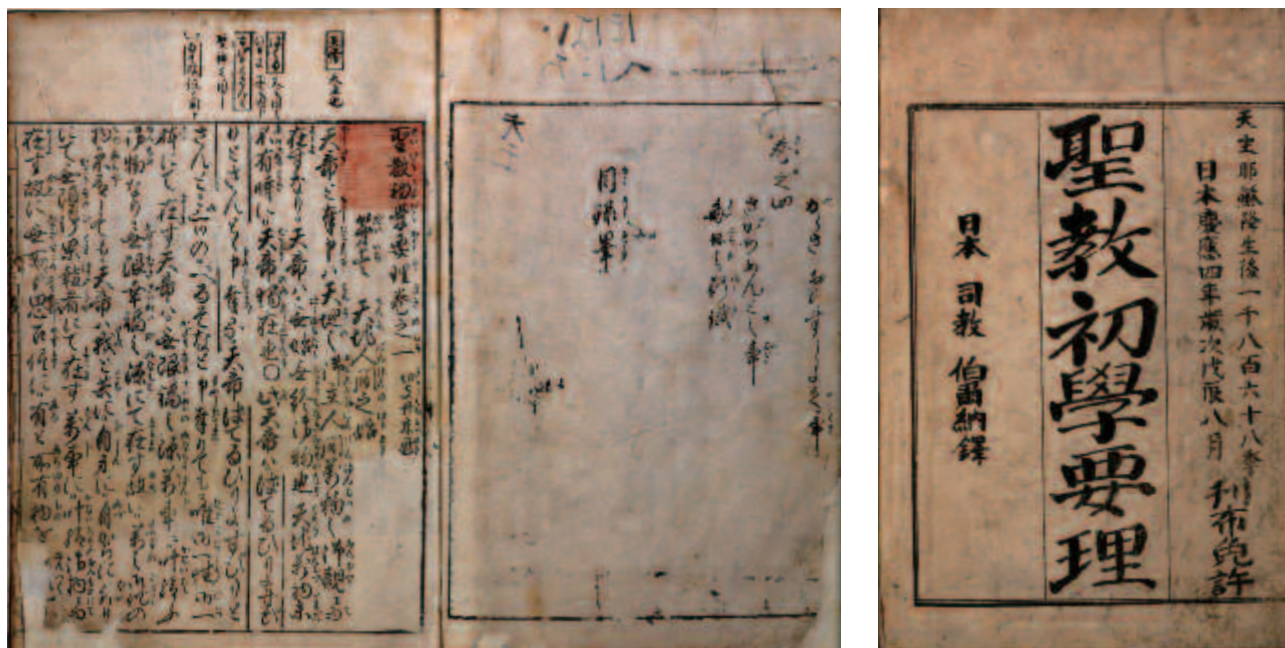


写真 2-128 プティジャン版(長崎歴史文化博物館所蔵)

かつて潜伏キリシタンであった長崎と天草地方の信徒のために刊行された教理書などの書籍で、禁教期に引き継がれていたポルトガル語由来のキリシタンの言葉が、あえて用いられている。



写真 2-129 ド・ロ版大木版画(お告げのマリア修道会所蔵)



## 012 大浦天主堂

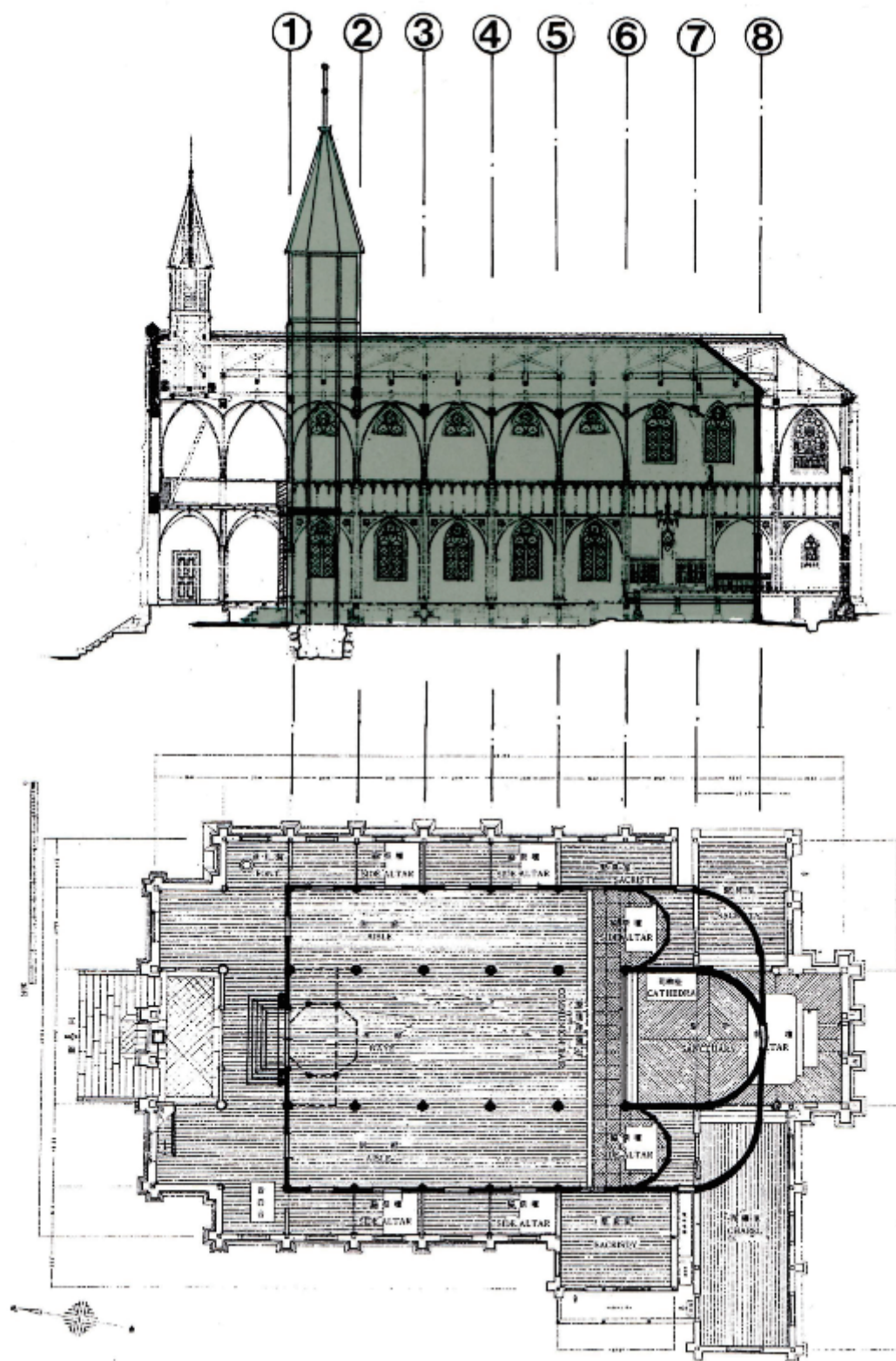


図 2-025 大浦天主堂の創建時と現状の比較 (林一馬氏作成)

## 012 大浦天主堂



写真 2-130 旧羅典神学校



写真 2-131 旧伝道師学校(1960年代以前)



## 012 大浦天主堂



写真 2-132 大浦天主堂におけるミサ(信徒発見150周年記念ミサ)

## 2.b 歴史と発展

### (I) 信仰の継続に関わる伝統の開始・形成

#### キリスト教の伝播・普及

15 世紀半ばに始まるポルトガルの世界進出は、15 世紀末にアジアへと到達した。アジアに進出したポルトガル国王の要請を受けて、イエズス会宣教師による宣教活動も活発となり、その活動はインドを拠点として展開した。1549 年、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは中国船に便乗して日本の鹿児島へと上陸し、日本にキリスト教を伝えた。その後、ザビエルに続いて宣教師が次々と来日してキリスト教を広めた。

宣教師は、キリスト教を広めるに当たって、まず領主（大名）に教えを説き、仏教からキリスト教へと改宗させたのち、彼らを介してその家臣及び領民もキリスト教へ改宗させるという方法をとった。領主が改宗しない場合には、礼物を持参し貿易を斡旋するなどの方法を通じて、大名の家臣及び領民に対してキリスト教を布教する許可を得て宣教活動を行った。このような方法を採用することにより、彼らは短期間のうちに多くの改宗者を得ることができた。九州地方の領主（大名）の多くは、ポルトガル船との貿易（南蛮貿易）の利益を求めて

宣教師による布教を受け入れた。領主（大名）の中にはキリスト教に改宗し、次第にキリスト教の信仰に深く帰依する者も現れた。彼らは「キリシタン大名」と呼ばれ、キリスト教を保護し宣教師による布教活動を助けた。九州地方の主なキリシタン大名には、大村純忠、有馬晴信（後に「原城」を築いた）、大友宗麟らが知られている。1588 年に天草地方の領主となった小西行長も、キリシタン大名のひとりであった。

宣教師たちは、九州・山口地方に続いて畿内地方を中心に宣教活動を行い、日本のキリシタンが自らの力で信仰を続けていくための組織をつくった。それらは、キリスト教宣教の初期において、不足する宣教師に代わって布教を主導し、キリシタンの信仰を強化・維持する助けとなった。それらはキリシタン大名の領地であった有馬・大村・天草の各地に設立された。これらの信仰組織が宣教地域の集落に定着したことが、のちに宣教師及び日本人司祭が不在となる中で潜伏キリシタンが信仰を継続する重要な基盤となった。



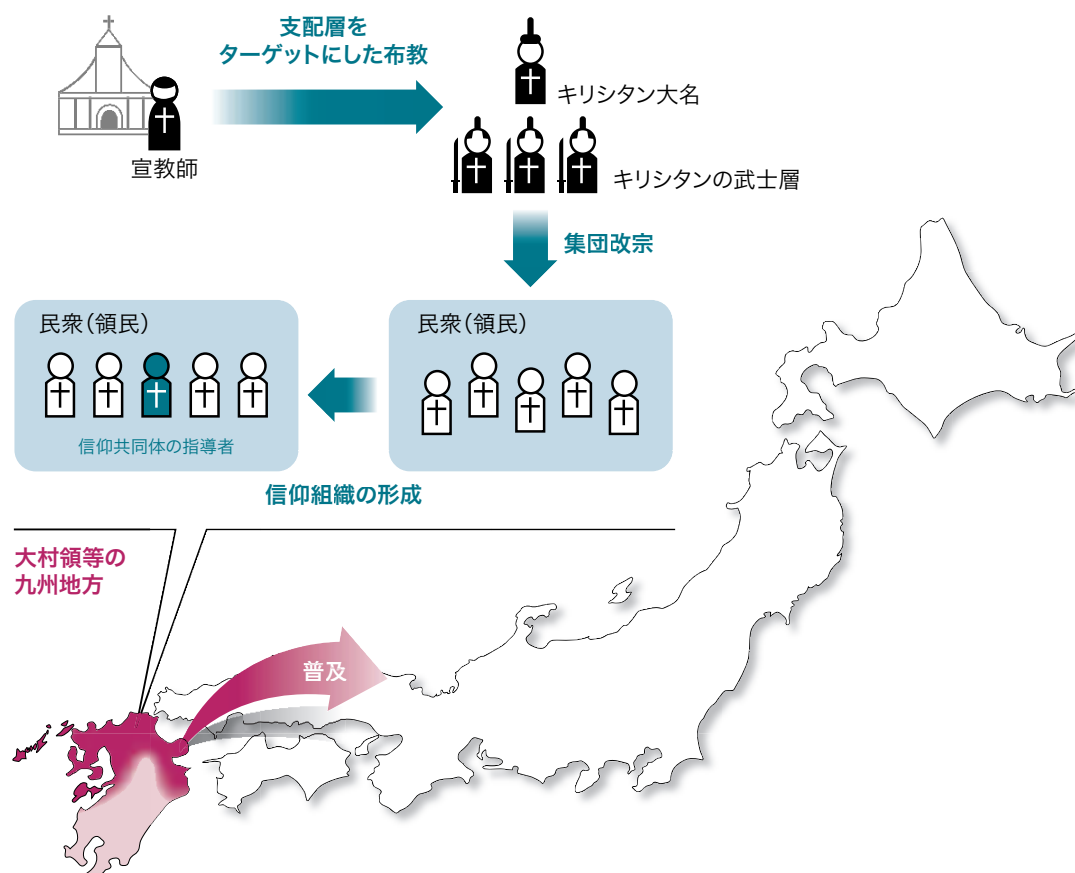


図 2-026 伝播・普及期におけるキリスト教宣教の概念図



写真 2-133 「世界図」(オルテリウス、1570年、長崎歴史文化博物館所蔵)



写真 2-134 フランシスコ・ザビエル像  
(神戸市立博物館所蔵)



写真 2-135 南蛮図屏風(16世紀後期、神戸市立博物館所蔵)



写真 2-136 有馬晴信像(南島原市有馬キリシタン記念館  
所蔵)



九州・山口地方及び畿内地方を中心として宣教が進む一方、戦乱の中で日本を統一した豊臣秀吉は 1587 年に博多(福岡)で「伴天連追放令」を発令し、イエズス会に寄進されていた長崎を没収して自らの直轄地とした。秀吉は布教を禁止する方針を出したものの、他方で貿易による利潤の獲得を重視して南蛮貿易を推進したため、「伴天連追放令」は徹底されなかった。しかし 1596 年に起こったサン・フェリペ号事件 **1** を契機として、宣教師がスペインの領土拡大の一端を担っているとの報告を受けた秀吉は激怒し、1597 年に畿内地方に居住していたフランシスコ会の 6 名の修道士を含む計 26 名のキリシタンを捕らえて同地で処刑した(日本二十六聖人の殉教)。

秀吉の死後、当初から来日していたイエズス会の修道士(宣教師)に加え、1602 年にはドミニコ会及びアウグスチノ会の修道士(宣教師)が来日し、日本における宣教活動に対する修道会間の活動が過熱していた。秀吉の死後に政権を握り、1603 年に江戸幕府を開いた徳川家康は、当初はポルトガル・スペインとの貿易を継続するため、宣教師によるキリスト教の宣教活動及び日本人によるキリスト

教への信仰を黙認した。そのため、キリシタンは増加し、信者数は最盛期(17 世紀初頭)で 37 万人以上に達したとされる **2**。

# 1

マニラからメキシコを目指していたスペイン船「サン・フェリペ号」が台風のため日本の土佐国に漂着し、その乗組員の発言・讒言により豊臣秀吉はスペインが日本を征服しようとしているとの疑念を抱き、キリシタンを迫害するようになった。

# 2

五野井隆史(1990)『日本キリスト教史』、吉川弘文館、P.206。



写真 2-137 豊臣秀吉定書(伴天連追放令の書状、1589 年、松浦史料博物館所蔵)



写真 2-138 日本二十六聖人像

## 禁教の本格化から潜伏へ

1614年、江戸幕府は政権の完全掌握を賭けた大坂の豊臣氏との戦いを前に、幕府内部の権力争いを排除し、徳川氏中心の封建体制を確立するために、全国的なキリスト教禁教令を発した。宣教師はマカオ又はマニラへと追放され、教会堂は破壊された。国内のキリシタンのうち大名は全てキリスト教への信仰を捨てて再び仏教へと改宗し、処刑の対象となった大名の配下の武士たちも、キリシタンであることが幕府へと密告されると相次いで棄教した。しかし、宣教師の中には国内に潜伏する者をはじめ、追放後に再度日本へと潜入し、日本のキリシタンの指導を行う者などが後を絶たなかった。

そのため、江戸幕府は宣教師が潜入していることを幕府へ密告した者に褒賞を与え、さらに宣教師が捕らえられた場合には、彼らを匿った者も含めて拷問の末に処刑した。1622年には長崎において拘禁されていた司祭及び修道士、彼らを匿った日本人キリシタンなど合計55名が火刑に処され、斬首された（元和の大殉教）。

一般の民衆は密告の対象とされていなかったものの、幕府は密告の対象を徐々に拡大するとともに探索を強化し、キリシタンとしての信仰が露見した者に対しては

激しい拷問を加え、棄教を強制した。

かつての宣教拠点であり、民衆のほとんどがキリシタンであった長崎市中では、一部の者を除いて信仰の規制はなかったが、1626年に長崎奉行に着任した水野守信、続いて1629年に着任した竹中采女正<sup>うねめのしょう</sup>が住民に対して残忍な拷問を伴う禁教を徹底し、住民のほとんどが棄教又は殉教を余儀なくされた。

このように、禁教令の発令以降の日本では、江戸幕府の強制の下に、かつてキリスト教を積極的に取り入れた全国の大名及びその配下にあった武士などの支配者層が最初に棄教し、続いて一般民衆が棄教していった。その一方で、かつての宣教拠点であった長崎の周辺部及びかつてキリシタンが隆盛した日本各地の集落では、民衆レベルで密かにキリシタン由来の信仰を継続するための信仰組織が維持された。



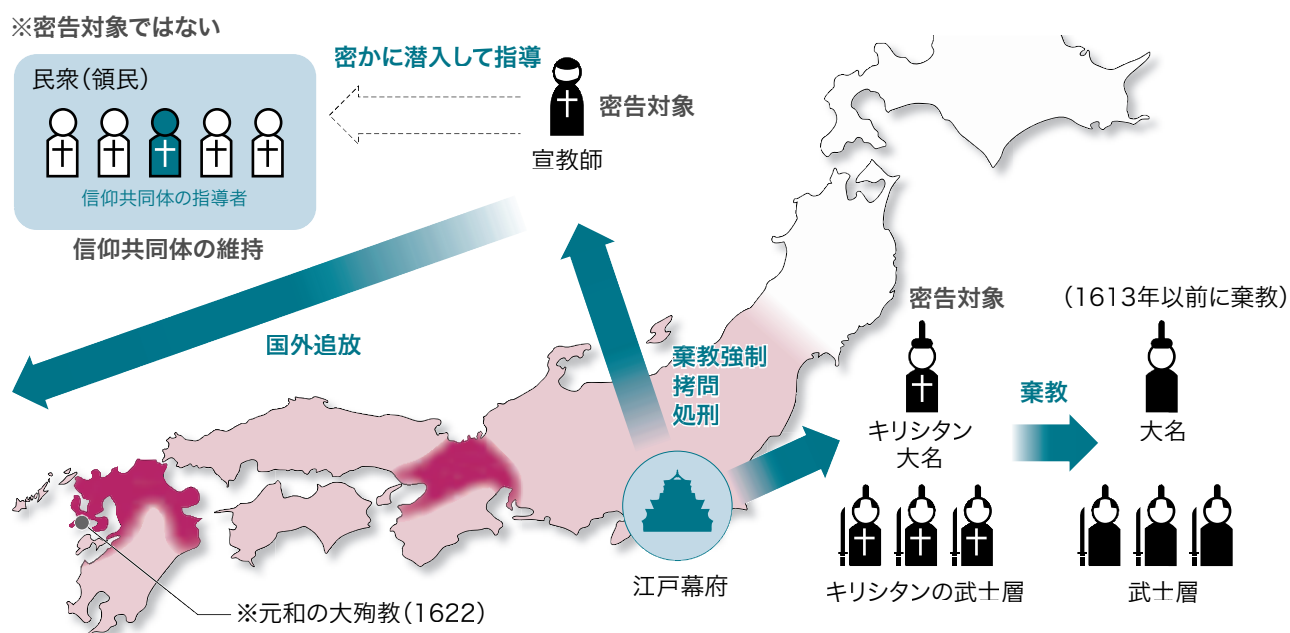


図 2-027 禁教令（1614）～島原・天草一揆（1637）における信仰維持の推定図



写真 2-139 元和8年(1622)、長崎大殉教図(ジェズ教会所蔵)

## 海禁体制の確立及び信仰組織の崩壊、長崎と天草地方での継続

各地で厳しい禁教政策が実施される中、領主の苛政と飢饉を契機として、1637 年には有馬領及び天草地方の民衆による「島原・天草一揆」が勃発した。有馬領は、かつてキリスト教が栄えた島原地方の南部に位置していた。領主であったキリシタン大名の有馬晴信が贈収賄事件で流罪となった後に死罪となり、その嫡子の有馬直純が日向に転封となった際に、多くのキリシタン武士が有馬領内に土着し、領民たちとともにキリシタンとしての信仰を継続していた。有馬氏の旧家臣のみならず、かつて天草地方を領有していたキリシタン大名の小西行長の旧家臣にも率いられて、密かにキリスト教への信仰を継続していた島原・天草地方の約 2 万数千人の百姓が蜂起し<sup>3</sup>、当時既に廃城となっていた原城跡（構成資産 001）に立て籠もった。4 ヶ月に及ぶ攻防の末、幕府軍により一揆勢はほぼ全員が殺され、鎮圧された。この一揆の後、原城跡が再び一揆又は反乱などの拠点となることを恐れた幕府は徹底的に城跡を破壊した。

キリシタンによる「島原・天草一揆」を通じてキリスト教を大きな脅威と見做した江戸幕府は、1639 年に宣教師が潜入して密入国を図る可能性のあるポルトガル

船の来航を禁止し、1 世紀近く続いたポルトガル人との貿易関係を絶った（いわゆる「鎖国」と呼ばれる海禁政策）。これにより、ヨーロッパとの交易は宣教師による宣教活動の懸念がないプロテスタントのオランダにのみ限定され、その窓口も平戸から長崎に造られた人工の島「出島」へと移された。

禁教政策の下に潜伏キリシタンの探索は一段と厳しくなり、江戸幕府は聖画像及びメダイなどの信心具を踏ませ（絵踏）、五人組制<sup>4</sup>を導入して密告対象を一般民衆にまで広げて潜伏キリシタンの摘発に努めた。また、全ての民衆に仏教への帰依を強制し、寺院の檀家として「宗門改帳」に宗旨及び所属寺院を記載した上で、彼らを寺院の管理下に置いた（寺請制）。その結果、1617 年から 1644 年までの間に 75 人の宣教師が処刑され、1,000 人以上もの潜伏キリシタンが殉教した。

1642 年及び 1643 年には、2 手に分かれて日本に密入国しようとした宣教師 10 人が逮捕されるなど、江戸幕府による宣教師

**3**

中村質（1988）『近世長崎貿易史の研究』、吉川弘文館、P.165.

**4**

五人組制とは、都市及び農漁村の社会において、連帯責任・相互監察・相互扶助を目的として設置された末端の組織。



の排除は着実に進み、1644年にはついに最後の宣教師小西マンショが殉教した。これによって日本の宣教師は不在となり、それ以降、潜伏キリシタンは約2世紀半にわたり自らの信仰を密かに継続することを余儀なくされた。

このような厳しい探索及び弾圧の中にあっても、17世紀半ばまでは潜伏することを選択した潜伏キリシタンの民衆が日本各地に残っていた。このことは、17世紀後半に相次いで「(大村)郡崩れ<sup>5</sup>」、「豊後崩れ」、「濃尾崩れ」と呼ばれる大規模な潜伏キリシタンの摘発事件が発生したことからもうかがえる。多くの地域では潜伏キリシタンが途絶えることとなったが、一部

の地域を除き18世紀に入っても集落ごとに潜伏キリシタンの組織が継続して残った地域があった。それが、かつての宣教拠点及びその周辺地域として、長期間にわたり宣教師の指導を受けたことにより、各集落の組織的な信仰の基盤が整っていた長崎と天草地方であった<sup>6</sup>。

5

明暦3年(1657)、大村藩の郡地方(現在の長崎県大村市)を中心に608名の潜伏キリシタンが検挙された事件。

6

長崎と天草地方のほかに、筑後地方(現在の福岡県の一部)の今村、摂津地方(現在の大阪府の一部及び兵庫県の一部)の茨木では、それぞれ集落ごとに小規模な信仰組織が維持されていた。この点については、第3章の比較研究の節を参照されたい。

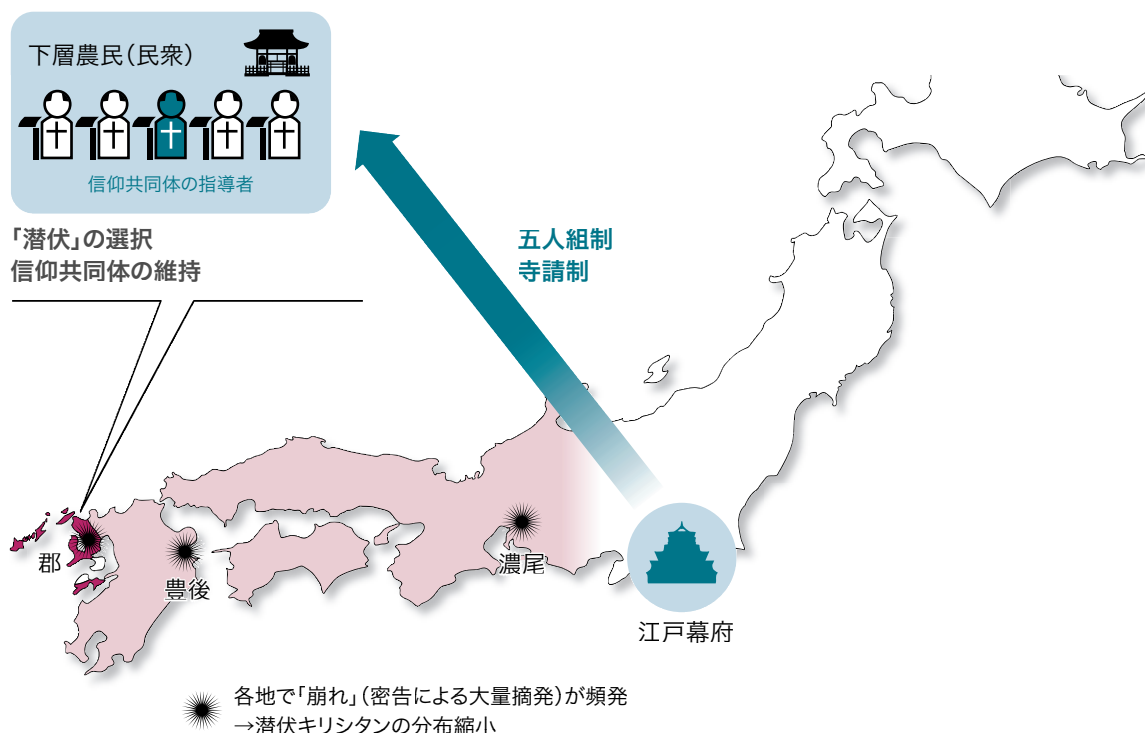


図 2-028 「島原・天草一揆」後(1638)～17世紀末頃までの禁教の概念図



写真 2-140 「長崎図」ペラン(1763年、九州国立博物館所蔵)



写真 2-141 踏絵(東京国立博物館所蔵)

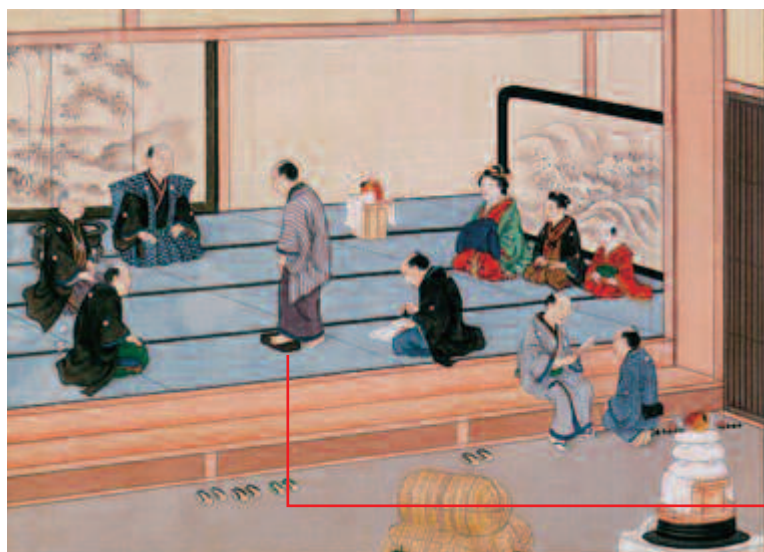


写真 2-142 「絵踏」の様子(川原慶賀、ライデン国立民族学博物館所蔵)





## (II) 信仰の継続に関わる伝統の多様な展開

18 世紀の長崎と天草地方の潜伏キリシタンは、16 世紀以来、集落ごとに根付いた信仰組織を起源とする「組」などを維持しつつ、自らの信仰を継続できるよう信仰組織内の仕組みを変容させていった。それは、宣教師に代わって洗礼を授ける「水方」をはじめ、教会暦を司る「帳方」などの役職を担当する「指導者」を中心として、キリスト教由来の儀礼・行事等を執り行う仕組みへの変容であった。

潜伏キリシタンは、これらの儀礼・行事、信仰に伴う日々の祈りなどを行う際に、一般の仏教徒に潜伏キリシタンであることが発覚しないよう秘匿することを基本とする信仰形態を育んだ。具体的には、信仰が露見しないように、在来の神道・仏教においても聖地とされた山岳・島を崇敬し（平戸の聖地と集落（構成資産 002・003））、一見ありふれた身の回りの日常品を信心具として崇敬したほか（天草の崎津集落（構成資産 004））、マリア像などキリスト教由来の信心具を隠し持ち（外海の出津集落（構成資産 005））、在来の神社に密かにキリシタンを祀って崇敬する（外海の大野集落（構成資産 006））などの手法を採った。18 世紀になると、以前のような大規

模な摘発事件（崩れ）が見られなくなったが、それは長崎と天草地方の潜伏キリシタンが上記の信仰形態の下に信仰の秘匿に成功し、それ以前と比較して安定的に信仰を継続する方法を確立したことを示している。

また、約 100 年にも及ぶ長い安定期を経て、1790 年に起こった「浦上一番崩れ」の際には、江戸幕府も大村崩れ又は郡崩れのような深刻な事態が発生するのを回避するために、浦上の民衆の中に潜伏キリシタンが存在することを公式に認めず、1805 年の「天草崩れ」の際にも、崎津の民衆の信仰を「異宗」とであるとして潜伏キリシタンの信仰ではないとの判断を示した。このことから、18 世紀には潜伏キリシタンが自らの信仰を表明しても、そのこと自体が社会秩序を乱さない限り処罰しないという半ば「黙認」の姿勢が採られたことがわかる。このように、潜伏キリシタンの密かな信仰活動と為政者側の黙認の姿勢との微妙な均衡が保たれることにより、潜伏キリシタンは既存の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰を継続するための伝統を形成していった。

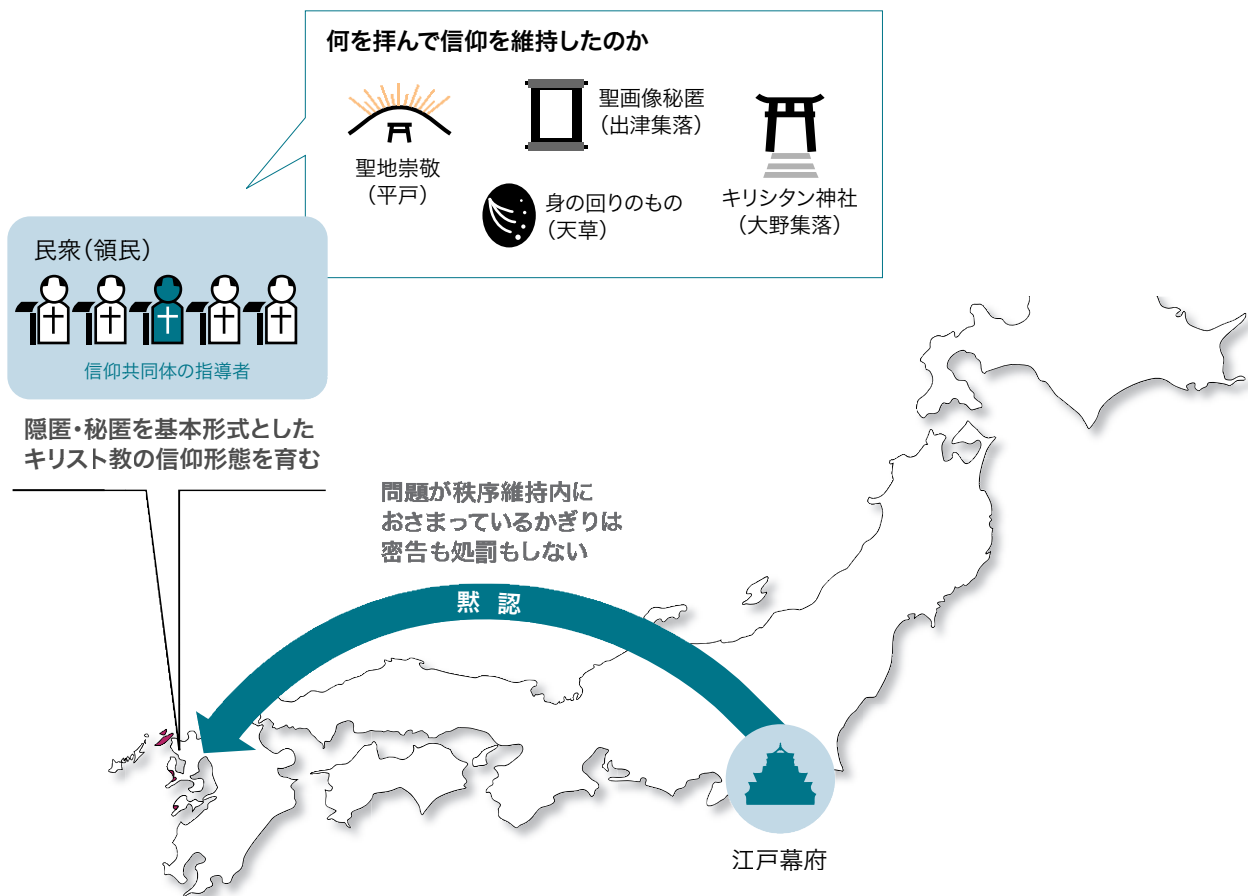


図 2-029 18 世紀における密かな信仰の継承の概念図

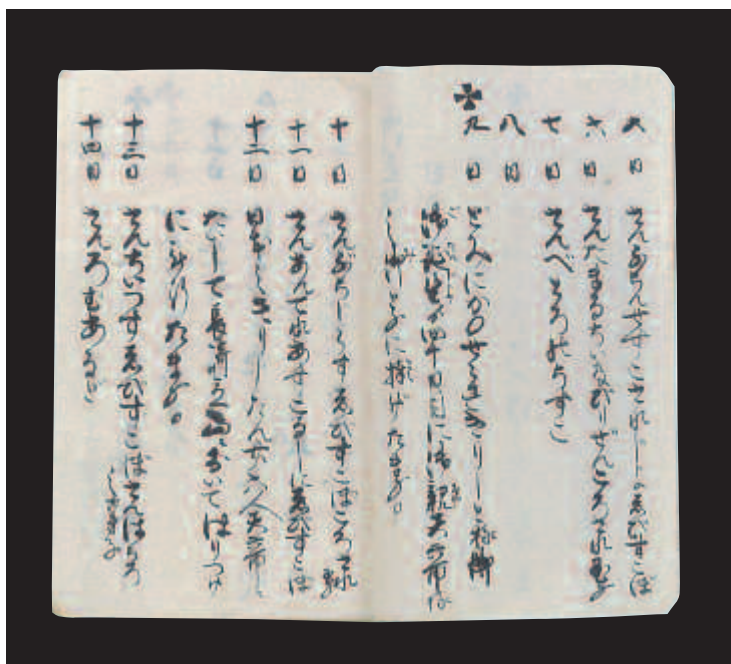


写真 2-143 日綴り帳 (外海地方) (長崎歴史文化博物館所蔵)



写真 2-144 無原罪のプラケット (長崎市ド・ロ神父記念館所蔵) (構成資産005に関連するもの)





写真 2-145 春日集落と安満岳(構成資産002)



写真 2-146 中江ノ島(構成資産003)



写真 2-147 和鏡(構成資産004に関連するもの)



写真 2-148 辻神社(構成資産006の要素)



### (III) 移住による信仰組織の戦略的維持

周囲の社会・宗教とも共生しつつ自らの信仰を継続しようとする伝統が形成されたことにより、潜伏キリシタンは 18 世紀を通じて比較的安定した生活を営んでいた。

しかし、18 世紀の終わり頃になると、西彼杵半島西岸の大村藩領の外海地域では、斜面地という地形上の制約から農作物の収量が高くなかったにもかかわらず、産児制限をしない潜伏キリシタン特有の事情により集落の人口が増加し、大きな社会問題となった。そのような状況下にあって、1797 年には人口が少ないことから耕作民を求めている五島藩が対岸の大村藩と協定を結び、外海地域からの開拓移民を募る政策を開始した。これに基づき外海地域から多くの民衆が五島列島へと渡ることとなったが、その中には潜伏キリシタンが多く含まれていた。彼らは移住を繰り返しつつ、五島列島の各地に潜伏キリシタンの集落を形成していった。

外海地域に出自を持つ潜伏キリシタンは五島列島へと移住するに当たり、移住先の社会・宗教との折り合いのつけ方を考慮して移住地の選択を行った。藩の牧場の跡地利用のため再開発の必要があった島

(黒島の集落(構成資産 007))へと入植したのをはじめ、神道の聖地であった島(野崎島の集落跡(構成資産 008))、病人の療養地であった島(頭ヶ島の集落(構成資産 009))、藩の政策に従って未開拓地(久賀島の集落(構成資産 010))にも移住した。これらの島々へと移住した潜伏キリシタンは、移住先の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰組織の下に信仰を継続しようとする伝統を育んだ。

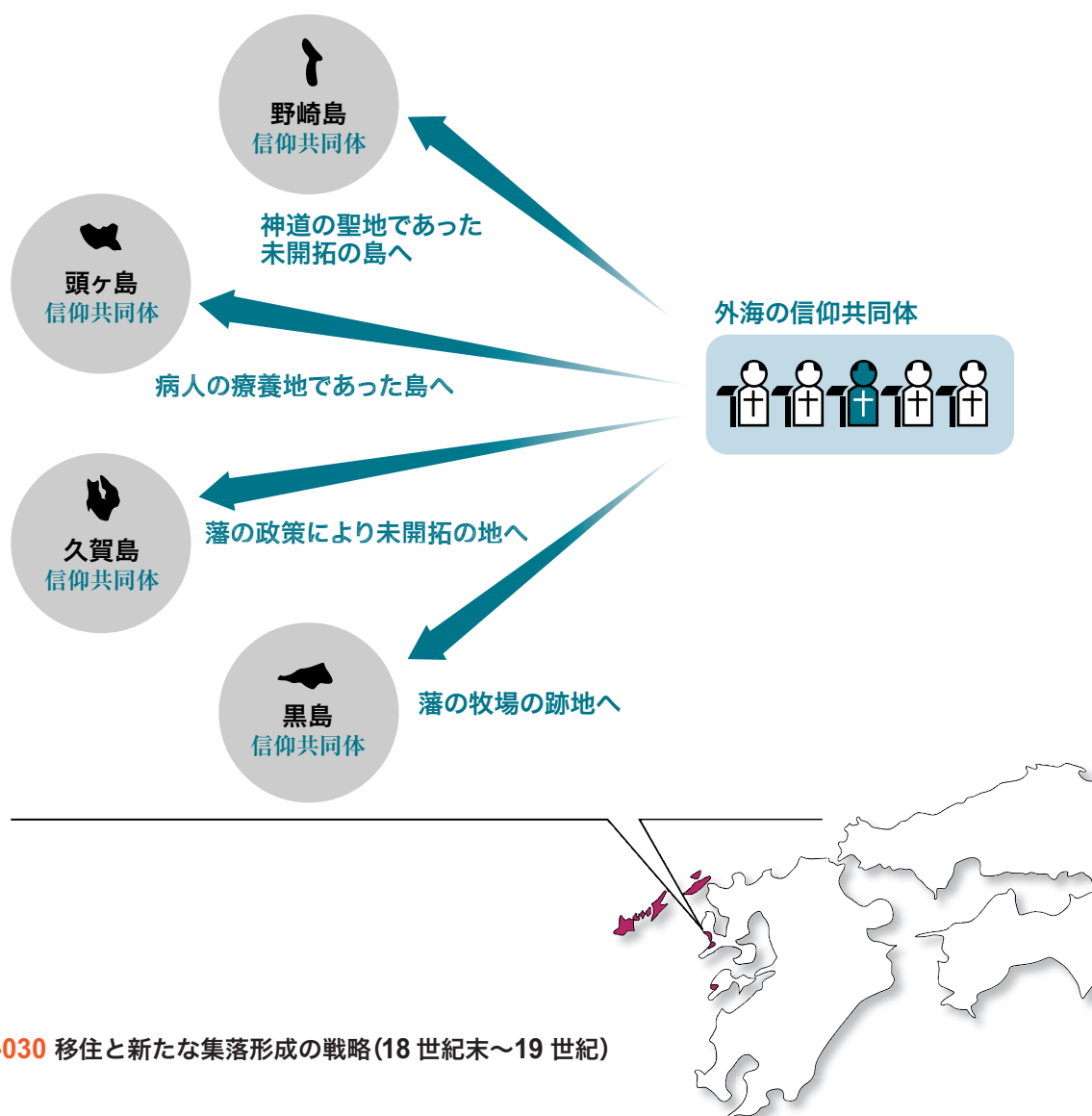


写真 2-149 根谷集落(構成資産007の要素)



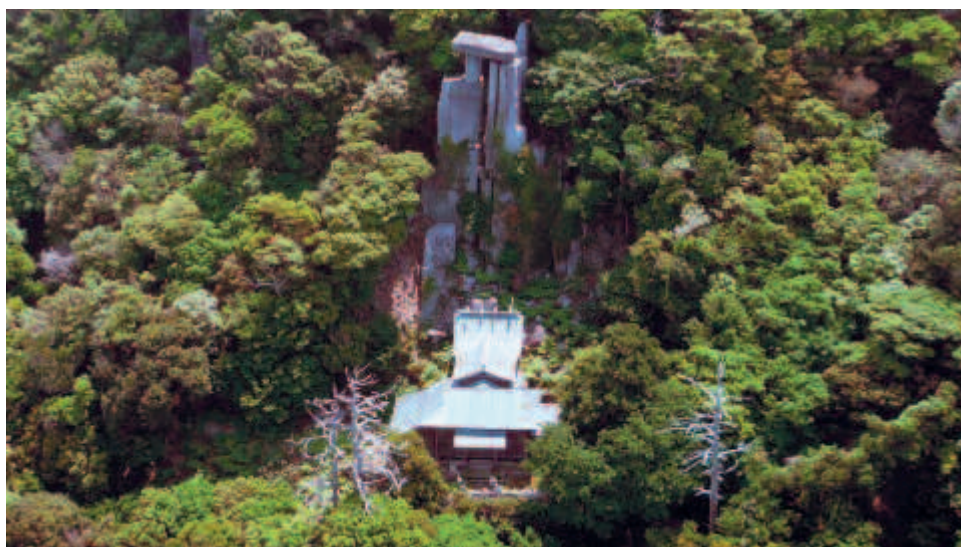


写真 2-150 沖ノ神嶋神社(構成資産008の要素)



写真 2-151 白浜集落(構成資産009の要素)



写真 2-152 大開集落(構成資産010の要素)

#### (IV) 「信仰における新たな局面が到来し、信仰の継続に関する伝統が変容・終焉

長崎と天草地方の潜伏キリシタンは、日本の開国に伴って来日した宣教師が長崎に建造した大浦天主堂において、宣教師と再会した。1865年に長崎・浦上村の潜伏キリシタン 10 数人が大浦天主堂（構成資産 012）を訪れ、そのうちの一人が神父に自らの信仰を告白したのであった（信徒発見）。この衝撃的な出来事により、潜伏キリシタンは新たな信仰の局面を迎えることとなった。

各地の潜伏キリシタンの指導者は密かに大浦天主堂を訪れて宣教師と接触し、宣教師不在の中で自分たちが授けてきた洗礼の有効性及び教理の正当性について確認を行った。各集落では、宣教師の指導下に入るのか、約 2 世紀半に渡り継続し続けてきた信仰の在り方をそのまま継続するのかについて選択を迫られる事態となり、同一の集落内で潜伏キリシタン同士が対立する事件も起こった（出津集落の「野中騒動」）。

宣教師の指導下に入ることを決めた人々は、江戸幕府の方針を継承した明治政府が禁教政策を継続していたにも関わらず、自らの潜伏キリシタンの信仰を公然と表明するようになり、取り締まりを担当す

る政府も黙認の姿勢を取り続けることが困難となった。その結果、再び潜伏キリシタンへの弾圧が強化され、摘発が相次いで発生した（「浦上四番崩れ」及び「五島崩れ」）。しかし、明治政府による潜伏キリシタンへの弾圧に対して西洋諸国は強く抗議したため、1873 年にはついに日本においてキリスト教が解禁されることとなった<sup>7</sup>。

これにより、潜伏キリシタンは①宣教師の指導の下にカトリックに復帰しようとする者、②宣教師の指導下に入ることを拒み、引き続き集落内の信仰指導者を中心に従来どおり自らの潜伏キリシタン由来の信仰を続けようとする者（かくれキリシタ

#### 7

1873 年にキリスト教が解禁された時点で、長崎と天草地方に 2～3 万人の潜伏キリシタンが存在したと推定されている。宮崎賢太郎（2001）『かくれキリシタン』、長崎新聞社、P.44.

#### 8

1950 年代の調査によると、解禁当時、浦上などの長崎近郊及び天草地方では大多数がカトリックへと復帰したが、生月では大多数がかくれキリシタンとして継続し、外海地域ではカトリックとかくれキリシタンとの割合が半々、五島列島ではカトリックとかくれキリシタンとの割合が 3:1 となっていたことが判明している。しかし現在では、かくれキリシタンは生月島・平戸島西海岸・外海地域・五島列島の一部にわずかに残るのみである。



ン) ⑧、③カトリックに復帰するか又は従来の信仰を続けるかという葛藤の末に、それまでの信仰から離れて神道・仏教に転宗しようとする者、へとそれぞれ分岐した。

カトリックに復帰して宣教師の指導下に入ったかつての潜伏キリシタンは、各々の集落において、かつての信仰指導者の屋敷などを「仮の聖堂」として祈りの場とした。ほとんどの集落では、禁教期に複数存在した信仰組織がひとつに統合され、集落ごとに1人の信仰指導者の下にひとつずつ設けた「仮の聖堂」において、祈りを捧げるようになった。他方で、集落の中に複数存在した「仮の聖堂」の在り方などから、「組」など禁教期の信仰組織の単位を引継

ぎ、ひとつの集落内に含まれる複数の単位ごとにカトリックの教えに従う集落が存在したことも明らかとなっている。

1865年の外国人宣教師との出会いは、潜伏キリシタンにとってカトリックへの復帰のみならず、それまでの信仰形態の継続、神道・仏教への転宗など、複数の選択肢の中から異なる方向性を見つけ出すという信仰の新たな局面をもたらした。こうして、既存の社会・宗教とも共生しつつ、自らの信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの伝統は変容への転機を迎えることとなった。

1873年のキリスト教解禁後、カトリックに復帰して「仮の聖堂」などを祈りの場

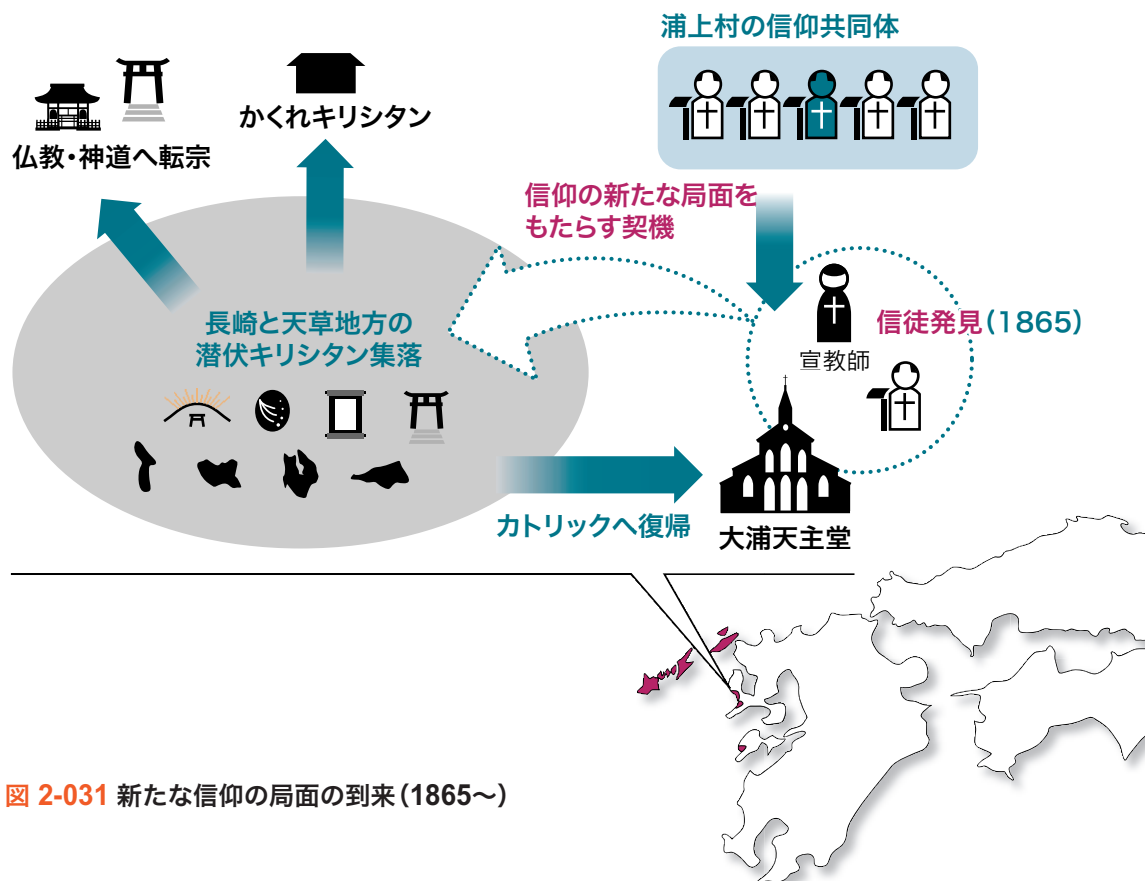


図 2-031 新たな信仰の局面の到来 (1865~)

としていたかつての潜伏キリシタンは、1880年代半ば頃から各集落に素朴な木造教会堂を建造し始めた。これらの教会堂は、信仰の復活を表す存在であると同時に、約250年間にわたる禁教下において形成・拡散した潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統が終焉したことを象徴的に表す証拠でもある。多くの教会堂は、宣教師の指導の下に集落の中心地又は殉教等の記念地に建造されたり、レンガ造又はコンクリート造など西洋由来の建築資材及び工法を用いて建造されたりした。他方で、奈留島の江上集落（江上天主堂とその周辺）（構成資産011）の江上天主堂のように、禁教期に起源を持つ在来材料・工法を用いることにより、湿気を防ぐのみならず西からの強い季節風をも防ぐなど、当該地域の風土に適応して建造された教会堂も存在した。

このように、禁教期に潜伏キリシタンが育んだ信仰の継続に関わる伝統は、ある日（例えば、「信徒発見」の日、禁教の高札撤廃の日など。）突然にその終焉を迎えたのではなく、徐々に変容しつつ最終的に終焉に至ったのであり、一定の期間の「移行期」を伴ったと考えることが適当である。大浦天主堂における「信徒発見」の知らせが各集落の信仰組織に伝わったときが変容の

開始点（移行期の始点）であり、宣教師又は宣教師の指導を受けた者が「仮の聖堂」においてミサ・洗礼などの宗教儀礼を継続的に行うことにより徐々に変容が進行し、やがてカトリックへと復帰した集落の信仰組織が集落内に新たに教会堂を建造する時点で変容の過程は終焉を迎えた（移行期の終点）。このような観点から、潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統が終焉した時期は、各集落の信仰組織の在り方によって異なっていたと言ってよい。





写真 2-153 江上天主堂(構成資産011の要素)

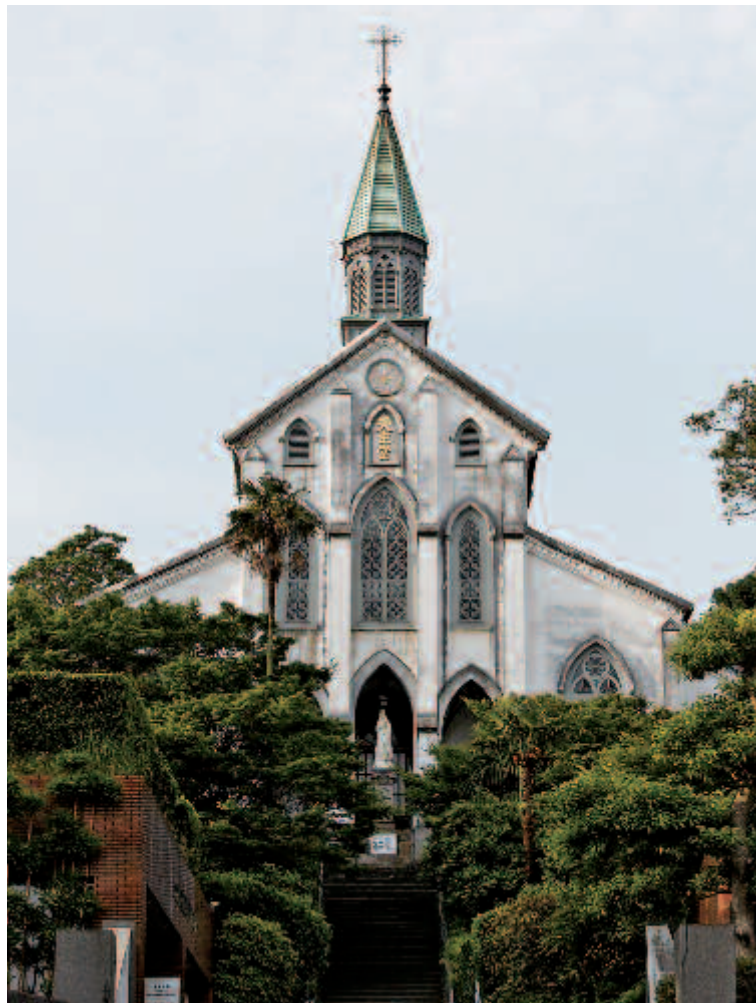


写真 2-154 大浦天主堂(構成資産012の要素)



写真 2-155 崎津教会堂



写真 2-156 旧野首教会堂



写真 2-157 黒島天主堂



写真 2-158 旧五輪教会堂



写真 2-159 出津教会堂



写真 2-160 大野教会堂



写真 2-161 頭ヶ島天主堂

※構成資産の範囲内に建つ教会堂



## 小結：禁教期の伝統を背景に形成された遺産

禁教期に育まれた潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統を背景として、長崎と天草地方には世界的にも類例をみない独特の遺産が現在に継承された。これまでの調査研究により、この地域には 200 を超える禁教期の潜伏キリシタン集落（又はその跡）が確認されている。これらの集落（又はその跡）は、16 世紀に起源する信仰組織の下に潜伏キリシタンが自らの信仰を密かに継続しつつ生活を営んだ場所である。そこには、信仰指導者の屋敷跡、墓地、密かに祈りの場とした聖地・神社、所属することを強制された仏教寺院、生業の場となった農地・林地・海域など、既存の社会・宗教とも共生しつつ信仰を継続しようとした潜伏キリシタンの伝統の証拠となる場所を含むのみならず、解禁後に伝統が変容してカトリックへと移行したことを示す「仮の聖堂」の跡、そして潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統が終焉したことを象徴的に表す教会堂などの諸要素が含まれている。

なお、長崎と天草地方には、これらの集落から派生し、潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統の名残をとどめるものとして、カトリックには復帰しなかった「か

くれキリシタン」の遺産が継承されている。しかし、それらはいずれも 20 世紀以降に大きく変容を遂げた宗教及び習俗に関わる無形の所産である。そのため、禁教期の伝統を示す不動産として代表的な事例とはなり得ないが、本推薦資産の顕著な普遍的価値を説明する上で多くの有用な情報を含んでいることから、本推薦書の作成に当たっては逐次参考とした。

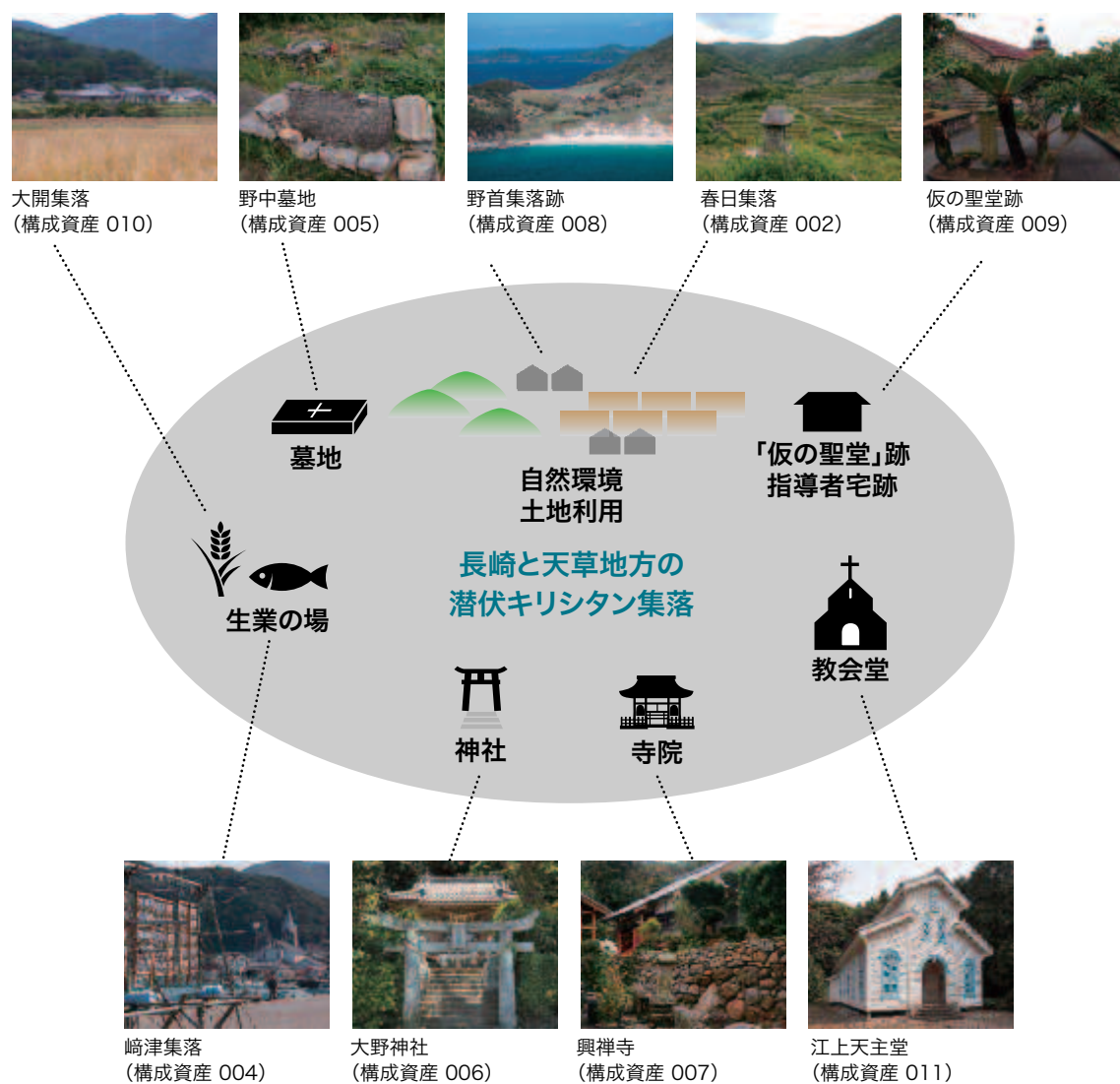


図 2-032 禁教期の伝統を背景に形成された「集落」の概念図 (1873～現在)



表 2-001 潜伏キリシタンに関連する主な出来事（年表）

1498	ヴァスコ・ダ・ガマ、インドに到達
1511	ポルトガル、マラッカ占領
1549	<b>フランシスコ・ザビエル、日本へキリスト教を伝える</b>
1550	ザビエル、平戸にて布教
1562	平戸の春日に「慈悲の組」設立
1563	大村純忠、洗礼を受ける（日本初のキリシタン大名） 同年、領内で集団改宗が行われる
1580	島原半島南部の領主である有馬晴信、洗礼を受ける
1587	豊臣秀吉、伴天連追放令を発布
1597	捕らえられた宣教師、信者ら 26 名が長崎で処刑される（日本二十六聖人の殉教）
1603	江戸幕府が成立
1604	有馬晴信、原城を完成させる
1614	全国に禁教令発布
1622	元和の大殉教
1627	「絵踏」の開始
1635	寺請制、全国で実施
1637	<b>島原・天草一揆</b>
1641	オランダ東インド会社の商館、平戸から長崎の出島に移転 海禁体制の確立（いわゆる鎖国）
1642	五人組制によるキリシタン禁制開始
1644	最後の神父が殉教
1657	大村での郡崩れ
1650s-80 年代	豊後崩れ
1660 年代	濃尾崩れ
1790 年代	浦上一番崩れ
1797	<b>大村領外海から五島列島へ移住開始(全体で約 3,000 人)</b>
1805	天草崩れ
1838	教皇庁、日本での宣教をパリ外国宣教会に委託
1842-73	約 15 年おきに浦上で崩れが発生(浦上二番崩れ、浦上三番崩れ、浦上四番崩れ) パリ外国宣教会の宣教師が来日
1859	長崎が開港
1862	日本二十六聖人の列聖
1864	大浦天主堂完成
1865	<b>「信徒発見」</b>
1868	明治政府が発足 五島崩れ
1873	禁教令の撤廃（キリスト教の黙認）
1889	大日本帝国憲法（信教の自由を明記）
1918	江上天主堂完成

# 日本のカトリック信仰に関する見解

## 16 世紀に世界に宣教されたキリスト教と日本の特異性

大航海時代に世界各地へと進出したポルトガル及びスペインは、進出先においてキリスト教の宣教活動を行った。進出先でのキリスト教の受容の在り方は、これらの 2 国によって植民地化された地域と植民地化されなかった地域との間で、それぞれの社会構成を階層的に見た場合に大きな違いが見られる。

植民地化された地域では、キリスト教徒である外来の支配者層の下に、在来宗教からキリスト教への改宗を強制された被支配者層が位置するという二元的な構造が見られる。これに対して、植民地化されなかった地域の代表例である日本の場合には、次のような特徴が見られる。日本でのキリスト教の伝来期においては、本文 179 ページで示すとおり、外国人宣教師はまず地域の日本人の支配者層をキリスト教へと改宗させ、宣教活動の許可を得ることにより被支配者層の日本人を集団的に改宗へと導いた。しかし、中央政権そのものを改宗させるには至らず、非キリスト教徒が社会を支配する構造には揺るぎがなかった。禁教

が開始した後の 17 世紀から 19 世紀にかけての時期には、非キリスト教徒の中央政権を頂点として次に上位被支配者層（禁教期の初期に棄教したキリシタン大名及び武士の一部を含む。）が存在し、さらにその下に仏教徒から成る下位被支配者層の民衆が存在した。この下位被支配者層の中には、長崎と天草地方の潜伏キリシタンが含まれていた。

このように、大航海時代の列強諸国の植民地とはならなかった日本では、キリスト教が主体的に受容された後に、キリスト教を植民地化の脅威と見なしてその排除を行う中央政権の政策の下に民衆の間で密かに継続した点で、植民地となった他の地域におけるキリスト教受容の在り方と大きく異なっている。とりわけ日本の禁教期における潜伏キリシタンの信仰の継続に関わる伝統は、信仰が発覚しないよう秘匿することを基本としてきたのが特徴であり、地域に固有の文化との融合（シンクレティズム）を生み出した植民地におけるキリスト教とは、その性質が全く異なっている。



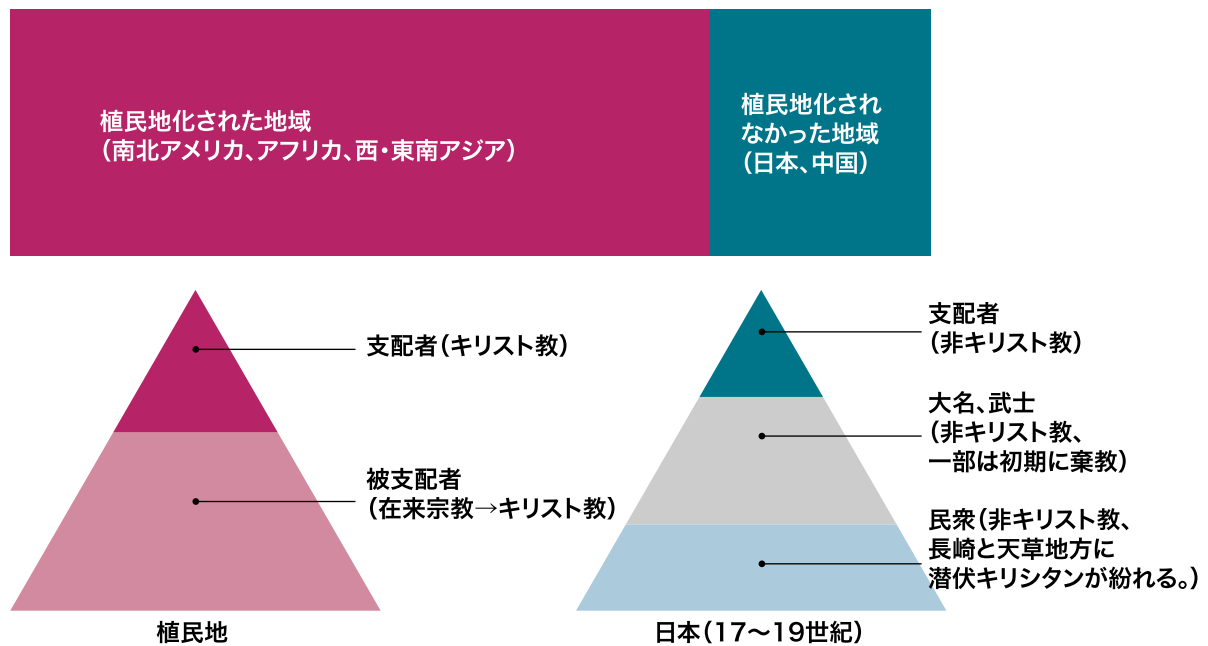


図 2-033 宗教階層の比較



写真 2-162 ゴアの教会群と修道院群(インド)



写真 2-163 チロエの教会群(チリ)

‘blank page’